
黒と彼らの関係性

各務 廻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒と彼らの関係性

【Nコード】

N0372V

【作者名】

各務 廻

【あらすじ】

「——あれは、生きる災いだ」

多くを敵に回した狂人 黒 が 魔神 とともに消えて数年、物語は動き出す。

魔都 によって突然変異した？生物？が存在し、数多の組織の思惑が交差する、魔術と異能と異形が静かに蔓延る現代。

本来辿るべきだった道筋から逸した、魑魅魍魎跋扈する世界。

そんな舞台で繰り広げられる、黒 と関わり縁を結んでしまった人々の、血にまみれたゴタゴタしい恋と非日常的な日常が巻き起こる。

す擾乱譚、ここに開幕！

黒と彼らの関係性／サザンカの語る黒／

—— ああ？ 俺と黒との関係性？

……… 何でそんな事を聞く？ …… はあ。まあいいだろう。――

―― ふざける。手前の方は死ね。

やっぱり止めた。……… グダグダ言ってねえでとっとと失せろ。

関係性、関係性か。舌の上でその単語を転がしてみる。

破滅の黒 と俺との関係を語るなら、まず最初に言っておくべき事がある。

俺にとって、奴は憎むべき相手だ、という事実だ。

感情論抜き立場はあいつらの知っている通りだ。それを鑑みれば、世間一般と言うモノに当て嵌めればこれは異常な事なのだろう。そして関係性のみしか知らないのであれば、何かがあったのだろう、と共感めいた感情を抱かれるのだろう（他人からの同情など、気色悪い事この上ないが）。

しかし、少しでも奴について知っている者が、奴に微塵でも関わった者がこの言葉を聞けば、評価は一転する筈だ。

ああ、成程、と。

思えば昔から奴はそういう性格だった。誰から恨まれても可笑しくない。恐らく親から子から伴侶から友から隣人から仲間から部下から、どれだけ親密な関係であれ、恨まれていても納得されるような人格の持ち主なのだから当然と言えるのだろう。

これだけ聞けば最低の最低、外道下種下劣と言っただけいい人物であ

ると想像するのだと思う。しかし意外な事に、奴は愚か極まりない人物ではあったが、非道と切り捨てる事の出来ない人柄でもあった。アレはある種の人情家とも言うべきなのかもしれない。事実、アレを慕っている奴らにすれば、敬愛と尊敬を以って接するべきなのだろう。その代表例を思い浮かべてげんなりする。あの女は神でも崇めているつもりか。

兎角、苛烈な性質ではあったのだと思う。そして他者にのめり込み過ぎる。いや、あるいは自分に対して淡泊だったのか。知る気などこれからもないし、今となっては知る術などないのだが。

奴を知る者なら等しくこういうだろう。

黒に常識など通用しない、と。

それは黒に関わった者の共通の認識である筈だ。

少なくとも敵も味方も関係ない、などと武器を携え容赦なく叩き潰しながら、戦場のど真ん中で叫ぶ阿呆は空前絶後であつたに違いない。そして実行する阿呆は過去現在未来を通して奴一人だけだったに決まっている。他にそんな阿呆がいるのならこの世はとうに崩壊しているだろう。

殺されようとする事に欠片も意識を向けず、ひたすら自分が知りたい事だけに目を向け続ける。或いは、子供だったのかもしれない。誰よりも夢を見続けた、恐ろしく性質の悪い子供であつたのだろうか。納得してしまうあたり、本当に如何ともしがたい奴なのだと実感する。関係性がある事自体が嘆かわしく思えてきた。

実力も、行動も、性格も、精神も、立場さえも規格外だった。奴に言わせれば、俺の方が問題外だそうだが。すぐさま問題外と言うのは弱いという事か、と詰め寄った。本人は褒めているつもりだったようだが、それこそ問題外だろう。もう少し語彙のセンスを磨いてこい。

昔、恐らくはああいうのを最強と評すのかもしれない、と薄ぼんやりと思つた事があつた。あれほど情けなく、下らなく、そして他人頼みな『最強』など笑い草だな、とも思つたが。

——ずっと、思つていたのだ。黒を憎み続ける日々が続くのだと。

憎むには相当の労力が必要となる。常に燃料を炎に投げ込み続けなければいけない。時間が経てばどんな感情も摩耗していく。常に同じ感情を抱き続けるには、常にその感情を新しく発生させ続けなければならぬ。少なくとも、俺にとつては。

だから、関わり続けている者でなければ、一生憎み続ける事など出来はしないのだ。

俺は、ずっと黒が生き続けるものなのだと思つていた。少なくとも、俺の一生の間で死ぬことはないのだろう………そんな風に、無根拠に信じていた。

「人は死ぬものだよ」

そう言い続けてきたのは、他でもない黒であつた筈なのに、だ。

——黒が死んだ、という訃報は、世界に知れ渡る少し前に俺の下に届いた。

その時には全てが終わつていた。

黒が成した事、成したかった事、成せなかった事。それらと同じように横たわる亡骸を見て、あの日確かに絶望が胸を覆ったのだ。

奴は、間違いなく全てを承知していたのだろう。それでも、黒は始まりから終わりまで謝罪を口にする事はなかったそうだ。それはある意味で救いであり、そして絶望だった。……… どれだけ周囲が悲しんで、苦しんで。それでも一片の後悔もない。そういう事だったのだろう。

裏切られた、と思った者もいたのかもしれない。そこには何故、という言葉が渦巻いていた。黒の顔に浮かんでいた微笑みは、全くの逆効果でしかなかった。

その時、俺が思ったのは、恐らくそこにいる全員とは違う事だったのだろう。

それは、俺と黒にまつわる全ての間に、決定的な溝を穿つ事となる。

一つだけ、ずっと思っていた事があった。

なんとなく機会を逸して、そして今も掴めないままの疑問だ。

とても些細なことではあるが、この疑問が溶ける時、俺と黒との間に穿たれた楔も溶ける事が出来るのではないか……… そんな思いが胸の内に燦っている。勿論、そんな事を知っているのは俺だけであり、そしてその疑問を俺が口にする気がない以上、この疑問は永遠に溶けて消える事はないだろう。

俺にとって黒は憎む相手だ。

それでも、黒がいなければこれは単なる一人相撲でしかない。黒

を真正面から見る事の出来ない今、この憎しみは何時までこの胸を
焼き続ける事が出来るのだろう。俺は、それが恐ろしくてたまらな
かった。

時々思うのだ。

——俺は、アンタにこの疑問のうたを解いてほしいんだ。

そうすれば、きっと——

プロローグ：半年前

深夜。かつては草木も眠ると言われる時間帯であれ、現在の街は眠る事を知らない。

車の往来、夜を照らすビル、目まぐるしく瞬くネオン群、道路をいきかう人々。

人口の光が星と月明かりを追いやり、暑苦しい生の吐息が充満した人の営みに満ちた場所。

その薄壁一枚を隔てた場所で、ソレは絶望に沈もうとしていた。

「が、ぐうつうつうつ……」

寸先さえ窺えない薄暗い路地で、人影が、苦痛に唸った。

獣のように唸り声を漏らし、身を擦るように転がるそれは獣に等しい姿であった。何も人と思えぬような唸り声、はたまた無様な様を論^{あげついで}った言葉ではない。むしろ称賛としての意味合いである。

本質的な意味で、それは獣と呼ぶに相応しいカタチをとっていた。

その身体からは濃厚な鉄錆の芳香が漂っている。血の匂いは既に体臭に等しく、先ほど付着した鮮血も既に古い匂いと混じり合っていた。その指先は泥と血が混じり合って爪を黒くと染め上げ、元の皮膚の色が何だったのか判別がつかないほど有様であった。

「さて」

暗闇から声が来る。

淡々と。重苦しく。静かで。冷やかな。

恐ろしい場所へと手招きする悪魔の如き人ならざる声が、路地を通り抜けた。

「う、うううううう」

地面を捉える四肢には力が漲り、ざんばらの髪は逆立ち、喉の奥から声が漏れる。

獲物を狩らんとするその姿は、肉食獣のようであり——しかしその実、追いつめられ爪牙を失った、憐れな動物の姿だった。

その目に灯る感情は見間違えのない程明確な怯えと恐怖。抑制しようのない原始的な感情は全身を巡り、絶えず冷や汗と脂汗が浮かび、衣服をぐつしよりと濡らしている。さらに、指先までが極寒の僻地に投げ込まれたかのように、カタカタと遠目からでもよく分かる程震えていた。

「石津谷^{いしづや かすすけ}和介君。君はここ数力月に及びストーカー行為に耽つていようだね。耐えかねた相手方から依頼があつてな、——『どんな形でもいい。ストーカー（キミ）を排除して欲しい』、と」

名を問うことなく、罪状をひけらかす様に声は紡ぐ。

くつくつと、嘲笑が漏れ響く。実に楽しそうなその声音は、舌舐めずりをせんばかりの愉悦に濡れていた。

——だというのに。空虚なほど、声は空々しいほど寒々しく耳朶を打つ。そのアンバランスさが、獣をさらなる恐怖へと引き摺り込んでくる。

「これまでも何度か？その手？の業者に頼んでいたようだが、君のその？特性？のためにどうにも上手くいかなかったらしくてね。ま

あそこら辺は君の方がよほどよく知っているだろう。何せ当事者なのだから」

そう。影の語る通り、石津谷は比喻なく獣としての特性を持っていた。

彼の爪は鉄を裂き、腕は木々を薙ぎ払い、足はその身を高々と天へと踊らせ、その牙は獲物をやすやすと食い千切る。単純な暴力だけではなく、視力、聴力、嗅覚、あらゆる面で彼は獣に近い。

既に等しいと称してもいいほどに、どれかがではなく、持てうる身体機能全てにおいてあらゆる獣に匹敵していた。

しかし、障害を易々と破壊したその力が、目の前の人物には通じない。

それは、石津谷にとってまぎれもない恐怖だった。

なんで、どうして、どうなって。ありえないありえないありえない。確かに爪は届いた。この腕が、爪先が、その血の詰まった肉袋に届いた感触が確かにあった。なのに何故だ。何故だなぜだなぜだなぜだなぜだなぜだなぜだなぜだ、何故！

何故目の前の男は何事もなく俺の目の前に立っている！？

その身体は容易に人を引き裂き、食い殺す——はずだった。

十数と繰り返されたその条理を軽々と無視した存在に、石津谷和介という名の獣は言いようのない感覚を、感情を深く深く刻み込まれる。

不運な事に、その感性さえも石津谷は獣に相応しい性能を得てい

た。

影と出会った瞬間からその鼻腔を擦る、言いようのない^{かおり}馨に皮膚が泡立つ。その馨の意味を本能で理解し、絶望が身体を捉えた。

——それは、死の匂い。圧倒的な強者から、万に一つも逃れ得ぬという現実を突き付ける、絶望の馨だった。

「障害は乗り越えるもの、という信条の下での行動だったんだろうが、いささかやり過ぎたようだな」

翩る声色がゆっくりと変質していくのを、一方的に聞き続ける。聞き続け、させられる。

先ほどまで囃し立てるように踊る声は見る影もなく、平たく無機質な音へと変わっていくのを聞き届ける。

「依頼ならまだ趣味の範囲で済んだんだが」

そこで、獣は声の根幹、影を突き動かす感情を理解した。

「——あの子に手を出したのなら、相応の覚悟を負ってもらおう」

疑問ではなく断定で影は静かに告げた。

あらゆる意味で一切の余地を与えぬ、蹂躪の宣告を。

そして、暗闇から影が現れる。否、暗闇が退き狩人が幽かな月光に照らされた。

獣が初めて見る事となったその貌に浮かぶのは、紛れもない憤怒。口元に刷かれているのは完璧な微笑である。しかし、ただ一つ以外

を読み取ることが不可能なほどの激情を毛の先にまで満たしきり、それはそこに居た。

空気を揺らめかせる感情の余波が、獣の終焉を彩るように踊る。そこから濃密な死の響が咽んばかりに匂い立っていた。

そこでようやく獣は悟る。

自分が何に手を出してしまったのかを。

自分は、何に手を出してはいけなかったのかを。

一話：彼と彼女の関係性

「こちらが御依頼の品となります」

渡された封筒、その中には幾枚もの写真が入れられていた。所謂？決定的証拠写真？である。

何の証拠写真か。――ずばり、『浮気現場』。それも言い逃れの出来ないような、盗撮紛い（というか普通に盗撮だろう、コレ）の色々な意味で際どい状況証拠である。

ディープな場面も十数枚撮られており、一体どうやって、と慄く事間違いない犯罪並み（というより完全に犯罪だと思う。口出しする気はないが）のそれらは、重ね合わせれば人を殴り殺せる厚さになるほどの枚数だった。

恐ろしい。プライベートとはこうも容易く暴かれるものなのか。

その矛先が自分に向く可能性を（思わず）考えて、写真の整理をしている最中薄ら寒くなった。

封筒には丁寧懇切に対象の行動や浮気相手の経歴を筆頭にアレコレまで取り揃えられた書類も同封されているのだが、これも碌でもない手段で収集されたものなのだろう、と思われた。

多分、犯罪ギリギリのグレーゾーンを突き進むような裏技である可能性が濃厚な線なのだろう。………確証ではないのは、今現在に至るまで事実確認を取っていないからだ。

何度か聞きそうになった事はあるが、これから先も聞く事はないのではないだろうか、とも思っている。主に、自分の社会的安全と心的安定を考慮して。後、知らなかったという事実さえあれば、何かあった時どうにかなるのでは、という計算も存在している。

依頼人はそれらに目を通していくほど興奮していき、最後にはこちらが気の毒に思うほどしおらしく泣き伏せてしまった。か細く「なぜ」「どうして」と呟く様子は、さながら美貌の未亡人の如く儂げな姿である。

表面には一切出さず、心の中でだけ溜息を吐いて、思う。――
ホント、人間ってコワイ。

ほんの少し調査を齧っただけの彼女にもよく分かった。あの仮面の下にあるとは思えない程渦巻くドロドロとした感情と、ドン引きような計算が繰り広げられているのだ。しかしその事実を知ってもなお容易く透けて見せないのだから、本当に恐ろしい。それでも知ってしまったえばその同情と憐憫を誘う姿でさえ醜い擬態に見えてしまうのだから、人間とは不思議なものである。

この認識、そして線引きある付き合いしか出来ない悪癖（と、自分では思っていないのだが）が拍車どころかジェットエンジン搭載で加速させ、『他人を見たらまず疑え』精神を大いに育んで下さった諸悪の根源――ドス黒所長は、慰めているのか楽しんでいるのか（後者に100円）分らない態度である。こんな人物相手に、よく依頼人が来るものだと思え半分感心半分で話を聞き流す。

――いや、やっぱり来るんだろうなあ、と思い直した。

何せこのご時世、何の後ろ盾もなく（それこそ 叶え屋商会 にすら登録していない）、従業員以外まず情報が漏れる事のないような極細事務所でありながら、依頼達成率100%など他に存在するのだろうか。少なくとも、彼女はここ以外知らない。

依頼は週に一度ある程度。大体は探偵がしそうな浮気調査などや、犬猫ではない人探し（何故か犬猫ペットの類は一回もない）。そして後ろ

暗い背景の依頼である。

今回の様な浮気調査などの泥沼、それらの何らかの？後始末？を求める者は多い。そういう所は実に＜探偵業＞らしくなかった。いや、そんなもの求めてどうする私、と突っ込みを入れる。

しかし、そんなモノを態々「金になるから」の理由で平気でやってしまのは理解しがたくもあつた。確かに金にはなるが、泥仕合の後始末など人間の汚い部分目白押しである。面倒くさくはないのだろうか、と首を捻った事は数度ある。だが——と結論はその度、彼女の脳裏にどこからともなく飛来してきた。

——この人に理由はないだろう。ただ単にみたいだけなんじゃないの？

毎度全く同じである。それで毎度助手である彼女はあつさり納得するのだから、所長の性格は推して知るべし。

そんなドロドロとした依頼とは一線を描すようで、実は根本的には同じではないのだろうか、と彼女が邪推（しかし本当に邪推であるかは不明）しているのが最後の後ろ暗い依頼だった。

後ろ暗い、とは人死にや怪奇現象絡み。他は——魔術や異能、異形関係。

——一番安全なのが浮気調査筆頭の、それもベタベタにドロドロな、と言うのは皮肉だが、しかしそれでも、最後の依頼よりは1000倍マシである。

何せ揃いも揃って、今までどの業者も放り投げて、最後に依頼人がこの事務所に辿りつく……などと言う？訳アリ？の依頼である。碌なものである筈がない。

そういった？訳アリ？の依頼は、恐らく他の同業者と比べて圧倒的に比率が多い筈だ。専門としてるところと比べる事など本来なら可笑しい筈なのだが、どうやらこの事務所が？そういった筋？の

者たちからも一目も二目も置かれている事を彼女は知っていた。正確には知ってしまった。

……嫌な事まで芋蔓式に思い出してしまった、とその時にまつわる出来事を思い出して即座に後悔する。そのままその時垣間見せた所長の表情も思い出し、顔を青褪めさせた。下腹辺りががきゅ、と冷え込んだ気がする。

——ああ、うん、あれだ。彼女は曖昧な表情で、心の中で呟いた。普段から堅気らしさは全くないが、あれは悪魔めいてどころか魔王じみた表情だった、と回想する。断じて笑顔や微笑みに分類してはならない嗤い方だった。

この事務所に流れ込んでくる依頼に真つ当なモノはない。

それは、嫌というほど身に沁みていた。

何せ——その？不真つ当さ？が原因で、彼女は此处で働く事になつたのだから。

どこにでもあるような話で、そもその原因はストーカーだった。ストーカー。Stalker。特定の他者に対して執拗かつ粘着

質に付きまとう者。百害あつて一利もない変質者。最低。最悪。好意または悪意をもって付き纏い行為を繰り返す害悪。という意味でのストーカー。

誰が。変質者（性別男）が。誰を。私を。

そして、付きまといわれる事に怯えた私はどうにかしよう？とある？業者の方々の下へと転がり込む事となった。

もちろん、かなり迷いはしたものの、かなり初期に警察にはいった。適当にいなされて終わりだった。もしレイプされたら覚えてろよ手前と怒鳴ったのは今では忘れ去りたいいい思い出だ。

周囲に相談はした。そしてそれほど日も置かずには私は見事な人間不信に陥った。いまでも心を許せる？友人？はかるうじで一人引つかかっている程度だ。

お金を払って、藁にも縋る思いで頼み込んで。しかし、一向にストーカー被害が収束する気配はなく。

しばらくして、手には負えないからと別の業者に依頼が回され、それが片手を数えるほどになる頃には、自分の見通しが予想以上に甘かったのだと思い知らされた。

エスカレートする被害。

いっどこから見られているのか分からないという恐怖。

常に怯え、大学から遠のいて久しくなった頃。

いくつかの証拠を警察に持っていったも、それでも腰が重い国家公務員に対して既に諦めと汚物を見る心地になっていた頃。

それでもどうにかしたくて足掻けば足掻くほど、アリ地獄に嵌っていくような状況に陥っていた。

その頃には見事にすっからかん。最後の業者には騙されて？からだで？支払う事となってしまうた。——まあ、正確には？最後の

手前？の業者で、支払う前に救出されたわけなのだが。

どうやら『下手な鉄砲数撃ちや当たる』戦法はどうか功を制したようで、どうやら業者の一人が？とある伝手？で依頼を回してくれていたらしい。それを知った時、私は神に祈る気持ちでその人に感謝の念を捧げた。無神論者ではあったが。

そうして詐欺師——そう、腹立たしい事に詐欺だったのだ。人を食い物にして、さつさとんずらする気だったらしい。それをその場で聞いた時、私はそいつの×××を踏みつけた。ちなみにその時履いていたのはピンヒールだった。

それからの事はあつという間で、正直何があつたのか、詳細は知らされる事はなかった。

ただ、私が二度とストーカーに悩まされることはない、ということだ。

当時の私にとってそれは十分な救いで、だからその報告を聞いた時その場で崩れ落ちて子供さながら大泣きしたのは、仕方がないと言えよう。

さて。これで終わればハッピーエンド。自分を救ってくれた探偵にときめきながらもさようなら、彼女は魔術や異能や異形とは無縁の生活を送り続ける事となるだろう。普通は。

しかし、当時の彼女はすっからかん。その日を暮らしていくにはかなりぎりぎりだが問題はなく、しかし報酬など到底払えるような金銭状態ではなかった。

そう、報酬である。

心身ともにぼろぼろのいたいけな女子大生なのだから手心を……という良心の持ち主ならどうにかなっていたのだろう。

詐欺師のような下種ではなかったが、しかし探偵は鬼畜なりアリストだった。

つまり、ないものは捻り出せ。捻り出せないなら労働力で賄え。

……はい、以外の選択肢は、彼女には、なかった。

余談ではあるが、彼が探偵ではないと知ったのは、目出度く彼の事務所で働く事となった初日の出来事である。まあ、探偵らしい風貌では全くなかったが。

その後、仲介料をせびりに来た某業者とのやり取りを目撃した私は持っていたお盆を高々と振り上げる事となる。

そして、その業者の連れてきた厄介事が、私に魔術を異能を異形を、現実のものであると叩き刻む事となった。

「——先日貴方が対処した？サンプル？を回収しに来ました」

業者と入れ替わり現れた黒服が挨拶ぬきで発した言葉がこれだ。

何の事だと白黒していると、探偵もとい所長は「知らん」と素気無くあしらった。対応する気ゼロ、接客業に永遠にむく事はないだろうと思わせる言い方である。

来訪者の対応も（つまり追い返す事も）業務に入っていた私は、そのままお帰りくださいと言おうと

「先日のストーカー行為をしていた異能者です」

する前に。ぎくり、と体が固まった。

いのうしゃ、という訳の分からない単語、の前に。付属した、『ストーカー』という単語。

——それ、どういう意味。

固まったまま相手を凝視する私に、男は——

「知らん。帰れ」

聞きなれない轟音が、男を吹き飛ばした。ように見えた。

実際には所長が男を問答無用で蹴り飛ばしただけだったのだが、目がついていけず、所長の長い脚が二重の意味で真横に突きだされているのを見て理解できた速さだった。足を見ていなければ、私は今でも所長は念動力の持ち主だと信じていただろう。

驚いた。訳が分からなかった。混乱した。それ以上に、恐怖した。所長の暴虐に？ 掘り返されるトラウマに？ 黒服の言動に？ 置いてきぼりの現状に？

……聞いた事もないほど、冷たく、冷たく冷え切った、苛立ちと怒りにまみれた、所長の声に。

その頃の私は所長に馬車馬の方がまだマシと断言できるほど扱き使われており、トラウマに怯えている暇も、過去に囚われている余裕もないほどの忙しさだった。それはトラウマが癒えたのだと錯覚するほどに。余談だが、後にそれは所長の気遣いであつたのだと告げられたのだが……いくらなんでも嘘臭く思えたのは仕方のない事だろう。

心が剥き出しになったままの状態で、真正面ではないとはいえ、今まで生きてきた中で最も凶暴で真っ直ぐで恐ろしい感情に触れて、私は身も心も竦んでしまった。

「帰れと言ったんだ。手前らに協力する事なんざ、何一つねえ」

後ろから声がする。音もなく下ろされた足で、一步。また一步。革靴が鳴らす音だけで、ここまで威圧感を持てる人を私は知らない。

私より二歩先、斜め前の位置で靴音が止む。表情は、恐ろしすぎて窺えなかった。

「言って分らんようなら実力行使させてもらうぞ」

いやもう実力行使ですよねこれ——なんていう余裕はなかった。所長が恐ろしかった、からではない。

それもあるが、どちらかと言わずとも黒服が理由だった。

肉が裂け骨がひしゃげるような歪な音とともに、それを見た。

「ひいつ!？」

血塗れの黒服が、さらに一步詰め寄った所長の肩越しから見える。いや、血だけならまだいい。よくないが、それでも——皮膚から鱗が生え、背中から角のようなモノが突き出て、顔がネズミと鳥を混ぜたような形になって、骨格がバキバキ変形するのを目撃するよりは、数段ましだった。

その上後ろでなにかうねうねと……——き、気持ち悪い動き
気持ち悪い! 無理、生理的に無理!

この時点で脳はショート済みである。常識や物理法則や質量保存や生物としてあり得ない、あらゆる価値観を一斉に粉碎して余りある光景に、私はついていけなかった。

「ぎ、貴様が、処理した男は、回収せねばならん。隠し立てすれば、
ぎ、貴様もただではすまんぞ」

「一般人巻き込んでそれか。道理であんな事態なのに俺の耳に届く
のに時間がかかったわけだ。——ああ、架谷さん下がってて」

言つべき事は山ほどある気がするのだが、いかんせんもう何も考えられない状況で、所長の言つとおり従う以外私に道はなかった。

数歩じりじりと後退し、

「男はどこへ」

「うるせえ鳥人もどきが」

言い終わる前に勝負は決していた。

おそらく、私はその時の衝撃を一生忘れる事が出来ないだろう。化け物と称しても問題ない相手に、何の躊躇いもなく一歩踏み込んで文字通り一蹴する。まるで漫画かゲームの世界が再現されたかの様な光景だった。

気付いた時には元黒服の鳥男が磨き上げたばかりのピカピカの床に倒れ伏し、それを下らないものを見るように睥睨する所長が立っていた。

勝者は、どちらがとは言うまでもなかった。

その後、角と思われた鳥男の翼を引つ掴み、所長は事務所の奥へと消えた。そこで何が行われたかは知る由もない。

私はただひたすら黙々と、何も考えなくていいように応接間の片付けに没頭していた。何故か床を突き破って生えた植物を引っこ抜き、落ちた羽や赤黒い何かを拭ってはゴミ袋に投入する。その作業をひたすらに続けていた。

ただ、魔術や異能や異形が存在する。説明を一段飛ばししてまざまざと見せつけられた私には、逃げの余地などどこにもなかった。

この話には後日談がある。

一つは、鳥男と入れ替わりになった某業者は、実は事務所へ手引きしていたらしく、とぼつちりを恐れてさっさとご退場されたりし

い。その事実を知った時、何も持っていなかった私は右ストレートで彼の謝罪に無言で返答した。

もう一つは、魔術や異能や異形が存在するという事を強烈なインパクトとともに知らしめられた私を、所長がそういう関係の仕事でも使い始める事となった事である。抵抗は無意味だった。

ただ……業者曰く、遅いか早いかだけの差異だっただろう、との事で、どの道逃げ道がなかったと判明した時、私は膝から崩れ落ちる事となった。

以上が、私こと架谷めぐみと、所長こと橘さんとの出会いと関係性の物語である。

この後、彼が真正正銘の大魔王様だったり、傲慢不遜理不尽暴虐DV男であるとかどうしようもない鬼畜であるとかその筋の人さえびびる恐ろしい人物であるとか色々判明するのだが、判明するたびに私の人生設計に罅が入り、ますます弱みを握られていく事となるのだが、この時点では知る由もまして回避する余地もないのだった。

ただせめて。

ストーリーや鳥男の末路には興味はないが、どうか私だけは犯罪沙汰には巻き込まれていませんように——と願うしかない今日の頃である。

二話：上司の天敵

「架谷さん、出かけてくるから」

橘がこう言って出かけるのは大して珍しい事ではない。仕事柄外出が多いのは架谷の知るところであった。

「面倒な客が来たらコレ使っても叩きだして」

……ただし、この文句が来るのはこの半年の間でも2回だけしかなかった。同時に、『コレ』と言われて渡される事も。

つまりはあの人が来るのだらう。その人物を思い描いて苦笑してしまう。

この人でも苦手な人がいるんだなあ。やっぱり人間だもんね。

「いつてらっしゃい。お帰りは何時頃になりますか？」

「知らん」

出た。相当に機嫌が悪いなと心のメモに書き留める。最近気づいたが、橘の「知らん」「分からん」は大概機嫌が悪い時で、低空飛行であればあるほどのつぺりと低い声で言う。今は冷気を感じるほど低かったので、ここ最近稀に見る機嫌の悪さだ。これもまた過去2回と同じで、尚々確信を得てしまう。

相手の人、大丈夫かな。

しかし対象がどうなろうと架谷に影響はなく、また訴えられるようなヘマをする上司ではないので、その心配はあっさりゴミ箱行きとなった。おそらく二度と帰ってくる事はないだろう。

非情と言えば非情で、冷淡と言えば冷淡で、淡泊と言えば淡泊なのが架谷の特徴だった。余計な心配はストレスの元、という家訓が捻子曲がった結果ともいえる。

「いつてくる」

頭が一瞬重くなって、そしてすぐに軽くなる。

橘に目をやれば、脇目も振らずに事務所から出て行くところだった。振り返る事は、ない。

「……………そんなに苦手なのかな」

そつと頭に手をやる。撫でるでもなく、その大きな手を架谷の頭に乗せる（叩く、というのとは違う）のも、これで3回目だった。まるで儀式のようだと思いがち、いや本当の儀式ってもっとメンド臭かったと思い直す。

そこで、架谷は再び仕事と向き合った。

量は目算で2時間ちよいで急ぎの分が終わるぐらい。超特急なら1時間半と少しで終われる量だ。

ざつと計算して、急いで終わらせようと張り切った。

気分が高揚して、橘とは真逆に機嫌が良くなっている事を自覚する。仕方がない。橘の思うところはどうであれ、自分はある人との会話を楽しみにしているのだから。

「あ、あとちょっと………」

目算が外れた。何が超特急で1時間半だ、何が2時間分だ。時計を見れば既に四時過ぎ、既に3時間以上経っている。橘が出るのはいつも4時間から6時間前なので余裕ではあるが、それでもあれやこれやの予定が儚く崩れ去った事には変わらない。

お茶受けにとケーキを買ってくるつもりが、もう今からでないと間に合わない時間になっていたのが痛恨だった。目を付けておいた店は五時から30分間クツキーを20円値下げしており、先日偶々知った時に絶対買うと決心したばかりである。

いつそ仕事を放棄してお茶受けを買うか、それとも仕方がないと諦めるか。

究極の二択が突き付けられる。

楽しいひと時か、はたまた鬼上司からのキツイ叱咤か……。

「何でうんうん唸ってるのかな？」

「うぎよはっ!？」

誰もいないはずの事務所、それも背後から声をかけられて跳び上がった。おまけに首筋に吐息。今、間違いなく心臓が出たと早鐘を打つ胸を両掌で抑え込む。

誰、と思う必要さえなく、架谷は精一杯動揺を押し込めて背後へと声を荒らげた。

「赴夜さん、いきなり声をかけないでください！」

「ははは、悪い悪い。あんまり集中してたもんだから」

どうやって中へ、と聞いても意味のない事を架谷は過去2回の経験から学んでいる。こういった飄々として傍若無人なところが、橘がこの人を苦手とする理由なのかも、とも思う。

「驚かせたお詫びに」

「ああっ、これ東京で新しくオープンしたっていう………！」

「うん。ちょうど本場の方に用事があつてね。数日持ちしそうなのをいくつか。あと、こっちは東京のほうで売ってたやつを何個か」

「あああああ、一日100個限定の和栗モンブラン！」

「気に入ってもらえたようで何より」

それでも嫌いになれない、むしろ好きの部類に入るのは、こういったサービス精神からだろう。うんそうに違いな赴夜さんホントいい人！

架谷の目が爛々とお菓子に釘付けになっているのを眺めて、面白そうに、そして愛おしそうに赴夜は目を細めた。

こういうところが気に入らないんだろうなあと思いながら。

「で、そこで所長が井筒さんに蹴りいりましてね、もう周りのヤク

「ザもドン引きで。本当に大変だったんですよ」

「くくつ、あの子らしいなあ全く。その後どうせおっかない顔でヤクザともども脅したんだろ？ 相手が誰であろうと容赦しないからなあ」

「ほんとですよ。……まあ、橘さんにはいつも助けられているので文句を言える立場ではないんでしょうが、だからって銃を持つてる相手に素手でって」

「その井筒という男、銃だけじゃなく爆弾も持ってたんだろつな。下手すればどかん、だからヤクザも手を拱いていたんだろつ」

「て、えええええ！？ ちょ、知りませんでしたよそんな事！ 私死にかけたんですか！？」

「まあ、死んだら爆発して周囲一帯の人間を物理的に爆死させるか、超極秘情報をばら撒いて関係組織共倒れ覚悟で灰燼にするか、の違いだな」

「……………え、それってあれですか。俺が死んだら情報が、ていう爆弾ですか」

「あははは」

「からかわないで下さいよ………あゝ、ヤバい、このケーキ本当に美味しい」

机の上にはモンブランの他にショートケーキやベリートルト、フオندانシヨコラ、クッキー、マカロンなどが所狭しと並べられている。

架谷が淹れた紅茶はこの前依頼主が送ってきた物だった。どうやら有名な店らしく、赴夜が僅かに目を見開いた。

薄いとはいえ普段自分ばかりがする反応をさせた事にしてやり、と思う間もなく、告げられた値段に架谷が驚愕する事となるのだが。

赴夜がやってきた直後、仕事を放り出して少し遅いお茶会を開こうとしたのだが、

「さて、仕事を終わらせたらこのモンブランを食べようか」

すっかり釘を刺される事となり、30分必死にパソコンと向かい合う事となった。

話の内容は持ち合わせたお菓子の感想や事務所の近況、という名の愚痴で、どれだけ些細なことであっても赴夜はいつも楽しそうに話を聞いていた。

他に言いたい事が、聞きたい事がないと言えば嘘になるが、それでもたかが3回会っただけの他人が踏み込めるわけもなく。また赴夜は放置の姿勢を貫いており。結果、内容は変わってはいるものの、実質は何も変わらぬ会話を続けている。

「それにしても、驚くべきはそれが仕事ではないという所だな」

「ですよねえ。何かに呪われてるんですかね、うちの所長」

「あの子を呪うなんて、相当度胸のある大馬鹿だな」

「大バカって」

「そうだろう。下手に手を出すと千倍返し程度では済まないだろうな。殺しはしないから、社会的抹殺か人間やめさせられるかぐらいはいくんじゃないのかね」

「……………」

反論できなかった。恐ろしい事に。

「架谷さん、一ついいかな？」
「はい？」

珍しい、と架谷は思う。赴夜は質問に質問を反す態でしか尋ねる事をせず、自分から何かを尋ねる事がなかった。いや、まだ3回しか話していないから珍しくもなんともないのかもしれないが、手に持っていたティーカップを机に置いて相手に視線を合わせ、

「んー、橘をどう思っているのかなあと」

「所長、ですか？ 怖い人だとは思いますが……」

「単刀直入に言うと、好き？」

「……………、——はあっ!？」

一瞬固まる。え、何が。脳が再起動してのろのろと情報を処理し、ようやく赴夜の言った意味を呑みこんだ途端、裏返って悲鳴のような声が出た。

すき、スキ、隙、鋤、スキ、スキ、スキ——好き？

「一上司一個人として」

相手の浮かべる貌をまじまじと見やる。何を考えているのか分からない、いつもと変わらぬ微笑み。その変わらなさに、胸の奥が僅かにざわめいた。

「…………ええ、好きですよ」

「鬼畜生なのに？ この半年でどれだけ酷い目に遭ったか分からない。その諸悪の根源である彼を、嫌いではなく好きというんだね？」
「……………一体何を言いたいんですか？」

苛々する。なんなのだこの人は。

さっきまで好意を抱いていた相手に嫌悪が募る。架谷は、赴夜は橘を好いていると思っていた。恋愛感情は見られなかったが、橘の話をする時、橘の影をなぞる時、常に優しい目をしていた。その目は確かに愛おしさを滲ませていた。

そう思っていたのに。

まるで架谷に橘の事が嫌いだと言わせたい、そんな言い草に腹が立って仕方がない。

確かに大魔王で鬼畜で人でなしで酷い人だ。上司として有能ではあるが酷い事には変わりない。いつも周りを見下していて暴力で物事を力技で解決して、人を陥れる事に躊躇も何もない非道の人だ。

上司として有能で、個人として真っ直ぐではある。しかし、それがいかなる方向で使われる才能か、どういった方向性の真っ直ぐさかは問題視されるべきである。

良いところを挙げるのが難しい、そんな人を好きだというのはやはり可笑しい。

それでも、彼は自分を救ったのだ。

「——好きです。文句ありますか！」

——そんな人物を否定しきった言葉を聞いて、黙っていられるか！

売られた喧嘩を叩き買うかのように、衝動任せに言いきった。

言いきられた赴夜は目を見開き、架谷を凝視していた。信じられないモノを見るような——とは少し違う。驚きというよりは、相手を見過ごすとするような、見透かすような、そんな目でじいっと架谷の両目を見詰めていた。

……………。あれ、なんだろう。何を間違えた気が。

そこでふと我に返る。

そもそも、苛立ったからといってこんな喧嘩腰に言うような台詞ではない気がする。

赴夜の質問は、最初の揶揄い（架谷の中ではそういう事にされた）を除けば、橘に悪い虫が付かないように、あるいは架谷が橘と一緒にいれば酷い目に遭うからと気にかけてたものであるようにも捉えられる。

前述の通り、橘は人間的に相当問題のある人物だ。関わるだけで人生設計に相当のメスを入れること受け売りの凶悪物件だ（事実、架谷は既に何度もメスを入れられている）。

彼の事を知っている人ならば、常識的に考えて引き離そうとする

のは当然である。

確かに赴夜の言葉は人の神経を逆撫でるようなものであったが、冷静に考えてみれば良心的な言い分でもあった。

考えれば考えるほど、彼を好きだと否定されたくない、ただそれだけのためあそこまで怒った自分が分からない。

そもそも自分は淡泊で流されやすく、眉を顰めても他人の為にと、言っているのだろうか？）に怒ったことなどないのに。

「うん、よかった」

その言葉に、現実には引き戻される。

わたわたと一人勝手に焦る架谷を置き去りにして、何やら酷く満足気の赴夜。しきりによかったよかったと頷いている。

「安心したよ。あの子、ご存知の通り正確にちよつと難有りだから」

いや、あれはちよつとでは。

「私はここで失礼させてもらつたよ。不愉快にさせてしまった事に関しては謝罪しよう。あの子が帰ってきたらよろしく伝えておいてくれ」

ペースに引きずられて目を白黒する。さっきまであった空気は霧散していて、何事もなかったかのようにどんどん進んでいくのについていけない。

「それと、最後にこれを」

差し出されたネイビーブルーの封筒を反射的に受け取ってしまう。
赴夜の動作には一切の無駄も隙もなく、架谷が口を挟む前に好き
なだけ喋り倒して、碌な挨拶をさせる間もなく出て行ってしまった。

その姿は、台風のように。

「いつちゃった……………」

茫然と呟く。

いったい何があったのか、この時の架谷には知る由もなかった。
そして、自分が言った言葉が、取り返しのつかない事態を招く事
も。

三話：来訪／遭遇

橘の外出は珍しくはない。近場の調査なら何時頃に、今晚は帰れない、長丁場ならしばらく空ける旨を伝え、そして仕事以外では出掛け先を言っただけでいい。と、いなくなる。

ただし、何事にも例外というものはあるもので。赴夜が訪れる時は必ず数時間前に出掛けて行き、そして帰っていった数時間後に事務所に戻ってくる。一体どこで情報を仕入れているのかは不明だが、架谷が彼の言い付けを破って赴夜と話す様になるずっと前からそのスタンスは変わっていなかった。

「所長、預かりものです」

冷静に、何事もないように、普通に、普通に話しかけよう。必死に言い聞かせながら封筒を橘に差し出したのは、赴夜が帰ってから3時間後、既に8時を回っている時刻だった。

あと10分だけ、とジリジリ時計と睨みあっていたまさにその時、不機嫌全開の所長様が戻られ、現在に至る。

別に明日でもよかったのだ。そもそも定時はとくに過ぎているのだから咎められることもない。それでも帰らなかったのはひとえにこの封筒のために他ならなかった。

不思議と、赴夜に対する嫌悪はこれっぽっちも湧いてこなかった。まるで子供の悪戯に引っかけたような気分だった。怒りはあつたが、同時に仕方がないと思えてしまう。ある種の清々しさだけが残り、まあいいかと流してしまふ。

赴夜が一体何を意図して質問したのかは量りかねた。

きつと封筒を盾に何か一つ言う事を聞かせてやるぐらい罰は当たらないだろう。そう能天気には算段を立てさせるぐらいのしこりはあつた。次の出勤は三日後であり、元々頼まれごとはすぐに果たしておくべきという教えも手伝って、結局架谷はこんな時間まで橘を待つ次第となつた。

すい、と形の良い眉が、封筒に目をとめた途端形を変えた。

「赴夜さんが所長にと」

無言のまま墨色の封筒を受け取る。

「あつそう」

びりびりびりっ

返事と同時に、何の前触れもなく橘は封筒を中身ごと破り捨てた。幾度も幾度も破られたそれは細かな紙片となつて床へ舞い落ちる。架谷は、特に何の反応もせず黒と白の紙吹雪を見詰めていた。

「……………」

「所長、もう一通ありますが」

何のことはない。この程度の事、赴夜にはとっくにお見通しだったのだ。

ネイビーブルーの大判の封筒は、他の宅配物に紛れて机の上に置かれたままだった。

深夜。多くの人が眠る中、それでも街に音が絶える事はない。

ぎい、と錆びた金属に似た軋みを上げて椅子が鳴った。その音を聞きながら、暗闇の中橘は窓枠の外に広がる世界を見ていた。

その手にあるのは数枚の便箋で、ネイビーブルーの封筒に入っていたものだ。そこに綴られていた文字が意味する事は親しい間柄の者への言葉などではなく、もっと欲を孕んだ揉め事に関する報告だった。

事務的な書面には、普段見せる飄然とした態度が抜け落ちているようにも思える。しかし、やはりと言うべきか、内容は周囲の損害一切を度外視したかの如き内容だった。どうやら馬鹿は死んでも治らなかったらしい。

デスクには目を通した形跡のあるA3大の紙が数枚、そして画像が添付されたものが3枚。その内2枚は履歴書の体面で纏められていた。

2枚の内、一方に橘は見覚えがあつた。半年前にあつた依頼——その時の対象だ。

橘の視線が、対象——石津谷和介の写真の上を滑る。そのまま彼の経歴、現在、能力が端的に纏められた文面を静かに読み上げ……突如、青白い火が上がった。

火は石津谷の書類だけを燃やしつくし、他の書類、デスク、周りに置かれた書物に焦げ跡一つ残さぬままこの世から消え去った。

そのまま視線は自身の掌に握られた便箋に向けられる。

じつと見据えられた肉食獣の如き金瞳は、何一つ感情を動かすことはない。ただ、その目を縁取る目蓋が僅かに動き、目を細めるかのように筋肉が伸縮する。

指先が引き攣るように僅かに動く。まるで握りつぶすかのような前動作にも見えた。……しかし、結局便箋には皺ひとつ付く事はなかった。

「おい」

金瞳が暗闇を見る。

視線の先には、ただ壁際の棚が一つあるだけだ。しかし、彼の視線はもつと手前——まるで、誰かがデスク越しに立っているかのような位置で空間を睨んでいた。

当人に自覚はなくとも堅気離れた鋭すぎる眼力は、そこに含まれた怒気をマイナスの幅へと増幅して相手に受け取らせる。子供でなくとも、否、ヤクザでさえ怯み竦む視線は、しかし彼がこの世で最も不得手としている人物と、その近しすぎる周囲には通じる事は稀だった。

果たして、今回も——闇は、笑みを浮かべるかのごとく歪んで

いた。

「あれ？」

赴夜が来て初めての出勤、つまり三日後の朝。架谷が扉を開けて最初に発した言葉は純粋な疑問から放たれたものだった。

「あ。あんたが架谷めぐみ？」

事務所の真ん中壁際に設えられた接客用の高そうなソファ（革張りで眠ったらさぞかし夢見が良さそうな座り心地だった）に、見知らぬ男が座っていたからだ。あまりの我が物顔に、開ける扉を間違えたのかと慌てて閉める。

……やっぱり、間違っていない。見慣れた『橘事務所』という文字入り硝子を念入りに見詰め、もう一度開けてみる。——いた。

「あの、どちら様で………？」

「怪しい者じゃねえよ、安心しろ」

いや怪しい。ココロの中で即座に突っ込みを入れる。

男の外見は——色白、黒髪、長髪、目隠し、締りのない口。ぱつと見て並べてみたが、どう捏ね繰り回しても怪しい。目隠しからしておかしい。何故目隠し、如何して目隠し。恰好も黒を基調として色遣いは普通だが、ファッションセンスはどこかズレていた。

——これで怪しくなくて何が怪しい！

男がインパクトあり過ぎて忘れていたが、橘もない事もますます架谷の危機意識にガンガンと訴えてくる。

数歩後ずさるも、結局事務所へと足を踏み入れる事となった理由は、

「……………あの、そ……………赴夜、さまから、伝言が……………」

いかにも気の弱そうな金髪美少女の存在で気が緩んだからで、

「まあ一旦座れよ。ほれ、手土産に菓子あるからよ」

決してケーキに釣られたわけではない、という架谷の主張を一応述べさせて頂く。

■ ■ ■ ■

ハンナ・ブースは生粋のイギリス人だ。しかし祖国にいる時間より、日本で生きてきた時間の方が圧倒的に長い。そのため彼女の中身はほぼ日本人であると言えた。少なくとも間違えた日本文化も忍者や侍が現存するという夢も彼女の中には存在しない。

しかし、彼女はある夢を追っていた。現代日本では多くの人が晒し、少数は感心や共感を覚え、極一部が奇妙な方向へ熱を上げる存在を。

ハンナは夢を追い、そして昨日、世界でごく僅かしかない学部を最初に取り入れた先駆けである学園へと足を踏み入れた。

まるで夢みたい。ハンナは思わずため息をつく。祖国ではかなり華奢で小柄な部類もあって度々目立つ事のある彼女だが、日本人に比べ欧州は骨格からして確りとしているため特別小さいわけではない。しかし、そわそわそわそわと落ち着きのない仕草の所為で、妙に幼い印象を振りまきながら人目を集めていた。しかし、残念な事に本人にその自覚はまるでない。

来年から。来年から自分はあるそこに通えるのだ。そう思うと居ても立ってもいられずにそわそわとしてしまう。祖国でも学部のある学校は数校存在するが、その中でハンナが特の求める分野はこの国が最も進んでいると言っている。伝説と言っている S が在籍したと言われる国の一つであり、彼の魔法使いが直々に教鞭を執る事もあると噂の学園は、世界でも注目の的である。
しかも、

——まさか本当に<魔都>に入れるなんて……。

学園が魔都内にあるのだから当然ともいえるのだが、同じく<魔

都を抱える国からすれば異常と言っている事態である。それも、手続きさえ踏めば誰でも入れるなど、驚愕ものである。

その時ハンナは夢覚め止まぬ状態にいた。

そう。自分がどのような境遇か、如何なる血族の血を僅かでも引いてしまっているのかを、浮かれ過ぎて失念してしまうほどに。

現在暮らしているマンションの近くには様々なビルが立ち並んでおり、普段は人通りが絶えることはないが、その日に限って夕暮れ時の中ハンナ一人だけが通りを歩いていた。

浮かれまくったハンナは気付いておらず、そしてそれ以外の異常にも気がつく事がなく。

そして、気付かなくてもいい事にだけは気付いてしまった。

「？」

どこか遠くで、人の声らしきものと、何かを落としたような音が聞こえたのだ。

何やら傍の裏路地から聞こえたように思え、喧嘩だろうかと思えてみる。もしそうだったら誰か呼んでくる必要があるかもしれないとも。

自分に被害が及ぶという事実も鑑みて、窺うだけと言い聞かせ、

「……………」

そつと裏路地を覗いてみる。

裏路地で、サメと出会いました。

にゅつと裏路地から出てきたのは、どう見てもサメ。もつというなら半魚人。人魚のほうのマーマンマーマンではない、半魚人。そしてその手には、ぐつたりとして動かない人間が抱えられていた。

「……………」

「……………」

「……………失礼します」

「待て」

黄昏時は誰それ時——相手が誰であるかが分からない時間帯、というのが語源であるらしい。それは正しく逢魔ヶ刻。相手が人か魔物かも分からぬ境界の時間。

絹裂く悲鳴が黄昏色に染まった空へと消えていった。

四話：目覚めればワンダーランド

ぐわんぐわんと思考が揺れる。

何があっただろうと考え、黄昏色の世界と、半魚人を思い出す。半魚人、マーマン、海の司教、サメ、幻想種。そう、遭ったんだ、半魚人に。裏路地ではつたりと。

何故裏路地、何故都会のど真ん中、何故海の近くではなく陸地で。

………何かを忘れている気がする。何だろう。

そういえばどうしてわたしは寝ているんだろう。寝ている？ 寝ている。ふかふかの布団で。暖かくて気持ちいい。もっと寝ていた。でも眩しい。光が目蓋の裏に沁み込んでくる。眩しくて眠れない。暖かい、眩しい、暖かい、眩しい――。

「あ、目が覚めた？」

「！？」

ふつと影が差し込んできて、思わず目を開ける。そこには――
「災難だったわね。大丈夫？」

美女と野獣がいました。

「——っ！？？！？！？」

「ごめんなさいね、いきなり驚かせて。……ほら、あんたも謝りなさい！」

「きゃいんっ」

「あ、いえっ、気にしないでください！」

ハンナが目覚めたのは見覚えのない施設の一室だった。窓も何もない部屋にベッドだけが置かれた部屋は、寂し以前に狭く、適度な解放感を与えるには家具一つが限界だったのだろうと察せられる狭さだった。仮に机や本棚やテレビを持ち込めば、確実に足の踏み場が消滅するだろう。

あの部屋にいた美女と野獣——マリと威津島と名乗った二人の言葉を要約すれば『ごめんなさい』だった。

ハンナはなんとなく理解し、そして肩を落とした。

つまり彼女はあのマーマンに攫われ、そして目の前の二人はあの半魚人の仲間であるという事だったのだ。被害者と被害者ではなく、被害者と加害者の仲間。理不尽な状況に対する憤りや悲しみを分かち合い意気投合するには、お互いの立場がアレすぎた。

しかし、と天啓が閃く。謝ったという事はわたしがここにいる事は彼らにとって予期せぬ事態で後ろめたい状況なのだろう。それならば、このまま帰してもらえるとという可能性もあるのでは——そこまで考えたところで、

「こつちの不幸で申し訳ないんだけど、ちょっとこのまま………
ってわけにはいかないのよ」

本当に悪かったわね。

すまなさそうな声の裏に拒否を認めない強引さを感じ取って、がくりとした。僅かながらの希望を抱いた分、絶望は深かった。

「あの、マリさん。わたしどこへ連れて行かれるんですか？」

「ハンナちゃん、半魚人と会ったの覚えてる？」

「サメの半魚人の方ですか？」

名乗りもせずに名前を呼ばれた時は驚いたが、「はい、これ」と悪意なく渡された鞆を見てなんとなく察した。悪気が全く見られないあたりに常識や良識の置きどころの違いを多分に感じてしまう。

しかし仕方がないとも思う。そもそも、種族が違ふ時点で常識だって違ふのは当然ではないだろうか。

「そうそう、そいつ。ちょっとハンナちゃんを巻き込んだせいでそいつが上司にめちゃくちゃ怒られてね。で、巻き込んだお詫びと、状況確認と報告との齟齬がないかを調べなくちゃならないもんで、ハンナちゃんに出向いてもらうっていうのが向こうの言い分なんだけど………」

マリの言葉から、ハンナは今から自分が今から行くのはそこそこの立場のある人の所なのだろうと察する。そしてマリから部下の半魚人ともども嫌われている事も。

さつきから「あの眼帯野郎女の子に無理を」「自分から出向くぐらいしたら」「妙なことしたら潰す!」…………とすごい言われようだった。威津島が怯えているのも気のせいではないだろう。

——それにしても、美人は怒っても美人だなあ。

サファイアと同じ色の瞳に、バレッタで纏めた金色の髪は日本人の抱く典型的な欧米人のイメージに沿ったものだ。白磁の肌はきめ細かく、その細かさは東洋に近いものがある。肉感的な体にブラウスとパンツだけという出で立ちはシンプル故に、女性の目から見ても十分に健康的な魅惑を引き立てていた。

三白眼ではあるがそれも彼女が笑えば愛嬌があり、どこかネコ科の肉食獣を思わせる美女だった。

そして、野獣と言うあだ名された（ただし、ハンナの心の中に限る）威津島は、どちらかと言えば優男の分類に入る。言いかえれば気のいいお兄ちゃんだろう。

「それにしても、ハンナちゃん俺見てよく悲鳴上げなかったね」

「わたし、イギリスで霊的生物専科してたんです」

「ええっ、じゃあ魔術師なんだ？」

「いえ、そっちは見習いで…………。まだ満足に術式も組み立てられなくて」

「へえ、でもすごいじゃん。俺そっちの才能ないからなあ」

「そうなんですか？」

「うん、そうそう。人狼って肉体が発達しすぎて、魔素の才がないのかねえ？」

「いえ、そんなことはなかったような——いえ、なんでもありません。そんなに落ち込まないでくださいよ威津島さん！」

ただし、彼の体が茶色い毛に覆われ、その手足が獣のそれと同じであり、顔は犬や狼とそれほど差異のない状態でなければ——人間と同じであれば、何も知らない一般人も共感するだろう。

人狼——お伽噺の中で出てくる亜人の一種。竜や吸血鬼とならんで空想の世界に生きる住人という認識が、一般人の反応だろう。しかし、現にこうして目の前に実在しており、そしてハンナも当然の事として受け入れている。……その目が異様に爛々と輝いているため、『当然』という言葉には語弊はあるかも知れない。

ちなみに、『気のいいお兄ちゃん』というハンナの評価は最初に自己紹介をし合った際、「こっちの方がいい？」と完全な人型になった時の姿に基づいたものなのだが、「別に平気ですよ」と流され現在に至っている。

「ハンナちゃん魔術師なんだ？」

「いえ、魔術師見習いで」

「じゃあ魔具つて使えるわね？」

「いや、だから見習いですって……——て、うわあっ！ なんなんあな、なんですかこれ！？」

妙に『魔術師』という所に食いついてきたマリから渡されたく魔具>を見て、ハンナの声が思い切り裏返った。動揺丸出しである。

それは、ハンナのようなペーパーのど素人から見ても一級品と言って差し支えないような一品だった（鑑定眼が無さ過ぎて、どれほどすごいのかもよく分らない）。

魔具とは魔術の演算や術式構成の補助機器の名称で、高価なものでは一定質量の魔力を込めるだけで魔術を発動させる事が出来る。

タリスマン

お守りなどもその一種で、術者の魔力を吸う事で耐魔効果のある魔力を放ち、術者の守護という効能を得ている。ただし、よほど強力なものでなければ気休め程度の効果しか期待できず、それ一つで魔を退けられるならそれは既に別物なのだが。

そういう意味で、ハンナが渡されたものはタリスマンの形をした別物だった。その効果は、全く読み取るは出来ないが。

「何されるか分かんないからね——そのお守り持ってなさい」

本当に上司の所に行くんですか。

いつそそう問おうかと思ったほど、マリの声は固く、険しい表情だった。

そんなこんなで、三人は上司の部屋と思わしき扉の前に立っていた。質素でありながら気品漂う作りになっており、相当古いのかだいぶ痛んだ印象を受ける。

先ほどから威津島が元気づけようと声をかけてくるが、その内容は「大丈夫だよ、さすがにあの人も女の子に暴力は」「……うん、ハンナちゃん部外者だし。うん」「い、いいいざとなったら俺が助けるから」「うるさい馬鹿犬！」「きやいんっ！」「………当事者の不安を煽る事この上ない惨状だった。

わたしが一体何をしたんだろう。ああお父さんお母さん、先立つ不孝をお許してください……。先ほどからそんな言葉が脳内をひたすらリフレインしている。普通なら不幸に酔った自己陶醉だが、嫌に真実味があつて恐ろしい。背中を伝うのは、決して汗だけではないのだろう。

「じゃ、開けるわね」

マリが手をかけたドアが、地獄につながる扉にしか見えなくなっていた。

「危ないっ」

「ぎゃっ！！！」

バアドコドガシャンツ！！！！

擬音にすればこんなところか。

両開き戸が勢いよく開くと同時、？何か？が飛び出してきた。

その？何か？は勢いを殺すことなくコンクリ製の壁に叩きつけられ、ピクリとも動かない。

え、死んだ？

思わずそう思ったのもつかの間、うう、ともぐう、とも形容し辛い呻き声らしきものが聞こえたので生きているのかと安堵する。：

……はずもなく。

その？何か？をハンナは知っていた。それは、

「ちょっと半魚人、リンディ！ 危ないじゃない、ドアにぶつかる前に受け身ぐらい取りなさいよ！」

「ちょ、マリそれ無茶苦茶！ パール大丈夫かよ、派手にやられてんじゃねえか」

元凶、とも言える存在——ハンナを攫った半魚人だった。
気のせいだろうか、いま、ノーバウンドで。

「おいこら矢岸^{しみね}、ドアに向かって飛ばすなって何度言ったらわかん
のよ、危ないでしょうが！ わたしが！」

勇ましい姿は実に恰好がいい。しかしその内容は小気味良いほど
自分勝手なものだった。しかし、それを処理するだけの余裕と容量
は、今のハンナにはない。よって彼女を気に入っていたマリの猫が
外れた事も何の問題もなかった。

「うるせえ腰巾着。あの糞狐がくたばったら止めてやるよ」

「なあんですってええええ！？」

「ぎゃあつ、落ち着けマリ！ ハンナちゃんの前、ハンナちゃんの前！」

一瞬で混乱を極めた室内に冷や水を浴びせたのは、本人は全く意
図も何もしていない、むしろ巻き込まれたハンナだった。威津島の
台詞に、一瞬にして視線が集まる。ただしたったの2組。

ぎしり、と動きが止まった。いまだ彼女は部屋に踏み込んでいな
い。しかし、最奥に座る——恐らくはパール・リンディと呼ばれ
た半魚人の上司であり、シミネと呼ばれた、この部屋の主の視線が、
まるで眼球の奥まで覗きこまれているかのように思えて、酷く恐ろ
しく感じた。

「へえ、この子が？」

「ハンナちゃんは単なる被害者。妙な真似したらぶっ飛ばすわよ」

「ふん、本性知っても態度を変えなかったのか？ その程度で懐柔
されるとは、流石獣。主人の器も高が知れるな」

「…………矢岸、殺されたい？」

「手前如きか？ 醜女」

「——ちよつとあんた！」

恐ろしい目を恐ろしい男に向けられている。ハンナは動物で例えれば小動物だった。小さな小さな草食獣は、見つからないように隠れ怯え逃げ惑うのが常だ。対して、男は肉食獣、それも大型の生き物に思えた。残虐と言うより傲慢、他者を踏み躪る事に厭いがない、天性の略奪者に。

弱者が強者に出来るのはただ一つ、目を付けられぬようにすることである。媚びへつらうか、小さく縮こまっているかの差異はあるだろうが、とにかく注意を引かぬ事。強者に勝機もなく抗う事は愚の骨頂。

——だというのに。ただの小動物であるハンナは、捕食者に爪を立てた。

勝機もない。戦略もない。ただ、怒りにまかせて糾弾する。

「あんたが一体誰か知らないけどね、マリさんになんてこと言うのよ！ シコメ？ それって不細工ってことでしょ！ こんな美人揃まえて言うに事欠いて不細工！？ それならアンタの方がよっぽどアグリーフェイスよ、Mr・シミネ！」

腹の底から怒鳴って肩で息切れしていくうちに、頭から血が抜けて思考が冷えていく——だが構うものか。

ハンナは小動物だ。しかしハンナにも意地がある。感情がある。怒りがある。一度腹を括れば、彼女はどれほど怖くとも必死に爪を立て、牙を向けて威嚇する。

逆光で顔さえ見えないデスクに座ったままの男も、マリも、威津島も無言だった。本人も含めて、皆矢岸という男の恐ろしさを知っている。視線で人を圧倒させ、指先一つで人を傷つけられる、小娘では歯向かえもしない男だという事を。

今まで彼を怒らせて来たのは二つの意味である一定水準に達した者たちばかりだ。つまり、強さと愚かさ。

ハンナはそのどちらにも当たらない。いや、取った行動から見れば後者と言えたが、少なくとも、彼女は自分と相手の立ち位置を正確に把握していた。あまりにも今までと毛色が違っている。

沈黙が、重い。

「ふうん……………」

「矢岸、この子は被害者よ。余計な真似したら潰すからね」

「黙れ、人事権は俺にある」

「そんなもののうちの室長が撥ね退けるわよ」

堂々としたマリの態度に、心底忌々しそうに舌打ちする矢岸。しかしすぐさま気を取り直し、ハンナに視線をよこした。につこり。

「さて、ハンナ・ブースさんでしたね。わたしは矢岸。貴女をここへ連れてきた半魚人の上司に当たります。貴女にはこれからいくつかの質問をさせていただきますのでお答えください」

慇懃かつ拒否を一切認めない物言いである。

隣で「何今更猫かぶってんのよ」という嫌味はスルー。直後に上がった悲鳴もスルー。それにしても胡散臭い笑みである。温和な好青年の笑顔であるはずだが、何故か一物抱えているようにしか見えないのは彼の本性を見たせいだろうか。

今更ながらに、自分のしでかした事に眩暈を覚えるハンナであっ

た。

結局、いくつかの質問が交わされた後、ハンナは無事解放された。部屋を出ただけの筈なのだが、本人の心情的には『解放』以外の表現方法が見つからなかった。

い、生きてる………という声が廊下から聞こえる。というかドアぐらい閉めてけ腰巾着ども。他にも何やら励ましや憤りの声も聞こえるが、聞きなれているので右から左へ抜けていくばかりだった。

可笑しなものだと矢岸は思う。あれほどの啖呵を切り、矢岸の質問（他者にとつては尋問）をはつきりと答えていたくせに、部屋を出た途端不拔けるなど。

だが、それ以上に興味深くもあった。視線が合った時、矢岸とあの娘は確実に両者の彼我を理解し、己の立場を弁えたはずだ。即ち捕食者と被捕食者の関係を。

だというのに、見知らずと言っていい相手を侮辱され、その立場を殴り捨てて矢岸に爪を立て、牙を向けてきた。矢岸にとって、何の痛手でもないという事を、恐らくは理解しながら。

矢岸は弱者に興味はない。あの程度の反抗など、部下でない限り気にも留めない。ただし、あまりにも愚かであれば苛立つし、ある

程度力を持つ相手なら容赦をすれば痛い目を見るのはこちらだと理解していた。矢岸は強者ではあったが、絶対者ではなかった。

矢岸は大手の取引なども受け持っていて（そもそもこの連中の経営という概念は当てにならない）、外部の接触者である商談相手に暴力を振るう事は無論ない。足元を見られぬよう立ち回ってはいたが、それでも業界では年若いため侮られてはいる。また、広報や経理も担当する彼が暴虐性を示すのはほとんどが仕事場であるこの支部だけであったことも合わさって、必然彼の暴虐性が知れ渡ることもなく、彼を弱者とする愚か者は尽きたことはない。しかし強者と知って抗う者はいなかった。

それがひどく苛立たしいと思う。

そこがひどく目新しいとも思う。

そつと左目を抑える。そこには眼帯があつた。病院などで渡されるような、真つ白い眼帯だ。

その下が、眼球にあたる部分が疼いた気がしたからだ。故に矢岸は苛立つ。此処に受けた呪いを思い出し、そして呪いをかけた人物を思い出すがために。

残った右目で、デスクの上に並べられた資料を眺める。それらは部下に集めさせたものだった。

事の始まりは半年前。彼の情報網に奇妙な食い違いを見出した。それを徹底的に追及し、あるいは脅し、賺し、ある意味人道的に（人間らしく）情報を収集し続けた。その結果が、この紙の束だ。この紙の束が一体いかなる意味を持つのか。それは矢岸のみが知るところである。

ただ、彼は目的に近い者を見出した。

資料の文面には、とある文字が記載されていた。
『橘事務所』、と。

五話：架谷の友人

「架谷さん、この報告書なんだけど」

「かーっ！ 『架谷さん』だって、馴れ馴れしいなあ仲いいなあ。あの坊^{ぼう}が女とはねえ——て危なっ！」

「あんまり煩せえと口縫うぞ影野郎。次は当てるからな」

「はっ、んなこと言って当てる気満々だった癖に……——ぎゃあ——！」

「庵夜、大丈夫？」

「……レミちゃん。少し離れていきましょうか」

……この血みどろスプラッタを見てもあまり動揺しなくなったのは、彼は二週間飽きることなく繰り返されているためだろうか。

二週間前。架谷は同じ場所、同じ空間で彼らと出会った。気分としては未知との遭遇に近い。

何せ、一方は現代日本で見慣れない——いや、一部の、極々一部の東京の某区域でなら見られるのでは、という前衛的ファッションだった。ゲームの舞台になるような世界でなら違和感もないだろうが、現代の日本では違和感バリバリな男だった。

まず髪が異様に長い。かなりの長身なのだが、それでも地面すれすれになるまで伸ばされた墨を垂らしたというか墨そのもののような黒髪に、顔の上半分を覆う目隠し。口元にはニヒルな笑み。服装も黒で統一されており、唯一右手の腕輪だけが金色に輝いていた。

もう一方は、違う意味で周囲に溶け込めない、溶け込む事の出来ない少女だった。何せこの少女、モデルや女優など目ではないぐらの美少女だったのだ。金色の髪と目に、白磁の肌。どこもかしこも華奢で、同じ性別の架谷でさえ『掴めば折れるような』と思ってしまう可憐な美少女だった。

男は庵夜^{あんや}、少女はレミと名乗った。名字は、と聞けば「無い」と即答した怪しさ抜群の組み合わせだった。いつそ奇人の誘拐犯と深窓の令嬢の方が話はだいぶ早いコンビである。

淡い色合いの衣服を身に纏った小さなレミと、細いながらも長身の影の様な庵夜は見事に正反对で、そして中身も正反对で、一緒にいるのが不思議になる二人だった。そして、この二人の内情も。

「架谷さん……あの、しいさんと仲、いいんですか？」

「所長と？ いや、悪くはないと思うけど」

『しいさん』、というのは橘の渾名らしい。何故しいさんなのかと問えば、レミ曰く「しいさんはいいさんです」との事。その時当然のように話に入ってきた庵夜は「ああ、それはなあ」と訳知り顔のにやついた顔で（口元しか見えないのに、彼の表情は分かりやすい）口にした途端、橘にさっくり制裁を受けていた。

この二週間で架谷が分かった事は、二人は人間ではないという事だった。

何せ、橘の制裁と言う名の虐殺を受けても庵夜は平然としていた。制裁の具体的内容と言えば、本による頭部破壊、蹴りによる胸部陥没、上半身の複雑骨折内臓破裂、その他手近な文房具などをダーツよろしくドスドスと急所に（主に側頭・後頭部に）突き立てられ、

一度はミキサーよろしく全身ミンチを受けていた。

最初は失神した（というか、最初に見たものが全身ミンチだった）
。そして何事もなく生きていた庵夜を見て再度失神した。

後に彼ら（つまりレミも）は人間とは程遠い存在で、赴夜の使い魔（待遇としては一般的に言えば異常なほどで、家族みたいなものだ）と橘は言っていた）らしく、契約の代償として不死の器を得たという。

赴夜。そう、赴夜が、彼らを事務所へ寄越した張本人だった。

何故寄越したのかを尋ねても、凸凹コンビは『橘が答えるなら』
と言い、橘は「必要ない」とはぐらかした。

つまり、完全な部外者扱いだった。無論腹立たしい。当然苛立
たしい。しかしそれよりも悲しく、寂しく思ってしまった。

——つまり、私には関係ないって事ですか？

それでも結局許容したのは、庵夜の執り成しがあつたからだ。

「架谷さん、坊が何にも話さんのはアンタが大切だからだぜ。不用
意に突っ込めば、あんたみたいな子猫一瞬でパクリだからな。あー、
ほんと甘くなつたなあ坊も。手元に置くってことがどういう事か、
分からないでもないだろうに……」

最後はばやし混じりだったが、庵夜の説明に満足したわけではな
かったが。それでも架谷にとって、『大切にされている』為に知ら
されていないという言葉は、誇張されたものであれ傷ついた自尊心
を補って余りあるものだった。

その時動いた心の蓋に気付く事もなく、というか理解もせず、一応はこの事態を受け入れた。

……… などと言う事があつたなあと思ふ。現実逃避なのだが、架谷はその事実をあえて無視した。

そつと床を見ればモザイク修整のかかった庵夜が倒れ伏していた。実際にはR・25の光景なのだが、現実逃避に拍車がかかつてそう見えるのだらうと解釈している。

最初のミンチのような制裁はなくなったものの、下手にレベルが落とされると余計生々しさが増してどうしようもない吐き気がしたものだつた。それが今は多少の動揺程度で事に集中できる始末。毒されているのか麻痺しているのか、どちらにしろ真つ当な人として危うい状況だとしみじみ思う。いや、しみじみ出来ている時点でヤバいのだが。

最近はこちらに気を使つて内部破壊に凝っているらしく、目に見えてグロい惨状はなかった筈だが、どうやらよほど橋を苛立たせた事を言つたらしい（よく聞いていなかった）。憐みを覚えるが、所詮自業自得である。

気を使つて、云々は庵夜の証言なのだが、それが真実かは実際のところ疑わしい、と架谷は睨んでいる。そもそも他人の事を気にするような人なら、ここまで暴力に訴える真似はしないだらう。懲りない庵夜も庵夜だ、と言えばそれまでののだが。

到底穏やかとは言い難い状況で、それでもそれ以外は取り立てて何も起こることもなく、濃密な二週間は静かに血塗れに過ぎ去っていった。

またいつものように、以前のようにになる。——そんな幻想を、架谷は捨て去ることが出来ずにいた。

「めぐみちゃん、どうしたの？」

「え？」

あれ、と思った瞬間、何やってるんだ私、と架谷は自分を叱咤した。

ここは大学で、目の前にいるのは唯一と言っていい友人だった。普段ならすぐに切り替えられる（他の人に言わせれば切り捨てられいが）のに、今回は妙にずるずると引きずってしまうのが腹立たしい。

「なんもないよ。それでどうしたの？ また上司の愚痴？」

「う、それもあるというか、それだけじゃないというか………といつかあたし、そんなに愚痴ばかり言ってるかなあ？」

「少なくとも一昨日も聞いたよ」

うう、と顔を伏せた友人は何かと気があつて、どこかずるずると友好を続けてきた相手だ。こうやって一緒にいるようになったのはストーリーカー事件が切っ掛けで、深入りせず、近すぎず遠すぎず、べたべたとしてこなかったためだ。下手な同情なんて真つ平で、そういった無感動な淡泊さが（あるいは淡泊なほどの無感動さが）どことなく私と似通っていて（つまり合理的な性格という意味で！）心地よかつたのだらう。あるいは、彼女が？その道の業者？を知る切っ掛けとなつたからだらうか。

以来、こうやって昼休みに互いに愚痴を言い合つたり最近のニュースやファッション雑誌、ケーキ屋や果ては居酒屋情報などを交換したり話し合つたりしている（それでも、他の女子大生たちが話す内容よりずっと互いに踏み込まない会話なのだらう）。

「で、その上司の人がどうしたの？」

「いやあ、人使いが荒くてさあその人。鬼というか、悪魔と言うか、悪魔より悪魔、というか魔王の様な人と言うか……」

「……… 毎回思うけど、よくそんなところに就職したよね」

まあ職場環境ではどっこいどっこいだが。だが自分の場合は脅されて働いているので仕方がないとも言える。この友人、自給に目が眩んで働きだしたそうだが、いつの間にかアリ地獄にはまった昆虫の様な有様になってしまったらしい。つまり抜け出せない、辞められない。理由は知らないが、詐欺に遭うなよと心配せざるおえない。……… 友人に同じように思われている事を、架谷は知らない。

まあ、愚痴は愚痴で、相談ではない。適度に相槌を打ち、共感しておけばいい——それが架谷と友人の暗黙の了解だった。この二人、なかなか友人らしい類友である。

何やら鬱憤が溜まっていたらしく、友人の愚痴はとどまる事を知らなかった。そんなに嫌なら正面切って文句を言うなりすればいいのに、と彼女は思ったが、それを自分に当て嵌めて、いやないわー、と即却下した。弱者とは強者に巻かれるしかないしがないイキモノである。

互いに言いたい事を言い終えた後、彼女は気晴らしにショッピングに、自分はバイトへと向かう事となった。

やばい、急がないと。

話に夢中でふとラウンジに置かれた時計に目が行った瞬間、あられもない悲鳴が出た。女性らしくない、という意味で。

ただでさえ厳しい上司なのである（同僚いわく、甘いとの事だが）。遅刻なんてしようものなら確実に給料に直撃する。それだけは何としても避けなければ。あちらにとっては単なる出費でも、こっちにとって死活問題だ。

最近見つけた裏路地でショートカットを試みる。

——気を付ける。君はもっと警戒心を持つべきだ。

……ふと。前触れもなく上司の言葉が脳裏を過る。心配し過ぎではないだろうかと思ったが、自分よりはるかに経験値の高い御高

説はなんとなく心に留められていたらしい。

そして、背後を振り返った。

何故、と問われれば、それは虫の知らせや、女の勘や、あるいは同種の共鳴、と言うべきかもしれない。表現が酷く難しい確信が、彼女に？それ？の存在を教えた。

それは影のように思えた。

衣服は暗色とはいえ、黒色は使われていない。白いシャツにスラックス。いかにも社会人と言った姿だ。髪の色は夜闇を熔かし込んだ黒。唯一目の色だけが爛々と金色に輝いていた。

——まるで、夜の獣だ。

「おい」

獣が語りかける。威圧的で圧力的な言葉が、彼女の体に押し掛かるような錯覚を与える。まるで、ひれ伏す事が正道のような声。

「てめえ、あの？探偵？の手下だな。あの子に何の用だ」

探偵。あの子。探偵は分かる。でも、あの子って——一人だけ、脳裏を過ぎる。

「そっちが何を企んでいるかは知らん。だがな、あの子に手を出してみる」

ゆっくりと、音もなく。

「その時は——お前ら全員を」

夜の獣が近付いて、

「——？ 橘さん？！」

六話：友人Ⅱ職場を間違えた者同士

架谷が？それ？を見たのは、本当に偶然だった。

友人が慌ててバイトへと向かった後、何気なく床を見た時にきりと光るものが視界に入った。拾い上げてみれば、それは友人が珍しく酷く気に入っていたアクセサリーだった。

ここでメールの一つでも入れて明日にでも渡せばいい。そうすればよかったのだ。しかし、架谷はそうしなかった。

彼女の職場が気になった。俎上に上った上司が気になった。彼女が嫌そうに（けれど柔らかい表情で）話す同僚が気になった。理由ならいくらでも挙げられて、それはただの好奇心で、そしてそんな好奇心は捨て去ってしまうべきだった——後悔とは、後で悔いるもの。全くもってその通り。

しかし、既にそれは遅い。架谷はその好奇心に負けて、友人を追いかけてしまった。

……そして、彼女が？それ？を見たのは、至って必然だった。

——え？

架谷は一瞬、見間違えたのかと思った。

友人の向かった方向と以前教えられた職場の大まかな位置を頼りに追いかけていたのだが、幸運にも（そして、不運にも）架谷は友人の背を視界に捉える事に成功した。

その背が細い脇道に逸れていくのを見て、彼女の名を呼ぼうと息を止め、

そして、彼女は？それ？を見た。

——所長？

猫背気味で細身の長身に、僅かに癖のある真っ黒な髪、男の癖に女性より白い（いつそ病的ならまだよかった）綺麗な肌。そんな特徴を併せ持つ人物など、架谷の周囲ではただ一人だった。

——でも、今、目が……。

ちらりと見えた横顔で確信を得た——同時に、別人だという疑念が靄のように湧き上がる。

自分が所長と呼ぶ橘という男は、切れ長の釣り目に真っ直ぐに通った鼻梁、そして薄い唇。パーツは一級品であるはずなのに、無気力と陰険と嗜虐が綯い交ぜに表情がこの上なくよく似合う人物だった。そんな人物も架谷の周囲に二人としない（というかいて欲しくない）ので、それがまた確信を深めさせるのだが……

——きんいろだった？

彼の眼は、海の底よりも暗く、暗闇よりも黒い、真っ黒な瞳だったはずだ。

焦慮という靄が湧き出る。それは、確かに黒々しい色をしていた。その背を追いかける。既に追いかける背は柔らかな女性のそれかなんだからで骨張ったそれにシフトしていたが、架谷は毛ほども気にせず、そして気づいてさもないかった。

虫の知らせ、女の勘——あるいは、彼とともに過ごした時間から得た、経験が。彼女に何かを告げているかのように思えた（■ ■のはため）。

かくして。

裏路地の先には、彼女の上司の背中と、彼女の友人の怯えた表情が——

「——橘さん！」

そこから先の記憶は酷く曖昧で、靄に包まれたように掴む事が出来なかった。

何が起こったのか。正確に峪梨^{よくなし}可純^{かすみ}が把握したのは、実のところ事態が終盤を迎えて落ち着いて記憶をなぞった時だった。

「——橘さん！」

その声を聞いた時、まさか、という言葉と、やっぱり、という思いが頭を埋めていた。

まさか——まさか、友人がここにいる筈が。
やっぱり——やっぱりこの人は、友人の。

夜の獣——架谷の上司の肩越しに、友人の姿を認めた時、峪梨の頭を埋めていた言葉の全てが、すんと心に収まったのを確かに感じた。

どうして、もなぜ、も消える。あるのはどうしうだけだった。
どうしう。どうして……どうやって、この場を切り抜けよう。
架谷の上司の言動からみて、まず彼は架谷を傷つけるような真似はしないだろう。だったらあとはどうやってこの状況を切り抜けるかだけ——

「こんの……バカ上司——っ！——！」
「ばちこーんっ！」

右手一閃。問答無用で架谷が上司に平手を喰らわせていた。

「……………へ？」

いやいや、と思う。いやいやいやいや。え、なにそれ？

言い訳も言い分も一切聞かずの制裁に呆然とする。架谷の表情には毅然とした色はあってもヒステリックな色はない。それでも目尻に浮かんだ涙が彼女の精神の状態を如実に語っていた。

「前から犯罪スレスレというか犯罪そのものに手を染めていてもおかしくないような事ばかりしてましたが……………流石に見損ないましたよ！ 女性に手を上げるなどは言いませんが、もうちょっとスマートにやったらどうなんですか！ しかも、私の友人ですよその人！」

その時の峪梨の心情を一言で表すならこうだ。

……………えー。

何か大切なものを放り投げているうえ、友人と言う立場の置きどころを問いたくなるような台詞だった。言い方というものがあるよね、ついでみたいなんだけど、オブラートって言葉知ってる？ 架谷さん。

それでもまだこうして感情を爆発させているところは人間らしいというか、何というか。色々と突っ込みどころのある状況ではあるが、あんまりにあんまりな発言に言葉も出なかった。いや、本当に。

「いや、架谷さん話を」

「いま私は怒っています。頭を冷やしてくるので話しかけないください」

ぺいつ、と伸ばされた手を容赦なく叩く。その姿はまるで浮気の言い訳をする旦那に釈明の余地なしと追い払う奥様のよう。

——似合わない。似合わない過ぎるよ、架谷さん………！

彼女の性格やら性質やらを把握し、かつ旦那役である架谷の上司を少しでも知れば、その構図は悶絶モノ以外の何物でもなかった。

そう、この状況が頭から吹き飛ぶくらいあり得なく、笑わざるおえない。

だってあれだ。恋愛という言葉が宇宙語になっている架谷と、どう好意的に見ても家庭的という言葉がUMAの架谷の上司という組み合わせ。突飛を突きぬけて魔界にランデブーしてる、結婚という言葉の意味がどっかに逃避行してる！

腹筋が、腹筋が！ と口元を押さえている姿は滑稽なのだろうがいたしかたないだろう。此处で笑えば空気が壊れるどころか架谷の上司にいらぬ油を注ぐことになるのは間違いなかった。

峪梨の反応は逸れに逸れた。

峪梨の対応も遅れに遅れた。

「行こう、かすみちゃん！」

いつも通り微妙に滑舌の悪い呼び方で呼ばれたと思ったら、手を取られて連れ去られた。架谷の上司を放り出して。

——というか、え？ これって痴話喧嘩？ 私巻き込まれてる？

もつすでに色々と遅い。

「……………架谷さん」

「なあに？」

「ええと、上司の人は……………」
「知らない！」

いや知らないって、子供みたいな。そんな峪梨の突っ込みは心に仕舞われた。

「…………… 架谷さん」

「なあに？」

「行く宛ては？」

「…………… ない」

見切り発車もいいところだった。
冷静な部分が残っているようで、結構いっぱいだったらしい。

要約すれば、感情が高ぶり過ぎて興奮した架谷が切れて、上司を平手した後、その場にいた峪梨の手を掴んで連れ出し逃走した――
―これが裏路地での一連の出来事だった。

住所も抑えられているし、落ち着いて考える場所がいい。出来れば人のいない場所が。

架谷の要望に応えるべく選ばれたのは、皮肉なことに峪梨のバイト先だった。皮肉、というのは峪梨にとってである。絶対に架谷を連れてきたくなかった彼女にとって、最大級の苦肉の策だった。しかし無断欠勤など言語道断。最近のヘマと上司様の御機嫌を考えても電話で伝えてもどうにかなる問題ではなかった。そうなれば明日の朝日を無事拝めるか……。そこまで考えて背筋がぶるっと震えた。

何故か——その問いは、事務所の扉を開ければ即解消される。

「こんにちはー」

「おう、やつと来たか——ふおおおっ！ なんじゃなんじゃ、その嬢ちゃんはいいのういいのう、むっちむちじゃのうげひっ！」

「何をしている、邪魔だ。峪梨さん。お客様ですか？」

「……………ああ。いえ、私の友人ですよ」

扉を開ければ何とも残念なイケメン（外見若者、中身絶倫老人）に出迎えられ、

「なにすんじゃこの×××野郎！ ファックすんぞ！」

「臭いんだよ爺。年相応に干乾びてろ」

「んだとこの女王様主義が！ SM嬢も真つ青な癖に何言うとか、この間とて×××プレイで×××させた拳句×××だったそうじゃのうー！」

目麗しい麗人の性癖（女王様に甚振られるより甚振る派。女王様

の意味あるのだろうか）を叩きつけられ、

「人の趣味に難癖付けてんじゃねえぞ×××が！」

「ふん、×××の×××め！」

「×××が何言つてんだ×××して×××で×××されて死ね！」

「この——め！」

「やんのか——が！」

聞くに堪えない罵詈雑言の嵐に出くわすからである。ちなみに、この現象に遭うのは5回に1回の割合で、そして大抵客を逃すため、5回に1回は客に逃げられている回数とも言える。よく持っているよなあこの事務所、と峪梨がしみじみ思う実績だった。

「あんまり煩いとハミルさんに怒られますよー」

『ハミル』という単語一つで喧しい彼らも石になるのだから、我が上司の威光には感謝感激であった。その分痛い目も随分見ているが。

「もう一度言いますが、彼女は私の友人です。……だから彼女に変な事しないでくださいよ、特に桐原さん！」

「わしか!？」

「当然ですよ。リーガンさんも可笑しな真似しないで下さい」

所長に事情を説明してくるから待つてね——友人に伝えるよりも先に、この常識外二人組に釘を刺しておく。万が一でもあれば峪梨はその瞬間唯一と言つていい（多少の執着はある）友人を失うことになるだろう——予見というより未来視レベルの一寸先を回避する為、念入り過ぎるほど？お願い？をしておいた。

この年で心を許せる相手がこの探偵事務所にしかない………な

どという危機的状況を招くわけにはいかない、という危機管理意識に基づく判断である。そうなれば確実に近い未来破滅する、という窮地を回避するためである事も理由の一つだった。

どこまでも自分本位だな手前は、などという言葉が聞こえた気がするが気にしない。脳内で友人がそれは大変だねえと同情なのかどうでもいいのかもしれないその中間なのか、かなり他人事に呟いた気がした。

「ハミルさん、いらつしゃいますかー……………」

尻すぼみになる声を、懸命に維持する。この扉を開けるのは毎回非常に勇気がいる。もしかしたら勇気が上がっているかもしれない。疑問の態ではあったが、この所長が部屋にいない時などまずない。だからこそ、不安と安堵とが常に心臓を締め付けてくる。

——いや、そもそもハミルさんの居場所が分からなくなる事なんてあるのかな。

果たして、

「……………どうした。客か？」

我が探偵事務所最高責任者様は、いつもの通りソファでまどろんでいらつしゃいました。

七話：叶え屋商会（1）

「し、死ぬかと思った……………」

「笑顔って人によって劇物なんだな……………ほんと怖かった……………」

ある意味ゴルゴンとの面談より恐ろしい矢岸の尋問（あれは尋問だった査問だった、あんな圧力的な尋ね方！）から生還したハンナと威津島が零した。もう嫌だ、と全身が語っている。

「ハンナちゃん大丈夫？ 矢岸深く関わらない限りは無害だから、さっきの事も大丈夫だって！ ………………きっと」

「いちいち『多分』とか『きっと』とか不安材料挟むんじゃないわよ馬鹿犬！」

「きやいんっ！ ちょ、マリいい加減頭叩く^{はた}のやめて！ 尻尾握り潰さないでーっ！」

ハンナに気を使っているのかそうでないのか、二人のやり取りは可笑しくて張り詰めていた緊張の糸が緩んでいく。

「仲いいですねー」と言えば「違う！」「どこがっ？！」と漫才のような言い合いに、気持ちが解れていく。

—— ああ、二人とも優しいなあとほっこりしていたのに。だといつのに。

「おい餓鬼。ここで何してる」

顔を上げれば、そこには怖そうな人が。左右後ろに援軍なし。
………神様。わたし何かしましたか？

事は、3時間ほど前に遡る。

「ええっ、こ、ここ 叶え屋商会 なんですか!？」

「と言つても末端もいいトコなんだけどねー」

「じゃあマリさんも威津島さんも職員なんですか?! うわ、すごいつ!」

「いやあ、照れるなあ」

マリは仕事を立て込んでいるからと威津島がハンナの案内を買って出た訳なのだが、当初二十代半ばの男と十代半ばの少女という組み合わせに『果たして会話が続けるのだろうか』という最大の不安要素は、案外あっさり解消されていた。

これからハンナにはいくつかの手続きを踏んでもらった後、正式に謝罪が下るのだそう。無論全力でお断りさせていただいたのだ

が、彼女の意思はあっさり却下され最後には泣き落とし同然に（泣き落したのは威津島だった）承諾させられた。そのゴリ押しの弱さに、いつか騙されるのではと年長者二人が若干の不安を抱いた事をハンナは知らない。

まあ色々と疲れただろうという事で寛げるよう個室で休んでもらうという事になったのだが、道中から到着した現在までハンナと威津島の会話は途切れる事を知らなかった。

「ハンナちゃんもさ、ここで働いてみる？ 俺らの上司いろいろこつち振り回してくるけど基本いい人だし、矢岸と張り合えるような人だからさ。あいつに手え出される事もないし。絶対さ！」

不安材料ではなく『絶対』と言うほどなので、よほど彼のその上司に対する信頼は強いのだろうと窺え、その安心感に釣られて思わず欲が出る。

「来年から 魔都 の学園に通うんですけど、ここまでならそんなに距離もないですし。アルバイトも考えてたから………わあ、叶え屋商会 でアルバイトかあ………」

「………ん？ あれ、留学生ってバイトできたっけ？」

「帰国子女なので長期ビザ取得してますから大丈夫です」

話題のタネは、威津島とマリが所属し、現在ハンナが滞在している施設を保有する？企業？ 叶え屋商会 に終始していた。

叶え屋商会 の発足起源、時期は不明であるが、この商号を掲げるようになったのは1987年と正確な記録が残されている。

その主だった業務内容は派遣会社に近い。基本的にはジャンルを問わず、あらゆる依頼を請け負い、職員が依頼を果たす事もあれば登録している業者に斡旋する事もある。また登録した業者の会合の場を設ける、情報のやり取り、時には売り買いなども手掛けており、その伝手は多岐に渡り、政界や官僚の大物、果ては グレート・トライアングル 三大組織にまで及ぶと噂されている。

『あらゆる依頼』という謳い文句を掲げているものの、厳肅たる規則があり、踏み越えてはならない一線が存在する、いたって？健全な？企業。そして、魔術・異能・異形への対処に特化した請負会社。

わずか30年ほどで大企業へと発展した、それが 叶え屋商会の実情と外聞である。

さて、この 叶え屋商会。先にも説明したように魔術・異能・異形への対処に特化した会社でもある。必然社員や登録業者も？その筋？の者が多い。つまり、魔術師、能力者、そして特に人外が。人外が多い理由はいたってシンプルだ。異能者が十全にその能力を揮える組織は他にもある。その最たるものであるSDPや教団、神殿に所属する者は珍しくないが、やはりそれらは人間が作り上げた組織である。そのため人間以外が所属するには（特に教団は）些か敷居が高く、 叶え屋商会 に所属する者が増加していく事は必然だった。

また、 叶え屋商会 は他の組織に比べその業務は非常に多岐に渡る（まあ、当然と言えば当然だが）。そのためあらゆる状況を想定した装備が必要となるわけで、日常から戦場まで、実用的・実戦的な装備の開発・作製に力を入れている事也有名、あらゆる場面で

の魔具の能率の測定なども請け負っている——つまりは、叶え屋商会 はあらゆる魔具と触れあえる機会があるという事で、それは魔工士にとって中々に素晴らしい職場であるともいえた（とはいえ、流石に請け負いこそないものの、魔具開発に関して他の組織が劣っているという訳ではない。単に倍率としがらみの問題だった）。

好きが高じて霊的生物学を修め、また来年から学園で魔工学についても学んでいきたいと思うハンナにとって、アルバイト先として叶え屋商会 は理想的と言えた。自給の方は知らないが、この際二の次三の次だ。お金では買えない時間を、プライスレス。そんなフリースが過る。

そんな夢を広げながらの団欒とした時間は、ハンナ本人は気付かなかった疲れが誘発した眠気のために一時お開きとなった。

夢を見た。

わたしは何かを追いかけていて、何かに追いかけている夢。

.....。

真っ白で真っ黒な場所で、ひたすら走って追いかけて追いかけてまわされている夢。

.....い.....。

前へ後ろへ右へ左へ上へ下へと走りまわる夢。

.....お.....ま.....。

どこかへ向かって誰かへ向かって走る夢。

——きろ……お、…………。

どこから離れて誰かから逃げ回る夢。

——、

「おい、いつまで寝てる気だ」

「が、あだぁ!？」

がちんと顎に衝撃、脳がぐんと揺らされ目蓋の裏で星が散った。全身色々なところに衝撃が走って、喉で唸る。何、なんだなんだ何が起こったの!？心の底から悲鳴が上がるが、衝撃が全身に浸透して痛いと思うより動く事が儘ならず、声も出ない。

「ち。弱っちいな……………」

頭上から降ってきた不機嫌な声に、何が起こったかは理解できないがとにかくこの声の主が諸悪の根源だと当たりを付けた。怒るより噛み付くより怖さが先立つ。容赦なく人を、多分見知らずの他人を傷つけられる人。それはハンナが恐がるには十分すぎる理由だった。

霊的生物学においては優秀な成績を修めてはいるものの、基本教科を初めその他科目は凄惨たる有様。運動神経は悪くないはずなのにしょっちゅう転び要領悪く（ある意味器用に）ドジを踏み、同級

生どころか五歳児にさえ舐められる始末。そんな人間は苛めの格好の的である。

従ってハンナの半生は苛めっ子との戦いの日々でもあった。つまり逃げ逃れ追いかけて追い立てられ。パシリ。引き立て役。もっとも身近な人種が苛めっ子。

苛めっ子が年上の不良と付き合っていた時期があり、その時その彼氏の前でさんざん揶揄されまくったため、現在もその類の人間は大学の苦手という箱に収められている。

「おい、いつまで床で寝てる気だ」

床を蹴る音が思いの外近くで聞こえてびくりと震える。少し自由になつてきた首を動かして、恐る恐る音の方へと視線を向けた。

黒い革靴。ラフなカーゴパンツ、靴下。が、20cmより確実に近い距離にあった。

「動けるんだな」

質問ではなく確認。容赦ない声色で淡々としていて本当に怖い。

「おい餓鬼、ここで何してる」

ゆっくりと顔を上げる。……そこにはとつても怖そうな人が立っていた。

筋骨隆々のシルエットが最初に網膜で像を結び、次第に明順応していくにつれてさらに泣きたくなる。目付きが凶悪な、不良崩れ（チンピラ）というより軍人崩れという言葉の似合いそうな強面。ひしひしと伝わる不機嫌なオーラ。怖い。恐すぎる。飢えた凶暴な熊グリスリーに出くわせばこんな気分を味わえるかも知れない。

——…神様、わたし何かしましたか？

このまま気を失ってしまいたい。そんな願いを心の底から祈った。

「おい威津島！」

「ぎゃあっ！ 何すんですか副所長！」

どすりという不吉な音とともに体が大きく傾ぐ。倒れる寸前、なんとか体勢を立て直して威津島は叫んだ。

彼の上司である副所長、尾崎古銀がいつも通りにまにま笑って立っている。……その姿にどうしようもなく不安が掻き立てられるのは、この上司の下で働き続けた長年の経験ゆえだろう。

とかく、この上司はやることなす事無茶苦茶で、全ての基準を善悪ならぬ好悪感情、気に入らなければ依頼人であろうと叩き潰すという、矢岸とは別の意味で暴君なのだ。この出張所にはもう一人副所長がいるのだが、その三人の中で最も常識外れでありながら一番人格者であるのがこの人というのが些か泣けてくる実情だった。

矢岸は冷血冷酷鉄血宰相、もう一人はやり過ぎが標準装備というかろつじで規律に引っかかっているような男で、どちらも他者を平

気で突き落とし踏み躪る、性格に難があり過ぎ、というのは職員全員の意見だった。

それでも矢岸の経営手腕は見事であつたし（そもそも彼がいなければこの出張所の運営は危うい）、もう一人はやり方こそ危ういが仕事に対して意欲的であり、そしてどちらも他者に容赦はないが逆らわなければそこそこ面倒見は良かった（そういう所は尾崎と真逆だった）。逆にいえば逆らえばアウト——逆鱗に触れば人生が詰むのだが。

この出張所には所長がおらず、実質副所長三人がトップだった。3トップに難があり過ぎるのだが、彼らとやり合う他出張所の所長らも相当な曲者どもと噂なのだから、基本 叶え屋商会 というのは良くも悪くも一癖も二癖もある御仁の溜まり場なのだろう——と威津島は思っている。閑話休題。

「威津島、左眼帯の手下が面白いの連れてきたと聞いたぞ」

——あ、やな予感。

嫌な汗が米神を伝う。経験則と尾崎の性格を考えるとどうしても良い結果が浮かばないのは何故だろう。というかこの人ほんと本能と好奇心で生きてるよな——とどんと逸れていくその思考を、人は現実逃避と呼ぶ。果たして、

「そいつのところへ案内せい！ 拒否権はナシ！」

「ぎゃあああ！ やっぱいいー！——」

こうして威津島が上司の思い付き巻き込まれ回数は更新する事となる。これで三桁に上ったのだが、これは知らぬが仏だろう。

「起きろパール」

矢岸の放った蹴りが容赦なくパール・リンディの腹にめり込み、意識を覚醒させるとともに悶絶・明滅させた。

「お前の証言とあの小娘の話を比較検討させてもらった。調べたところあの娘、渡英した間座網の血族の端くれらしいから、それが原因だろう。お前のおざなりな結界を通り抜けるには十分な素質だな」

最後の？だ、な？の間に再び蹴りが炸裂する。ただし先ほどよりは加減がされている。それでもえげつない一撃ではあったが。

「……………つ、み、ま……………せんっ」

「謝罪はいい。するならあの小娘にしろ」

さっさといけ。追い払うようにあしらいながら、封筒を投げつける。見事パールの顔面を強打したのは態とだろう。

その封筒にはハンナ・ブースの処遇、補償に関する資料と手続きのための用紙が入っており、つまりは残りの面倒な事務処理はパール一人でこなせという指示だった。手続きにはハンナの署名なども

必要となり、あんな事があつた後で正面切つて向かえ合えなど嫌がらせ以外の何物でもない。

パールへのペナルティのつもりなのだろうが、嫌がらせの中に？小娘？が入っている事を理解しているのだろうか——そこまで考え、パールは思考を揉み消した。

何とはなくだが、これ以上思考を続ける事は良い結果を生まないような気がしたのだ。

「副所長、どちらへ」

「野生の熊が帰つて来たそうだ——挨拶がてら、所用を、な」

……それで全て理解できた。今回3トップの内の一人が依頼担当したそうだが——それはもう酷いものだった、主に経理の面で依頼は十全、しかし破壊した建築物、公共物、情報の揉み消し、備品、エクセトラ。それらにかけた出費は半端なものではなかった。

その報告を聞いた時、パールは眩暈がしたものだ——主に、自分の上司の怒り狂い具合を想像して。

報告を受けてから日常となった暴力から手加減という文字が差っ引かれ、彼の放つ殺気の純度が目を追うごとに増していき、それらを濃縮させるためとしか思えないほど仕事に没頭していく様は見えていて胃に穴が空きそうだった。副所長付きという代わってもらえるなら即断する立場だが、そんなモノ好きはどこにも存在しない。最近パールの常備剤に、胃痛薬の他に頭痛薬が加わった。いつ入院するかというトトカルチョが行われている事を、彼は知らない。

……それらの諸悪の根源の帰還に、思う事は唯一つだった。

「途中までお供します」

あの強面が無様に潰れるところを間近で見ずに気が晴れるか。

八話：叶え屋商会（2）

眠っていた矢先にベッドから突き落とされた拳句、熊男と蛇と蛙の如く視線を合わせ続ける。なんの罰ゲームだろうと泣きたくなるような状況が5分足らず。しかしハンナには30分にも1時間にも感じられた。

まさしく肉食獣と小動物。

あれなんだかデジャビュ——そんな空気は二人の来訪者によって徹底的に粉碎され磨り潰され爆破された。

「なんじゃ熊公もう帰ってきたんか」

「ああ？ 文句あんのか白髪狐。お前の部下か、勝手にこの部屋使いやがったのは」

最初にやってきたのは軽快な（というより子供っぽい）男だった。狐と称された男は狐目で、銀髪と相まって『白髪狐』と渾名されているのだと思われた。

突っかかるというよりどうでもよさそうな雰囲気丸出しの狐の男に対し、熊男は彼と相対するだけで機嫌が急降下していくのがよくわかった。もともと上機嫌とは口が裂けても言えなかったが。

「ここは共同の仮眠室で手前の私室じゃねえよ野生熊。巣に戻る前に話があるから顔貸せ」

あ、なんかヤバい？ と思い始めた矢先にこれである。それだけ

で熊男の纏う空気の重さが地に着く勢いで増量したのがよくわかってしまった。

次にやってきたのは眼帯の青年で、どこか病的な印象を受けた。それはその痩身であつたり青白い肌出会つたり目の下に浮かぶ隈であつたりしたわけなのだが、その口から飛び出す言葉は強烈を飛び越え猛毒のマシンガンである。扉の向こうで聞きなれた悲鳴がした気がするが、気のせいだろうか。

はんっ、と熊男が鼻で嘲笑う。どう見ても機嫌がマントルを突破している。

「はっ、随分と偉そうだなクソガキ。俺は疲れているんだ。さつさと御退場願おうかね？」

「こつちも忙しくてなあ。器物破損に情報操作に人的被害への対処。一体いくらかかったか分かるか？ クソ狐、手前も？ また？ 色々やってくれたそうじゃねえか。天引きどころの騒ぎじゃねえぞ脳無しども」

「なんじゃ細かい事に拘りおつてお主ら。やるなら相手になるぞ？」

会話すればするほど陰悪になっていく雰囲気。床に突っ伏したまま腰が抜けて決定的にい動けなくなる。どうしよう逃げ出せない。

何がどうしてこうなった。

恐怖の三者対面のゴングが鳴り火蓋が落とされ幕が上がり、煙り暗雲が垂れこめ芽吹き頭をもたげるのを、確かに聞いて見た気がした。

ああ、散ってる。火花がバチバチと音を鳴らして散っている。愚鈍な思考とは正反対に、ものすごい勢いで顔面蒼白になったハンナは三者を見上げていた。

あれ、わたしなんで此処にいるの？ 出て行ってもいいですよ、関係ないですもんね？ そう思っても口にするには圧倒的に勇気が不足していた。

明らかに場違いである。どう考えても部外者である。

巻き込まれた。ならば早々に退避すればいい——しかし、そう
は問屋が卸さない。

先ほどより室温が下がった気がする。室内であるはずなのにブリ
ザード級の風雪が吹き荒れている気がする。今すぐ部屋の外へ出た
い。

けれども三者が放つ殺気（そう、怒気でも敵意でもなく）に当て
られて体が思うように、というよりピクリとも動かない。起きたく
とも起きれない、まるで金縛りに遭った時のようだ。薄ぼんやりと
思った。今気絶したら巻き込まれて死ぬかも。

静寂と呼ぶにはざらついて殺伐とした静寂が過ぎる。

気絶すれば巻き込まれる。そう思ったが流石に無関係の人間を死
なせないだろうと思い直す。多分、恐らく、きっと。

それならいつそ気絶すれば楽なのだろうか。そう思った途端、視
界が靄掛かったかのようにぼやけた。何度か経験した、チカチ
カと明滅してブラックアウトする気絶の兆候に似ている。

ああ、楽になれる。

そう思った時。

ばかり、と表現するべきか。眼帯をした青年と視線がぶつかった。

——あ、死んだ。

理由も何もない。悲鳴が漏れる間もなくそう思った。瞬間、走馬

灯が過る。

小さかった頃。お化けに追いかけられ、兄の喧嘩に巻き込まれ、兄の分の不運を吸ったような姉の患者に絡まれ、兄に懐いた幻獣に遊ばれ攫われながらも助けられ遊んでもらった日々。時々命がけだった。色々苦労を重ね重ねたカレッジでの記憶。最後まで仲よくなれなかった学友。助けたくて助けられなかったトモダチ。魔具によって救われたトモダチ。巻き込まれまくった正体不明の事件……。あれ碌な思い出が。

そこまで来て、ふつと意識が遠のいた。グッバイ現世、ハロー天国。

しかし。

「おい」

「ぐぎゃあっ?!」

「……………お前女か？」

とつさに口をついた奇声に、青年は呆れたようだった（顔は見えないけど、絶対ようなではなく心底!）。少なくともハンナも『ぐぎゃあっ』などという悲鳴は聞いた事がないので沈痛な表情で沈黙する。あれこれ女以前の問題？

しかし、声を呑み込んだとはいえ、一瞬冷静になったことで再び、すぐさま悲鳴を上げなくなった。

当然だ。何の予告もなく、いきなり荷物同然に担がれるなどハンナの人生で初めての出来事だった。これが横抱き（世に言うお姫様だっこ）だったら悶死していた。あり得ないが、絶対あり得ないが。かろうじて悲鳴を呑み込み、しかしショートした思考回路ではそれ一つが限界だったらしく凍りつく。処理しきれない現状に、思考も上滑りしたものから完全停止にシフトした。

そのまま、ぽーいと本当に荷物のようにドアの向こう側へと放り投げられた。

「ふぎゅ、」

「ぎゃ、あああ危な！」

見事に威津島の腕の中にダイブして来たのをかるうじで受け止める。いきなり過ぎて、そして予備動作無しでやられて心臓に悪い。結構危なかったりしたのだが、幸か不幸かそれを認識するだけの処理能力は今のハンナにはない。

「ちよつと矢岸副所長、危ないじゃないですか！ ハンナちゃん女の子なんですよ！？」

「うつせえ犬ところ」

ひいつ。反射的に噛みついた勢いは一瞬で鎮火した。

「いいか、俺は今からこいつらと話がある。この部屋に掛けてある呪呪発動したが最後、誰もこの部屋に入れんじゃねえぞ」

ここ数日で溜まりに溜まったストレスが引火して、いつ爆発するか分からない状態に、コクコクと壊れた機械のように激しく頷く。今反発すれば何されるか分かったものではない。ああ俺胃潰瘍で死んじゃうかも！ 3トップと関われば碌な目に遭わないのは重々承知だが、こういった瞬間は特に思わされる。

「パール、この子を連れてさっさと事務処理済ませろ」

端的に指示を出し、部屋の扉を閉める。直後魔力が扉と壁に刻まれた魔導回路を流れ仕掛けられていた紋呪が発動、術者ないし術者以上の術師でなければ開ける事の出来ない檻が完成する。

有能な事に掛けては右に出る者のない腹黒な眼帯副所長と、単純な力勝負に掛けては左に出る者のない鬼畜な熊男副所長と、闇雲な突貫力と出鱈目な行動力で周囲をもっともしない傍迷惑な暴君副所長が隔絶される。その事に少なからず、叶え屋商会 職員は安堵の息を吐いたのだった。

ああ、上司に恵まれない。

「ハンナちゃん大丈夫？」

「はい……………」

力なく威津島に答える。

気がついた時は既に別室で横たわっていたハンナに気を使って、ハンナ本人でなければならぬ部分を除いてパールが受答えで記入しているのだが、それでも気絶した身としては尚重いらしい。

「ホント無理しちゃだめだよ。顔蒼い」

少し無理をしているのが顔に出ているらしく、威津島が心配した。悪いなあ、と同時に思うのは自分自身に対する情けなさだった。気絶。そう気絶したのだ。原因はパニックと緊張による貧血。一気に血糖値が下がったために意識が飛んだらしいのだが、ハンナからすればいつの間にかで危機意識もへったくれもなかった。それに反比例するように威津島が目も当てられないほどうつらうつらしている。で逆に冷静になったのも理由の一つだが。

「あと少しで終わる。書き終えたら少し休んでいけ」

ああパールさん優しい。すみません最初は極悪人の人攫いと思ってました。

人攫いであることには違いはないし、裏でなかなか悪い事もしている。なので極悪人という評価は正当なのだが、ここは割愛しておく。

「このこと、あとここ。それとこの紙の空欄。それで全部だ」

人ならざる手が記入場所をなぞっていくのを視線で追いかける。

——これくらいならすぐ書ける。

本格的に体調が拙くなる予感に後押しされ、ハンナは慌てて記入した。

「無理するなよ」

ぐりぐりと威津島が頭を撫でてきた為、最初の一文字は大いに歪む事となる。

九話：街案内？ ↓ いいえ暇つぶしです

結局、ハンナが叶え屋商会派出所を出たのは翌日の昼前だった。

それは見事にぐうすか寝入っていたので起こすのが忍びなかった、と語る威津島と彼を叩くマリの手によって仮眠室に転がされたハンナが目を覚ましたのは日も昇らぬ早朝。目が覚めれば見覚えのない場所だったためパニックを起こしたために一騒動起こしてしまったのは早々に忘れ去りたい出来事だった。

その後なんやかんやで朝ごはんを頂いて、これ以上はしのびなく居た堪れなかったので、家近くの駅まで送ってもらう事となった。

最後まで威津島さんベソ掻いていたなあ。他人が見れば情けないと容赦なく扱き下ろす様だったが、無類の動物好きで幻想種、特に幻獣をこよなく愛すハンナにとっては懐かれた犬がしがみついているかのような光景だったため激しく萌え悶えた。

威津島が泣いた理由が、尾崎付きで日々荒風に晒される心の癒しが去っていくのが名残惜しすぎたため。という事実をハンナは知らない。

正直夢を見ていたような気分だった。なんというか現実味が薄い。5年渡英してカレッジにいた時でも実家で幻獣たちに揉まれていた時も、魔術や異種の人たちが周りにいたはずなのに。なのに、現実味が薄いなんて。

ぐぎゅう。

「……………」

考えてもぐるぐると詮無いだけなので、ランチでも食べに行こう。
照りつける太陽に髪を焼かれながら、ああ冷たいものがいいな…

……。

「そうだな、こう暑いのは敵わん。冷やし中華を食うぞ」

「あ、それいいですね……………ぎゃあ——っ!？」

「うるせえ」

何でアナタがここにいますかっ!？

「……………」

「ファストフード店ってあんな風になってたんだな。確かに安いが
味は最悪。これなら手間をかけても自分でやった方がまだ食える」

「……………」

「インテリアもいまいち。店員のサービスもなってねえ。おまけに
人も多い」

「……………」

「ああ、そういえばさっき初めて満員電車に乗ったが、ありや修業

か体罰の一種か？ あんな狭い箱の中にぎゅうぎゅう詰めになるな
んぞ正気の沙汰とは思えんな」

「……………あの」

「あん？」

「ひいつ、——……………な、なんで付きまとうんですか……………」

「ふざけんな。付き纏ってない」

「す、すみませ」

「時間潰すのに案内させてやってるだけだろうが」

なんなのこの人ー！ 派出所で見た時と違う、フードを眼深く被
ったパーカー姿のオレ様な態度に本気で泣きたくなってきた。

目の前の冷やし中華はこの人の奢りだが、こんなに嬉しくもない
タダ飯もない。だってこれ取引材料でしょう。これ食べたら従えと
いう事でしよう。

それでも体は正直で、規則正しい空腹感と食欲を誘う食べ物を前
に今にも屈しそうになる。ああ、おなか減った、ものすごく減った、
おいしそう、でもだめだ、食べたら狗になる……………！

箸に手を付けた手が冷やし中華の上を行ったり来たりしているの
がハンナの葛藤を示していた。しかし箸に手を付けた時点でほとん
ど負けている。

十数分後、嫌みたらしくあげつらわれ目の前で食事をされ、「俺
の（金で買った）食事が食べられないのか？」という一言に屈する
事となる。せめてもの嫌がらせにデザートと飲み物を追加したが、
それは自分で払えとばっさり切り捨てられる事となった。

「まあまあだったな」

「……………あそこ、わたしのお気に入りなんですが」

「知るか。——さて、食ったからには働いてもらわなくちゃあな
あ」

「……ええと、ハイスクールに通うような齡の女の子に奢りなんて安いもんじゃ」

「食ったよな？」

「……はい」

あああああ、食べなきゃあよかった……。猛烈に後悔するがもう遅い。何事も後で悔いるから後悔なのである。

「俺の暇つぶしに付き合え」

どんな恐ろしい暇つぶしなんでしょうかと聞きたくなるのをぐつと堪える。聞いたらデビルスマイルで前にも後ろにも動けなくなってしまう、という警報がガンガン鳴り響いた。

「ぐ、具体的には」

「街案内」

「………え？」

「街案内。お前、ここに住んでるんだろ？　だったら出来るよなあ？」

「ここが役場です。最近クールビズで見た目涼しそうなんです、節電対策が空調に直撃したそうで、運が悪い時に訪れると死にそうなくらい暑いです」

「ふっん」

「ここが郵便局です。その隣がスーパーで、結構色モノを扱っている事で有名です。普通のスーパーなら扱ってそうなものは逆に手に入りにくいんですよ。変わってますよね」

「へえ」

「ここが図書館です。ジャンルは文学から医学書、幽霊や妖怪とかまで幅広いです。今の時期だと勉強に来ている学生でこつた返してますね」

「あ、そう」

「ここは街の中心街で、御覧の通りビルとお店ばかりです。ビルはオフィスばかりで、もう少し前の時間だとサラリーマンやOLで食事出来る場所が埋まっちゃいます。お昼時にはサラリーマン目当ての屋台も結構来てますね」

「ふうん」

「あそこは住宅街です。こっちの道に行くと民営のプールや小・中学校があります」

「へえ」

「……………この公園は市営だそうです。夏祭りも開催されますね。あそこの公民館では地区単位で行事が開かれます。」

「あ、そう」

「……………」

「……………」

この人、聞く気あるの？ さっきから返答が、「ふうん」「へえ」「あ、そう」の三通りだけしかないんですが。

暇つぶしって言うてたけど、本当に暇つぶしなんだなあとしみじみと実感する。腹は立たないが居心地が悪い。何を話しても反応がパターン化されているというのはこんなに嫌なものなのか。しかも相手が一切気にしていない事が拍車をかけている。

かといって逃げだせばどんな目に遭うか分かったものではないので街案内は続けられていた。街案内ってこんなに緊張するものなんだっけとハンナはこっそり涙した。

というか。この街案内という名の暇つぶしはいつまでやればいいんだろう。

ふと気になって矢岸を見上げて、

「あ？」

「…………… ナンデモアリマセン」

相手を刺激しない程の素早さで顔を矢岸側と反対斜め下に背けた。

「きやつ」

そんな風によそ見をしていたからか、どん、と人とぶつかってしまった。すみません、と謝った時にはすでに相手はすぐ傍の角へと曲がって見えなくなる。

ああ、悪い事してしまったな、と思ったが後の祭りである。この時相手を追いかける事を口実にして矢岸から逃げられた可能性があったのだが、ずる賢さから程遠いハンナが気付く事はなかった。

まあ、それは到底勧められたものではなかったのだが。

「……………」
「？ 矢岸、さん？」

矢岸の視線が、ひたり、とある一点に向けられていた。
その視線の先は数メートル先の裏路地で固定されている。

——なに？

その視線に、その先に、表現できない？何か？を感じてしまった。

「……………おい、ハンナ・ブース。暇つぶしになった。ありがとな。
——という訳でさっさと帰れ」

「へ、ええ？」

「俺はもう行く。じゃあな」

言うだけ言って、矢岸はあっという間に遠ざかっていった。その
背中が、一瞬で人垣に吞まれて見えなくなる。

最後まで俺様で自分勝手だった矢岸の背を、最後までハンナは茫然と見ていた。まるで、何かを待っていたように、猛禽の目を垣間
見せた男の背を、見えなくなった後も。

ゆっくりと、数歩後ずさる。

ここから先は、危険だと判断した為に。これ以上はマズイと、本能が告げた為に。

夕闇が迫る。

奇しくもそれは、2日前の黄昏時の再現のようだった。

十話：ハミル探偵事務所にて

橘所長に関して思う事はいくつもある。

まず給料を上げなくていいから危険な仕事に引張って行かないでほしいとか、幽霊は気味が悪いので勘弁してほしいとか、お姉さん（自称姉と言っていたが、橘は妹と言っていた。実際彼女も「年下だ」と認めていた。しかし「中身は上」だと主張していたが）とのドメスティックでバイオレンスな喧嘩は止めて欲しいとか、訳のわからないイキモノを使役させようとしないでほしいとか、色々である。

危険な仕事は下手をすればミッションインポッシブル並みにヘビ―で、幽霊は昔絡んできた変態を思い出すから嫌で、きょうだい喧嘩は即安全地帯に退避しないと即死ものだし、訳のわからないイキモノどもの面倒をみるのは疲れる。

まあ、橘の手にかかれば危険な仕事は数日がかりのお使いレベルに格下げされ、幽霊は彼の靴底にへばりつき床とハグの憂き目に遭い、きょうだい喧嘩はこっちに気を使ってくれているし、イキモノどもの自主規制は彼の恐怖政治の賜物ではあるのだが。

つらつらと思いだすついでのように、一つのトラウマがひょっこり旋毛を覗かせた――穏やかな、蒼い光を浴びた黒曜石の微笑みを。

艶やかな黒絹を腿まで垂らし、薄桜色の着物を纏い、その美麗で物腰柔らかな姿を持つ、自称 至高の魔法使い というイタ設定の持ち主（いや、実際魔法をバンバン使っていらっしやいました。が、後で知ったが、数人しかない魔法使いの一人で魔術師のトップ、

世界レベルの危険判定SSSらしい。でもだからって至高はないだろう、（至高は）。

名を思い返すだけでも頭が痛くなる、しかしただの隣人なら最高と言いきれる人物。

橘の妹、自称姉の淑やかな姿を。

橘に負けず劣らず濃い性格で、ごりごりと岩砕機で心の根っこを削られていくストレスに曝され、果ては怪獣大戦争に巻き込まれるという超局所的天災級の人物だった。そのきょうだい喧嘩の末、山一つが消失。

傍迷惑も度が過ぎると嵐が通り過ぎるのを待つ心地になると言う事を、架谷はあの時に学んだ。人は大自然の前には無力だが、度の過ぎた災厄の前にも無力なのだ。人間、諦めも大事なのだ。言い聞かせるまでもなく、縁側でお茶を飲む老女の気分を知った。

後に、何事もなく数キロメートル先で出現するという怪事件が発生し世間を大いに騒がせたのだが、そんな賑やかさとは関係なく、架谷の日常は滞りなく送られていた。

何故架谷が今その時の事を思い出すかと言えば、目の前の人物に關係する為だった。

薄く焼けた肌の上に剃刀の如く鋭い目、真っ直ぐな鼻梁と薄い唇が絶妙なバランスで配置されている——優男とは正反対の凶相風な面相になるように。

いや、鬼の様な顔つきではないのだ。鬼瓦では凶相ではなく奇相である。多分遠目からも傍目から見ても十分整った容貌である。美

人というより男前、線の細いイケメンではないが絶対スポーツマン風ではない。この爽やかさと縁遠そうレベルは橘といい勝負である。しかし、内なるものがそう見せるのか、口の歪み方（恐らくは笑顔）といいその仕草と言い、どうしても碌でもないものに通じているように思えてならない。

詰まる所、と架谷は結論を出した。

同類だ。この人絶対所長や椿さんの同類だ。
それも絶対あっちゃいけない方向での同類だ。

「それで、貴女は雇用主に対して何をしたいんですか？」

丁寧な、底に流れる悪意を感じる声だ（嘲笑というか、喜色に近い）。多分隠そうとも思っていない、不思議と不快感のない、暗闇に誘い込まれるような声。きっとハーメルンに訪れた鼠捕りや魔王の鳴らした笛の音もこんな音色だったのではないだろうか。

深みのあるバリトンは、まるで魔的だ。聴く者に破滅を与える魔笛の声。

きつとこの声に抗える人は、とても少ない。

「いえ、別に何をしたいという訳でもなくて。ただかすみちゃんに愚痴を言ってすっきりしたいだけですから」

そう思いつつもばつさり断った。この程度でどうにかなるなら、架谷はとくに破滅している身である。大抵は自身の未熟さや欲深さ（だって脅されて！と弁護しておく。借金返済しなければ自由はないのだ）が招いた結果とはいえ、嫌が応にでも日々鍛えられている身なのだ。嫌でも耐魔適性も伸びるし退魔能力ぐらい素人ながらも自然と身についてくる。

もとから望んでいないモノを引きだされる事がない程度には、架谷はこの業界に馴染んでいた。真に、本当に、心から遺憾ながら。

そんなことは全く知る由も縁もない、スーツを適当に着こなした男はおもむろに、にやり。……猫のように笑った。碌でもない感じで。例えるなら、デイズ二一映画の不思議の国のアリスに出てくるピンクと紫の縞模様の猫（名前は忘れた）。

じわり、背中から汗が噴き出てくる。思わず尻を後ろにずらして距離を取ろうとするも、すぐさま革張りの背もたれに妨害されてしまい無駄な抵抗に終わった。きゅ、と使い古されてなお張りを失っていない本革が鳴る。机越しであるはずなのに。何故だろう、この圧迫感。ものすごく追いつめられている感じがしてしまうのは。

「ハミルさん、架谷さんを追い詰めないで下さいよね。初対面の女子大生受け、絶対しない顔なんですから」

—— かすみちゃんすごいね勇者だよ真正面からそんなはつきりと！

峪梨のあまりにも遠慮ない発言に慄く。まだこのバイトを始めて5カ月程度の筈なのだが、そうまで言い切れるのはよほど気に入られているのか、はたまた意外とこの男の懐が深いのか。

……いや前者だろうとすぐさま断じた。何せこの男、奥の部屋からやってきた途端、自分に絡んできていた従業員二人（男）を「邪魔だ」の一言でぶっ飛ばしたのである。ちなみに武器は手近にあったモップ（使用済み）。現在も彼らは部屋の隅でうつぶせに積み重なっている。静かなのは良い事だ。

「架谷さん、ほんつとくにごめんね。所長一度興味持つとなかなか止まなくて。別のものに興味を持てばいいんだけど、逸らすのが

面倒くさくて」

「おま、友達の危機に面倒で……………」

「ホント言葉を飾らないんねえ、かすみちゃん」

部屋の隅っこから声がしたが女性二人の談笑に黙殺される。「最近の若いもんは……………」という呟きも聞こえたが、同様に無視された。

「とにかく、私は探偵に頼んで解決したい事は今のところないんです。ですから……………」

「君はだいぶ堅実で他人に深入りしない性質だそうだね」

いきなり人の話をぶった切る形で話し始められた。声を張っていないはずなのに、あつという間に主導権を奪われる話慣れた語り口。それにどこか、既視感を覚える。

「言い換えればそれは軸がぶれないとも情に絆されないとも言える。或いは薄情とも。そんな君が、誰かに失望したり、あるいは希望に絶つたりすることなど珍しいのじゃあないか？」

その既視感に、言いしえぬ違和感も。

「そもそも、他者に感情を揺さぶられること自体が少ないようにも思えるな。心を開いても決して依存しない。頼りにする事は有っても頼られる事を嫌う。しかし無償の信頼ほど面倒なものはない。そんな目に見えない不確かなものより、目に見える絶対価値の方がよほど分かりやすくやりやすい」

違和感がゆつくりと形を変える。形を露わにしていく。

「自分に不利益がかかったことに対して怒った事は有っても、他者への失望で我を忘れる事などない。——それが君の本質だ。どこまでも冷静で冷徹で淡泊。だからこそ計算高い。君に計算抜きの偶然で降りかかった災難はあっても、必然的に訪れた災厄は常に修正可能な範囲。実に切れ者だ」

この、言い表せない？コレ？は——ナニ？

「だから——何故だろうな？ 君はどうして、？ある人物が関わるとき？、その？関係性が揺らぐ？瞬間激昂する？」

「——っ！」

びくりと体が痙攣する。けれど動けない。

ぐるぐると視界が廻り——そのまま、架谷の体から、急激に力が抜けていった。

「架谷さん！」

「峪梨さん、動くな」

「、でも！」

「助けたいんだろう？　？アモン？」

その言葉に、峪梨の体が引き攣ったような反応とともに動きを止めた。

「…………その名前では」

「大丈夫だ。彼女は眠っているだけだ。後は目覚めた後に説明をすればいい」

チャリ。金属が擦れる音が、ハミルの手の中で鳴る。それは銀製の細い鎖の音だ。鎖が通されたチャームと鎖が擦れ、小さな音が不連続に鳴る。チャリ、チャリ。

「——分かりました。それと、私はアモンじゃなくてマモンです」「同一だ、という解釈もある。大して問題じゃあないさ。——勿論、君次第だけだね」

「大問題ですよ。……じゃあ彼女隣の部屋で寝かせてきます。間違っても布団にもぐりこまないで下さいね」

ふん、と鼻息一つで軽々と架谷を持ち上げ（いわゆるお姫様だったこというやつで）、そのまま隣室へと姿を消した部下の背を、ハミルは遅いものだと見やつた。

そこで、ああ、遅くなったのか、と思い直す。

彼女は確実に成長している。このままもっともつと優秀に成っていけば、マモンの性質でなくアモンの能力^なを掲げることできるだろう。

それを思えば、数十年の苦勞など大したことではない。

手の中のチャームを弄ぶ。クルスを模ったそれは男の指では摘むほどの大きさしかない。その中心に設えられた二重構造になったガラス玉は澄んだ赤。しかし、その中心は白く濁って渦巻いている。今にも内膜を食い破ってしまいそうなその濁りに、ゆっくりとハミルは嗤う。

半年前嗅ぎつけた、そして叩き斬られた手掛かりが手中にある事を、愉悦を以って迎え入れる。

——わざわざ？あんな真似？してまで、飼っていたいとは。

そうまでして欲するのか。
そうまでして求めるのか。

絶対に理解できない筈の感情を、しかしハミルはその身をもってよく知っていた。

そして、思う。

糞ったれな運命とやらは、既に獲物を捕らえているのだらうと。
もうひとつ。

——どうあがいても、あいつらはお前の跡を辿るらしいぞ。

「なあ、破滅の黒」

災厄と畏れられ、悪夢と怯えられ、トリックスターの如く振る舞い、自分本位でハミルには決して真似の出来ない、しようとも思えない道を望んで歩いた——たった一人の忌名を口ずさんだ。

十一話：橘事務所では

「あーれてるなア、坊」

庵夜の呟きに、無言でレナが頷き返す。普段なら小動物のようなその挙措に相好を崩す人物がいるのだが、今いるのは庵夜の他にはブチ切れた拳句に荒れ放題の凶暴魔人ぐらいである。そして今現在、彼は庵夜の一部を粉碎し続ける事に全霊を傾けていた。

「たく、痛みがねえ訳じゃないんだぞ。修復とて燃料要らずとはいえ手間は掛かるつつうのに」

「……………大丈夫？」

「おう、全力でシャットアウトしてるからなあ。しかしちよつとでも気を緩めればこつちに速攻で影響出るかもな。あーあ、ますます力上がつてねえか、坊の奴。まともにやり合ったら即殺だな」

重い溜息を吐く。帰ってきた途端あの調子で、一向に説明をする気など欠片もないのだ。そもそも庵夜たちは彼の手駒ではない。それゆえに何一つ説明も指示ない。当然と言えば当然である。そもそも、庵夜に説明というものは不要である。それを重々承知している橘にとっては、その理由は腹立たしい以外の何物でもないのだろうと理解できた。

仕方がなしに大人しくしていたのだが、急に激しく舌打ちしたかと思えば「殴らせろ」と宣言、そのまま現在までバーサーク状態を続けている。

——まあ確かに、坊のは？貯め込む？事に向いてねえしな。普段ぶれない分、一度荒れるとほんと殺されそうだ。

「と、うおっ！」

突如、顔面に向かって何かが強襲してくる。直撃コースのそれはすぐさま後ろの壁に激突した。

ドグシャアッ！

派手な音から察するに、原形さえ残っていないのだろう、恐らくは。此処はテナントではなかったかと心配になるが、自分の気にする事ではないと切り替えた。というか、今のタイミング、まさか考えが読まれたかと危ぶんだ。もしそうなら後で相当恐ろしい目に遭う可能性が非常に高い。そこまで考えて、

「……………ソファア」

「レナ、落ち着け。あるから、もつと良いのが用意してあるから。後で取り換えるし、このソファアもきちんと直してやる」

すぐさま相方を宥める。どこまでも純で無垢な幼子は、優しく穏やかで泣き虫ではあるのだが、その分感情に素直でどこにあるのか今一つ判りづらい地雷は非常に危険であるとよくよく理解していた。かつて一度だけ放置した結果、見るも悲惨な状況になった事があり、今でも苦く忘れられない記憶として刻まれている。

ふと、自分はいつからこういう役割に落ち着いたんだと考える。少なくとも昔は怖れを振り撒き畏られる存在であったはずだ。そこまで思っ

——ああ、あの二人に巻き込まれてからか。

当時を思い出し、突発的片頭痛に襲われつつも、仕方がないと納

得させた。

恐らくは。あの悪夢は、あと幾度かは舞台と役者を変えて起こるに違いないと思いつながら。

「……………おい」

「お、坊、気は静まったか？」

ぴたりと騒音が収まるとともに、庵夜に背を向けたまま橋の動きが止まっていた。ユラユラと怒気が立ち上りながらもそれ以外はいたって静かな様子に、ああやつと鎮まったと慄きつつも安堵した。こつも感情が激しいのは血か。血なのか。

「あの子は、架谷さんは今どこにいる」

「あ？　今はオフィス街の喫茶店にいるな。あす羽奈^{はな}つてところ…

……………」

ごつ！　と革靴が庵夜の顔面にめり込む。

「バカ野郎！　それはフェイクだ！　さっき彼女に掛けた術が解かれた。今いるのはオフィス街の外れのビルだ！」

「んな、はああ——つ！？」

「なあ、庵夜」

「ああ？」

「……………あれだよな、あの人の口が悪くなったのって、絶対お前のせいだよな」

「うるせえ。——で、なんだよ」

「いやあ、ちよっと師匠から頼まれ事が……………」

「断る」

「ちよ、まだ何にも言っていない！？」

「うるせえ、絶対ロクなもんじゃねえだろう！ こっちに態々流しにくんな！」

「分かっているなら黙って頼られろ、というか断れる立場と思うなよ！ どうせ師匠絡みじゃ無力だろうが！」

「ぐ……………！ ……………で、何だ。聞くだけ聞いてやる」

「いやあ、橘事務所に」

「断る！」

「何で！」

「絶対ロクなもんじゃなかったじゃねえか！ 坊の性格ってあれだ、腹真っ黒い割に皇冨の野郎並みに明け透けじゃねえか！ 遠慮容赦に手加減が空の彼方だぞあいつ！ お前より性質悪いわ！」

「おお、褒め言葉。……………いやあ、だって師匠気にしてたんだよ。

何度が様子見に言ったけどすぐ追ひ払われてあんま見れなかったんだけどさー。可愛い姉ちゃんがいんだよ、これが」

「……………え、坊に春？ だったら目出度いじゃねえか」

「……………おい。師匠たちのあれこれや、椿さんのドタバタ忘れた訳じゃないだろうな」

「……………あれ、坊つてもしかしてそっち寄り？ 皇冨の野郎じゃなくって？」

「二人が似た者同士なのは常日頃の反目から察しろ。骨は拾ってや

る。レナちゃんも俺が責任もって面倒見る」

「ふざけんなレナに手え出すんじゃないやねえ——！」

「黙って行って来い——っ！ 師匠の話だとそっちでゴタゴタ起きそうだから手え貸してやれとの事です文句は言わせねえぞ尾行のプロが——っ！」

「うるせえお前が行け——！」

「こっちだと諸々打ん殴って終わりだろうが——！ それじゃあ意味ないって理解しろ——っ！」

走馬灯の様に二週間程前の会話を思い返し、すぐさま「何やってんだ」とかつてない冷ややかな目をした赴夜に殺されるという未来像が瞬時に思い描かれた。

いや確かに、本当に。追尾に関しては絶対の自信を持つ身であるはずなのに、一体どうして——

「おい、レナ行くぞ」

「て、おい坊！ レナは戦闘用じゃあ」

「お前の目を誤魔化す方法何ぞ、一つだけしかないだろうが」

見えぬようにでも潰すのではなく、違うと誤魔化す。

そんな芸当が出来るモノを思い浮かべ——庵夜はたった一つだけその存在に思い当たった。

「そんなもの、悪魔使いしか存在しない。そうならば、同種おまえはともかく天敵レナを連れて行かないという選択肢はない」

そう言い切った橘に、声をかけようとして、——それが肯定だったのか否定だったのか、庵夜は二度と思い浮かべる事は出来なかった。なぜなら。

「……………うわぁ」

思わず。心底呆れたような絶望したような嫌なものを見たような感心したような、様々な感情が緋い交ぜになった結果、非常に気の抜けた声が出た。

同じだ。同じすぎる。

かつて思い出す。

橘の母親が形振り構わず愛した死神を引きずり上げた時、椿が手段を問わず自分の傍まで愛した人間を引きずり下ろし時。

彼女らが見せた、絶対不動の鋼の意思を宿した、大いに燃え盛ったあの瞳を。

これはアレだ。運命のナント力を狩る時の目だ。

運命のナント力——運命の死神、運命の宿敵、運命の恋人、運命の弟子、などなど。徹底的にある方面で惚れ込んだ相手に対する執着を三段飛ばしで盲執している対象をひっ捕らえる狩人の目。

その諸々で巻き起こった、血で血を洗い、血の雨を噴き散らす応

酬の嵐。

一瞬で過去のアレコレが喚起される。

——え、あれが再勃発する？

その可能性に核が怖気に震えそうになった瞬間。

「誰か、？いる？」

レナが呟いたその言葉に、場の雰囲気が一変する。
ただし、それは殺伐としたものではない。

まるで来訪者を歓迎するような、穏和な（先ほどと比較して、という注釈は付くが）空気が室内を満たした。

まるで、友人が訪れるかのように。

まるで、恋人が尋ねるかのように。

まるで、取引先が来るかのように。

まるで、まるで。

「いつまでそうなさっているつもりですか？」

橘が、ドアに向かって、正確にはそのドアの向こうへと声を投げかける。

しばしの間。呼応するように、扉が内側へと開く。

「ようこそ、＜橘事務所＞へ。当事務所は当方で手に負えると判断した依頼をお受けし、それ以外は適切な業者に回すというシステムを取っておりますが——いかがな御依頼でしょう」

穏和に、穏やかに、緩やかに。静かに波立つ事なく言葉が紡がれていく。その言葉遣い、声色、表情、仕草。どれをとっても『接客業には向いていない』と架谷評した素っ気なさはどこにも見当たらず。

ない。

「そうですね。まずはそのソファに座って、腰を落ち着けてから聞いていただきたいのですが」

「ええ、こちらへどうぞ」

殊更丁寧に受け答えるパーカー姿の青年に、態度を崩すことなく、橘が接客する。

すい、とレナが奥の備え付けキッチンに消えた。その背を庵夜が追おうとし、

「手前はこつちだ」

「……………やっぱり」

触角を伸ばすだけ伸ばしておいて、渋々ながらも大人しく橘に従った。

橘事務所、そのビルの正面玄関。

「きゃっ！」

少女が驚いて仰け反った。見慣れないモノがいきなり現れた為である。その眼前には、漆黒の、影が凝り固まったような……、

「イヌ？」

どこことなくシルエットが犬を連想させるその動物を見詰めて呟いた。この大都市のど真ん中、しかもビルから飛び出してくるようなイキモノとしてはまだ不自然ではないようにも思えるが、しかし。

「あ、ちよつと！」

保護しようかそもそも迂闊に触れていいのか分からず呆けていた隙を突くように、そのイキモノは外へと飛び出していった。慌てて追いかけるが、すぐに特徴的な姿は街並みに紛れて見つからない。人間以外の生き物など目立って仕方がない筈であるが、闇に溶けてしまったかのように、もうすでに影も形もなくなってしまっていた。

「何だったの？」

狐にでも摘まれたようである。そもそもアレが本当にイヌだったのかどうかも怪しい。いや、あんな風態の生き物がいるのかすらも怪しく思える。

しばらくそのまま突っ立っていたが、どうしようもないだろうと階段の手すりに手をかけた。

「……………あ」

「あ、レナさん」

「……………ん」

「今からお出かけ？」

物静かで大人しい金髪の美少女が階段を下りてくるところだった。鞆を斜め掛けにしており、どこかに出かけるのだろうと窺える。

尋ねた瞬間、踏み込み過ぎただろうかと懸念した。ゆっくりと、大きく左右に首を振られ、氣遣いすぎかと安堵する。

この少女、まるでガラス製のビクトールのような容貌で、不用意に触れば壊れてしまうような儚い印象が強すぎるのだ。それも先ほどまで嫌でもアクの強い人物と一緒にいたため、その相乗効果でいつも以上に可憐に思えてしまう。

「……………これから、オフィス街」

「お買い物にですか」

「ううん、お仕事」

見知らぬ人への警戒心が強いため、会話にならないかもしれない。彼女の兄に事前に言われ、そして今までも気後れしながらしか会話が成立していなかったレナが、珍しくどもることなく言い切った事に僅かながら目を見開いた。

そして、その内容にも。

「それじゃあ」

「あ、はい。頑張ってくださいね」

「……………ん」

階段を駆け下りていく姿に、いつそ天使の羽根でも生えているのでは、と夢想する。だってそれくらい可愛いのだ。

既に外は黄昏を追いやった薄暗闇に包まれている。

ああ、時間とは早いものだ——もうあの赤は遠い。

儚いと、可憐と評した少女が夜の街へと向かっていくことに何の違和も覚えぬまま、少女は階段を上って行った。

そこで、ふと思う。

——レナさんに、さっきのイヌの事聞いておけばよかったな。

閑話：いつか誰かのカンショウ

赤、赤、赤、黒、赤、黒、黒、黒。

錆色が乱立する空間に2色が入り混じって浸食する光景は、何とも筆舌に尽くしがたい。

或る者は絶景と。或る者は異常と。或る者は美しいと。或る者は気持ちが悪いと。或る者は、この世ならざるモノと、評するのだろう。

「まあ、どうであれこう？ニオウ？とな」

その中心に立つ柱——否、人が呟く。

撒き散らされた赤と倒れ伏す黒の中心に立つ姿は花柱を思わせる。……それは、撒き散らされた赤も倒れ伏した黒も、その人物を中心した花卉のようであるために受ける印象なのだろう。

数えるのも馬鹿らしくなるほどの撒き散らされた色と、両手両足さえ生ぬるい数が倒れ伏す色。赤と黒からなる花の軸となった人物は、どこまでも面倒臭そうに呟いた。

「ああ、鼻が駄目になる。こんなことなら私が地下に行けばよかったか？」

しかし任せるのもなあとぼやき続ける。薄暗闇の中で表情は読めないが、その声の調子からしてただ暇だから呟いているだけ、という回答が最も正しく思えるため、本当にぼやきなのは怪しいのだが。

その人物の周りに漂う紫煙が、風もなく揺れる。

「主、確認が終わりました」

「ああ。……………これで貸し借りは無し、といきたいものだな」

背後から、目の前から、天井から、あるいは別の場所から。気配もなく姿もなく声を掛けられたのにも関わらず、花柱の人物は動じない。むしろ別件について気にしている様子で、再び独り言のようにぼやいた。

「難しいのでは？」

しかし、そのぼやきの中に含まれた希望的観測はバツサリと声に切られる。

「あつはつは、無理だろうなあやっぱり。……………ううん、笑って吹き飛ばせるかと思っただけど、やっぱり無理だ。こっ、腹のあたりがずうんとする気がする」

「気のせいです」

「そこはストレスでは？　じゃないのか」

ぱつさり切り落とされたためか、声が幾分か沈んでいる。しかし、冷徹な声には一切手加減しなかった。

「あなたにそのようなものを感じる理由はありません。むしろこの状況とて楽しんでいるでしょう。——空調システムの調整が終わりました。そちらの悪臭も直に消える筈です」

それきり声は沈黙した。

まるで初めから花柱の人物以外誰の声もしていなかったかのような清閑とした状況に、しかしその人物はまるで気にした様子はない。

「んー、後は？アチラ？次第という訳か」

周囲に何一つ興味を引かれなにかのような足取りで、今最も気にすべき案件に思いを馳せる。前が見えているのかさえ怪しくはあるのだが、その足取りに迷いはなく、黒色を踏みつける事はない。そこでふと、足を止めて呻きに近い呼吸を吐きだした黒色を見下ろした。

「運が悪かったのか良かったのか。私が相手だった事がせめてもの救いかな」

聞こえていないと分かりつつも、私以外なら皆殺しぐらい平気でやりかねないものなあと付け加えた。

それは事実である。彼らの成した事、成そうとした事は紛う事ない禁忌であり、恐らくはこの十数年は確実に三大組織の二角は最も神経を尖らせる事案だろう。それこそ、事案そのものを消す為に、一切をなかった事にしかねないほどには。

「全くもって、本当に幸か不幸か分かったものじゃあない」

しかしそれでもその人物はそうぼやく。

いや、それは決してぼやくではない。声が告げたように、その人物は常に楽しんでいる。彼らが成す事に対して絶対の障壁であるにも関わらず、それを自ら望んでそうあるにも拘わらず。

楽しんでいる。その感情の底にあるものは、恐らく常人には決して理解できず、また共感できないであろう感情だ。

「ああ、本当に忌々しい」

かつての宿敵であり自分自身とも言えた一人の？人間？——そ

の影を懐かしむ感情も、その影があることへの好感も、そう感じてしまう自分への嫌悪も。総じてその人物は『忌々しい』というカテゴリーに放り込む。

その『忌々しい』という表現でさえ甘いことから、ああ本当にこれは末期なのだ——かつて、結局は敵意ではなく殺意で、嫌悪ではなく友愛で、反感ではなく共感で殺し合った宿敵を思う。それら全てを受け入れて、くつりと晒う。

「主、連絡がありました」

突然耳元で囁かれたような距離感で声が耳朵を震わせる。それにもやはり驚く事はなく——寧ろ、目を細めて言葉を待つ。

「どうやら一足早く、プランが移行しそうです。術がソロモンに解かれ、鳥目が例の場所に」

「おや、あの子は？」

「……事務所に来客があったそうです。どうやらタダモノではないらしいのですが」

僅かに、声が詰まる。恐らくどのような人物が見当がついていないのだろう。だが、

「ああ、分かった。そいつなら問題ないよ。しかし、プランは多少の変更が見られるだろうね。ルートCを考慮して、プランDを一足早めておいた方がいい」

あっさりと答えが返る。もともと穴だらけでその概要の殆どが立案者の頭の中しかないのだから、声が詰まるのは当然だった。そして、立案者があっさりと声の戸惑いを解消するのも当然である。

「了解しました」

「それと、出来れば全員に連絡。そろそろこの案件も終わりそうだから。それだけを告げて、その人物は暗い室内から明るい外へと抜け出る。」

夕日に染められた空を見やり、黄昏に近づく光景を遠望する。

「誰彼時、逢う魔が時、ね」

次に此処を訪れる時を思案しながら——もう一度、ここでこの光景を見る事はあるのだろうか、ふと憂いた。
憂うという感情など、あるわけがないのに。

十二話：オフィス街（夕闇）

夕闇が迫る街中、地元住人にはオフィス街と呼ばれる区域。此処はテナントビルが建ち並び、様々な企業や飲食店、服飾店、家電量販店などがぎゅうぎゅうに押し詰められた場所である。就業人口が殆どのこの区域は、必然的に昼と夜とで人口に落差が生じるため、時間帯によっては全く人気がない地帯へと変貌する。

仕事帰りでオフィス街の外へと向かって放流される流れの中、その流れを逆行していく人影があつた。態々人氣が薄くなってくる場所へと向かう者はそう多くはない。

この区域にある飲食店はランチがメインで、あとは喫茶店やケーキ屋といった軽食やテイクアウトメインの店ばかりが建ち並んでいる。もし夕食を摂りたいというのならば、この流れの先に並んでいる居酒屋系列だろう。断じてこの先にある区域に用はない筈だ。

その物珍しさに好奇心を刺激されたのか、ちらほらとその人物に視線を送る者は何人かいた。が、すぐさまその視線は逸らされる。

それは慎ましやかな道德心故、などという御綺麗な理由ではない。単に、関われば碌な事がない、という触らぬ神に何とやらに基づく自衛心故である。

その人物を見た者が共通して挙げるであろう特徴は、年若い男、黒髪、癖毛、眼帯。そして、恐ろしく不機嫌そうであつた、といったところか。近くにいただけでピリピリと肌を刺激されるような空気を纏い、周囲の様子が目に入らないかのようにずんずんと歩いていくその姿を見て関わりたいと思う者は少ないだろう。明らかに面倒事の権化である。

淡い薄紫色に世界を染める陽光に、濃密な青が滴り染みていく中。

「よう、？はじめまして？か？ アキラ・フヤ」

カフェくあす羽奈>のテラスに幾つか設置された内の一つのテーブルとイス一式、そこで早めの夕食を摂っていた青年と、男の『顔合わせ』が始まった。

余談だが、先に説明したようにこの区域では夕食を摂るのには向いていない。そしてあす羽奈にはランチはあるがディナーは存在しない。テーブルの上に並ぶのはコーヒーとフルーツタルトと焼き菓子が数点。決して夕食として摂取するべきものではない。その光景を見て、男は猛烈に顔を顰めた。見るだけで甘ったるい晚餐に、食べるわけでもないのに見るからに食傷気味である。

「ええと、どちら様ですか？」

一見して二十代後半、青年と呼ぶには些か年をとり過ぎているが、彼の持つ独自の瑞々しい空気と大人しげな顔の造りが若々しく見せていた。

いきなり本名を言い当てられ当惑した様子を見せるも、必要以上に警戒もせず問いかける。その姿に男はいけすかない様に鼻を鳴らした。

青年、と呼ぶなら男の方こそを青年と呼ぶべきだろう。いまだ二十歳を過ぎた程度の年齢、端々から幼さが滲んでいる。しかし、男の纏う空気は人を使う者、人の上に立つ事に慣れた者のそれであり、持ち得る筈の若々しさを追いやっていた。

ある意味で真逆の二人は、しばし沈黙を以って視線を交わした。成人した男性が見つめ合うという、両者の間に緊張した空気がなけ

ればただの薄ら寒い光景は、しかし数秒で均衡が崩れる事になる。

「妙な擬態は止める。仮にも 赴夜 を名乗ってるんだ。それが本性って訳じゃないだろう」

「……………うつん。ホント失礼な人だなあ。まあ立ったままではなんなので、こちらへどうぞ。矢岸サーシャ君」

笑顔も敬語も崩さぬまま、それでも放たれた言葉がアキラの印象を変えた。その事実、そして名乗らぬままに本名で呼ばれた矢岸は口端だけで歪を滲ませてわらった。

「それがお前の本性か？ アキラ・フヤ」

「その呼び方どうにかありません？ フルネーム呼びって何度聞いても斬新な気がします」

「俺の勝手だ。そもそも呼ばれるだけありがたいと思え」

立ったまま見下した言い分に溜息を吐く。思わず、とも見えるが、先入観によつては何とはなしに態とらしくも見える。

「うつん。随分と傲慢だなあ。で、時間もないのでさくつと本題にいきましょうか。そもそも口八丁手八丁って得意じゃないんすよね……………あ、失礼。それで、私に何の用かな？」

「お前の主の居場所を吐け」

端的に、質問を告げる。それはあらゆる意味で矢岸の望みを叶えるキーパーソンの所在を問う言葉だった。あまりにもあからさまで明け透けな問いに、アキラは器用に片眉を跳ね上げた。

「師匠のですか？ ………………一つ聞きますが、その質問、答えが出ると思つてますか？ あなただって知っているでしょう？」

「そうじゃなきゃ何で手前が此処にいる、
メッセンジャー 伝言人」

言い切った矢岸に対し、処置なしと言わんばかりに首を振る。

「言い換えましょう。？何故主が態々そのような事をのこしておく
とでも？？」

己が不利益になるような事を、態々仕出かす者はいない。聞く者が
そう受け取るその言葉は、しかし彼の主に限っては違った。

——何故、主がお前如き羽虫のために、そのような言葉を残す
と思う。

快樂主義、刹那主義とも言える彼の主は、損得勘定を度外視した
行為を往々に行っていた。だからこそ厄介で手がつけられないと煙
たがれていたが、同時にどこの組織にとっても属すことこそが不利
益になる存在であったため、その行為は見逃されていた（正確には
見て見ぬふりをされていた）事も少なくはなかった。

よってその言葉は利己的な保身ではなく、相手への侮辱以外の何
物でもない。……しかし。

「もう一度言おうか、メッセンジャー。お前の主の居場所を吐け。
手前の主は人をバカにする事に命をかける碌でなしだが、この手の
無駄手間は嫌っていただろ」

言え。絶対の確信があつた。確実に、自分へと宛てた言伝が存在
するという確信が。

随分と傲慢で、不遜な態度である。矢岸の求めるキーパーソンが、
高が一度関わった程度の人間にどれだけその意思の矛先を割いてい

るか、想像するだに不毛だろう。

しかし、と矢岸はその考えを覆す。左目の疼きが、相手の関心の薄さを否定する。

「……………頑迷な」

ふ、吐息のような溜息がアキラの口から洩れた。

「主からの伝言は存在しません。が、？赴夜？を名乗る身として伝えるべきは伝えさせてもらいます」

……………おもむろに、皿の下に敷いていたナプキンを矢岸に向かって差し出した。

一瞬、矢岸の眉間に物凄い皺が寄る。一生とれないのでは、と慄く程深く刻まれたそれは、しかしすぐに薄くなった。

「ではこれで。縁があればアえるだろう」

につこりと。柔和と呼ぶべき微笑みを浮かべてアキラは颯爽と立ち去って行った。

「……………」

帰宅ラッシュのピークなのか、いつの間にか壁が出来るほどに増えた通行人の向こう側に消えた人影に目もくれず、矢岸はじっとナプキンを見詰めていた。

—— 此処にて、事は起これり。

「……………」

遺されたモノに込められた意味は測りかねた。

しかし、矢岸の沈黙の原因はそこではなかった。アキラの言葉の意味が、その言葉が裏付ける現実が、信じ難かったためだ。

アキラが師匠と慕い、矢岸のキーパーソンとなる人物に彼がいかなる思いを抱いているか、それは矢岸しか理解していない事柄だった。しかし、それでも他者が幾度も突き付けられた事実に対して彼がどう感じているのか、推し量ることはできる。やはり……………――
――その後続く言葉を推測する程度には。

しばしの沈黙の後、とりあえず言うべき事を言っておく。

「…………… 此处、後払いの店だぞ」

数時間前ある少女に案内された時に「ここ美味しいんですよ」「いう言葉を切っ掛けに交わされた会話の中で知った情報を、低い声で呟いた。その米神には、先ほど刻まれた皺よりもくつきりと血管が浮きあがっていた。

全くの余談だが、結局矢岸が勧められた席に着く事はなかった。

喫茶店<あす羽奈>から数ブロック離れた煉瓦で囲われた花壇。

腰かけに丁度良い高さであるのを良い事に、服が汚れる事も気にせず花壇に体重を預け、携帯を耳に当ててアキラは会話をしていた。

「もしもし。……………はい、回収は終わりました。それと彼にアレも渡しといたんで。……………ええ。了解しました」

先ほどよりも大分崩れた口調は、彼の与える印象をがらりと変えた。若々しい男というよりも学生気分の抜けない社会人という枠組みがよく似合いそうである。

「はい。……………あ、ちょっと待つてください」

聞きたい事があるんで、と慌てた様子で会話相手を引きとめる。

その表情からは既に大人しげな容貌は消え去っていた。

「何でわざわざあいつを呼んだんですか？　そもそも、舞台裏に終始するんじゃないかなかったですよ？　……………ちょ、ダンマリ止めてくださいって！　——あーあ、行っちゃった」

心底残念そうに、レナさん相変わらず仕事マジメだなー、と零す。

その姿は正しく合コンで目当ての子に袖にされた男のものだった。

無茶をしなければいい。それだけを胸の裡で呟く。

帰宅ラッシュがとうに過ぎ去った人の流れに乗って、アキラは夕闇に吞まれた夜の街へと消えていった。

——ああ、そういえば。

ふと、あの人に魅入られた女性を思い出す。アキラの心に影を落とす、という点ではレナもあの女性も同じだった。だから自然と連想してしまったのだろうか、と思索する。

彼女は一体どのような決断を下すのか。それがこの物語の鍵なのだろうか——そこまで考えて、思考を放棄した。もう、アキラ・フヤの関与できる状況は過ぎ去っている。特に、あの女性とは。

それでも、憐れと言えば憐れな女性の決断がどのような幕引きへと繋がるのか。出来れば傷つかなければいい。そればかりが酷く気になって仕方がなかった。

十三話：告げられる事実

目蓋の裏が刺激され、ううんとくぐもった声が出た。眠い。雀の鳴き声と刺し込む光でああ朝か、と架谷は判じた。

(……………ん?)

ちよつと待て。何かが可笑しい。一気に眠気という拘束を振り切った本能が告げる。

……………私は今、一体どこで眠ってる？

がばり！ うつ伏せの状態のまま腕立ての要領で跳ね起きる。待て待て待て待て待て待て！ パニック状態が加速的に進み、それに伴って顔から血の気が引いて見事な顔面蒼白になっているが、架谷は全く気付いていなかった。

そんな事よりも、現状把握の方がよほど大事で重大である。目覚めたばかりの脳がアドレナリンで急激に増量して送られた血液で活性化し、意識に現状を呑み込ませる。かくして。

「……………っ!？」

悲鳴にならない悲鳴が、彼女の本日第一声となった。

その声に連動するようなタイミングで見知らぬ部屋の扉が開く。

「あ、架谷さんおはよう——ぎゃっ!？」

早いねえ、と続く筈だった暢気な非常に聞き覚えのある声を聞いた瞬間、架谷はその声の主に向かって飛びついた。目にもとまらぬ、

という表現がよく似合う俊敏さである。……………一瞬、飛びつかれた
峪梨がネコ科大型肉食獣に襲われた錯覚に陥った程鬼気迫る、迫力
のある動きだった。

何が起こったのか聞こうとして、峪梨はそれを止めた。代わりに
その目が絶対零度の冷たさを滲ませる。

「何してるんですか、桐原さん」

汚物を見るような眼で、先ほどまでは死角で見えなかった桐原を
見止めた。……………正確には、桐原の行動を。

「い、いやああゝこんな美人な姉ちゃんおるんじゃったら何もせん
のは失れじゃんぶるっ！」

訳のわからない悲鳴とともに顔面を本（世界地名大辞典・索引。
全456287ページ。顔幅より分厚い）と一体化させて倒れ伏し
た。勢い余って後頭部を強打、その反動で顔面から突っ伏した。

「ごめん、架谷さん。こっちのガードが甘かったみたい。怖い思い
させてほんつとごめんね……………」

「う、……………へ、平気。でもしばらく視界に入れたくない。気持ち
悪い……………」

「うん。そうだよな。大丈夫、ハミルさんに頼んで遠いところへ捨
ててきてもらうから」

「向こうで休んでるね……………」

顔色が優れないまま出て行った友人の背を見詰める事しばし。そ
のままゆっくりと、ドアを閉じた。……………ばたん。日常的な聞き慣
れた音は、今の桐原にとっては無情に落とされる断頭台ギロチンの前触れに
しか思えなかった。

「……………」

「何をぶつぶつと言っていていらっしゃるんですか。本当に気持ち悪いですよ、桐原さん」

「ぐえっ、そ、其処は踏まんでくれい……………て、そんな敬語使うほど!？」

「お早い復活ですね。そしてもう一時間ほど、部屋の隅で眠っていて下さい」

床に転がっていた世界地名大辞典・索引をゆっくりと両手で持ち上げた。その背表紙が妙に赤っぽく見えるのも気にせず、大上段に振りかぶる。

「百合がどうか呟かれる事も気持ち悪いですし、友人の寝顔を盗撮されているような方、いなくなっ頂きたいと願わずにはいられませんね。出来れば即息を止めてください。いえ、むしろ今すぐ永久に」

「え、それは死ねって言うんと同意義じゃ」

中々に醜いオブジェを後に、峪梨はシーツと布団と枕を抱えて部屋から退室した。

「……………ここ、かすみちゃんのバイト先、だよな」

半ば自分に言い聞かせる形で独り言を零す。先ほどの部屋の隣室であるこの部屋には見覚えがあり、そこから昨日の出来事が芋蔓式に思い起こされた。

薄ぼんやりとだが、確かにこの事務所の所長と会話した事は覚えている。その内容までは思い出せないのだが。

何か言い負かされたというか、一方的に、圧倒された？　なんだか向こうばかりが何やら言っていた気が……………——そこまでは記憶にあるものの、それ以上の詳細はさっぱりであった。まるで雲を掴むような心地だ。もがけばもがくほど、手の中から水が零れおちるように虚ろになっていくのを感じた。

「目が覚めたのか」

びつくう！　架谷の体が大げさなぐらいに跳ねる。全く気配がないから気が抜けていた、というのもある。自分の中に中にと潜っていたという事も。しかしそれ以上に、その声だ。低く掠れたテノールが、記憶をざらりと撫で上げて動揺させ、湧き上がった不快感と危機感をごちゃ混ぜにした感覚が心臓をきゅっ、と縮こまらせてきつく束縛した。

「驚かせたようだな」

「……………いえ」

ゆつくりと振り返る。……………昨日と変わらずの何を考えているか分からぬ鉄面皮を張りつかせて峪梨の上司——恐らくは、ハミルという名の人物が、居た。

「？あれ？から一晩丸丸寝入っていたんだ。流石に少し気になってな。どうやら、体に特に問題はなさそうだけど」

一晩寝入っていた、と言う事には納得したが、その後の『流石に』『少し』などという発言には引つかからざるおえない。その上ぱつと見て健康状態を判断しないで欲しい、と架谷のハミルに対する心情は大暴落だ。事実彼の言うとおり、架谷の体に異変が全く無いとしても、だ。

だからと言って噛み付くわけにもいかず、またベッドを一晩貸し渡してくれた礼を踏み躪るなど論外だろう。相手がどのような人物であれ、感謝するべきところはしておくべきだ。弱みを握らせ続けるのは非常に恐い、と算盤が弾かれた。

「一晩御迷惑をお掛けしました。……………どうしてこうなってしまったのか、よく覚えていないんですが、本当にありがとうございます」

最後の部分は、『何があつて一晩も寝入る破目になったんですか教えて下さいよ』という催促なのだが、すぐさま後悔する。しまった、これは後でかすみちゃんに聞けばよかった。

しかし一度口から出てしまったものは仕方がない、と即座に切り替えた。そうつと上目使いで相手を窺う。

……………。何故だろうか、と架谷は絶望した。何故だが物凄く聞いてはいけない事を聞いてしまった気分陥った。

彼が怒っていたわけではない。不機嫌とも違う。悲しそう——あり得ない、薄ら寒さを覚える前に切り捨てた。とかく、そういう感情ではない。

……………追いやった獲物が予め仕掛けておいた罠に予定通り掛つたのをほくそ笑む、実に陰湿な顔をしていた。してやったり、という

表現が近いのだろうが、滲む陰湿さが薄暗い混沌な方へのマイナスへと印象を振り切らせていた。『陽気』『快活』、正の因子その悉くが真つ黒く塗り潰される陰湿さである。そんな冗談や悪戯鬼の使うような表現は欠片も似合いそうにない。というか生温い。

まるで、とその対比例を思い描いてさらに絶望感が犇めきあう勢いで募り募ってくる。まるで、そうまるで。

——まるで、所長みたいなワライカタ何ですけど！

漢字は絶対笑い方、ではなく嗤い方のほうだ。嵌められた。この言葉が自然と浮かび上がる。一体どこに向かつて蹴落とされるのかは知らないが、碌な場所ではない事だけは保障されてしまっている。本気でお断りしたいと切に思った。

「そうだな、まだ峪梨君もまだ説明していないようだし——良いだろう」

昨日の丁寧な言葉遣いがない事はともかく、架谷は昨日数度聞いた峪梨の呼び名が『さん』から『君』に変化している事に気付かなかった。些細と言えば些細だが、この変化に気付いていれば僅かながらにもハミルの関心の矛先を逸らせたかも——否、と訂正する。気付いていても積もる心労に大差はなかっただろう。

「君は昨日、私の話を聞いている途中で倒れたんだ。そこまでは良いかな？」

問いかけられて、記憶を探る。確かに昨日目の前の男と会話をした記憶は架谷には有る。それが？会話？と呼べるものかは一先ず置いておくとして。

「その、お話を聞いていた事までは覚えているんですが、……………その内容が全く」

語尾をにごによと濁す。ハミルの浮かべる笑みの陰湿さが一瞬倍増したのだが、丁度僅かばかり視線を逸らしていた架谷はその瞬間を見逃してしまった。それを幸運と呼ぶか不運と呼ぶかは人それぞれだろう。……………大半は見なくてよかった、と胸を撫で下ろす笑みだろうが。

「それは――」

そこでハミルの言葉は途絶えた。腰を浮かしたと思った途端、彼の体が大きく横に傾ぐ。

直後、ばさあ、と布の塊が彼の座っていた場所に不時着した。

「ハミルさん、何やってるんですか!」

「何やってるんだ、峪梨君」

腕組みをして仁王立ちになった峪梨がハミルを見下ろしていた。どう見ても怒っていますよのポーズである。

「説明は私がするつて了承したでしょう。なのに何を勝手にしちやおうとしているんですか?」

昨日とは違い少し碎けた喋り方になっているのはそれだけ怒りを感じている為なのだろう。視線に刺々しいものが入り混じっている。

「とにかく! 私が引き受けたんです、邪魔しないで下さい」

「こっちの話聞く気は……………なさそうだね」

「聞いても意味はないでしょう」

次第に落ち着いてきたのか、その仕草からは十分な余熱が抜け始めている。恐らくはこれ以上からかっても面白味はないだろう、適当に見切りをつけてハミルは「それじゃ、お願いするよ」と話を置んだ。その意図がどうであれ、架谷にとっては救い以外の何物でもなかったが。

そのまま隣室（先ほどとはまた違う部屋に）のドアを潜った後、思い出したように峪梨は？それ？を切りだした。

「そういえば、桐原さんが彼女にセクハラを働いていました。一応お話ししておきますので」

何気なさを装った、確信犯として咎人を断罪者に投げ渡した。

「……………あの、話って」
「うん。……………ちよつと長くなるから、そこに座ろうか」

架谷に席を勧めて、彼女自身も向かい合うように座る。真っ直ぐに姿勢を正せば僅かに視線がすれ違うように意図的に設置されている椅子は、カウンセリングの時のように相手の緊張を解すよう配置されていた。

その事実を知った時、態々従業員しか使わない部屋まで気を回さなくとも、と呆れ半分で話を聞いていたのだが、人生とは何が起こるか分からないものだど峪梨は現在に至って感心した。とりあえず有難うございます、ハミルさん。数少ない感謝の気持ちを、胸の中だけで告げておく。

「ごめんね、うちの上司が」

「うつん、平気。………何とか、濃い、ね」

「濃いというか、真っ黒い感じではある」

「捕食者って感じだよな。うちの上司と似た雰囲気だった」

「あ、やっぱり？ 話聞いてて似てるなーって思ってたんだよねー」

「似て欲しくないところで似てるね」

「あはは、ほんとにね」

「……………」

「……………」

たいして続かなかったキャッチボールが途切れる。

無言の中、先ほどの光景を峪梨は思い出した。

ああ本当に余計な事を！ と峪梨は怒ったが、後の祭りである。そもそも予想外だった。ハミルは一度寝ると自分で起きるのは殺気や敵意、周囲に異変があった時ぐらいで、放っておけば丸一日程度優に寝入り込んでいる。それがたった10時間足らずで自分から起きてくるなど小惑星がピンポイントで事務所にぶつかるぐらいの、いやそれ以上の確率ではないだろうか。

しかし普段なら嬉しいであろう誤算は、今回に限っては最悪と言えた。いや、もしかしたらだからこそ起きたのかも、と勘繰る。だとしたら最悪だ。嫌がらせのためなら川を逆流させるぐらい平気でやりそうな辺り、十二分にあり得そうでもう本当に最悪である。

「かすみちゃん、話って？」

いきなり、真正面から架谷が切り込んできた。しかも的確に急所に迷いなく。

あまりに躊躇なく踏みこまれて二の足を踏んだ。こうも明け透け

に切られるとその気でも腰が引けてしまう。

しかし、そんなわけにはいかないのだ、と自分で自分を励ました。架谷は、他でもない当事者なのだから。

何から話すか。慎重に言葉を選んで、舌の上で丹念に転がして、言葉を紡ぎ出す。

「架谷さん、魔術 って知ってる？」

「ま、じゅっ？」

戸惑った様子が傍目にもよく分かった。当然だろう、と峪梨は思う。そんなもの、空想上のお話でしかない？ ハズ？ だ。…………… 少なくとも、数ヶ月前の自分にとっては。

「うん、魔術。ほら、小説とかゲームとかで出てくるでしょ？」

魔都 関連での噂でもよく聞く、何もないところから火を熾したり風を吹かせたり。あの魔術。…………… ハミルさんはね、その魔術が使えるの」

「…………… 嘘、じゃないの？」

「まあ、論より証拠というわけで」

そう言ってから手をかざす。方向は斜め上。微妙に右寄りで架谷とは反対側に掌が付きだされる。そのままゆっくりと掌が天井を向いた。その上には、小さなビーズ玉が一つ。

それを確認させた後、小さく、しかしはっきりとした発音で言った。

「＜解放＞」

突如。音もなくビーズ玉が弾けた。

四散した欠片が方々に飛び散り、しかし球体状の見えない壁に阻まれるように10cmの飛距離で急停止した。それだけの事が、0.1秒の時間を置かずに繰り広げられる。

変化はそれだけに留まらなかった。欠片は先ほどの1/10程の時間を置かずにさらなる変化に及ぼした。

ぼう、ともごう、ともつかぬ音が生まれる。赤い光が生まれて渦巻いたと思えば、すぐさま青へ、そして白へと色が変わっていく。真白い光に埋め尽くされた球体の内部に渦は見えない。そのまま、白が薄れて透明色へと変化していった。

光が収まった時、球体があった場所には無数の水球が浮かんでいた。拳大のものを中心に、爪先ほどの水球が浮かび、滑るように大きな水球を中心として回っていた。

「これが魔術」

「……………ほん、もの……………？」

架谷が茫然と呟いた。重力下で完全な球状を保ったまま液体が浮遊するなど、どう考えても不可能である。いや私が知らないだけであるのかもしれないけど。心の中で呟いて逃げ道を作ってしまうが、少なくとも峪梨が知る限り、そのような技術は聞いた事もなかった。以前女子大学生らしくない会話にてその事実を共有した時の知識は健在だったらしい。何らかのトリックではない、という点においては信じてもらえたようである。

「これはハミルさんに？借りた？だけで、私自身が魔術を行使——使った訳じゃあないんだけど……………。こういう、特殊な物理現象を引き起こすものから、何かを召喚して使役したり、人の内面^{せいしん}に影響するものまで様々なだって」

伝聞の態で説明をしていく間にも、水球は形を変えていった。兎

や犬、電車、自動車、鳥、木。峪梨が意識するまでもなくコロコロとその形を変えていく。

「……………どうして魔術の事なんて説明するの？」

「——さつき、人の精神に影響する魔術もあるっていったよね？」
「……………？」

それが、どうしたのだろう。そう言いたそうな表情へと変化する。

「……………架谷さんの上司って酷い人だね。話聞く限りでもそうだし。前から言ってたよね、辞めてしまいたいって。……………この機会に、バイト辞めちゃったら？」

「いや、確かに酷い人だけど……………」

「ねえ架谷さん。どうして一度もさ。バイト辞めようとしなかったの」

ぐ、と喉が詰まった、そんな顔をした。ただ実入りが良かったから、何となく。そう続ければいい。しかし、架谷はその？言い訳？を続ける事はなかった。

「架谷さんって結構淡泊っていうか、冷静だね。だから危ない事にはあんまり首突っ込まないし、他人の面倒事に近づくことだって稀だし。だから、ずっと不思議だったんだ。架谷さんが、借金の為だとしてもあんな危ないバイトし続けてるのが」

恐らくはぐうの音も出ない程、峪梨の語る事はそのまま架谷自身の描く己の人物像に当て嵌まる筈である。事実、彼女は何も言わない。確かに最近では貧困な生活に金品への執着は以前より遥かに強い。それでも？以前と比べて？であって、身の危険を顧みず、というレベルではない。

だが、それを鑑みても、がっちりと首輪を着けられた架谷には橘から逃れる術などないのだ。辞めれば借金まみれの日々にあつという間に倒れ伏すに違いない、そんな確信が架谷の中に根付いていた。

——そう彼は語っていた。

「本当に？ 本当に逃げられないって思ってた？」

「…………いや、だって、借金が」

「その借金ってあとどれくらい？ 半年かけてもまだ全然目処が立たないぐらいなの？」

それは。そこまで口の形を作って、架谷は青褪めた。何に青褪めたのか、借金に関する事、そこまでは分かってもそれ以上は推し量ることはできない。

しばらくの沈黙。架谷は何を言うでもなく、何も反駁しない。その視線は峪梨に向いてはいたが、全く焦点が合っていないのがよく分かった。

殊更に優しく、峪梨は語りかけた。

「ねえ、架谷さん。——どうして、辞めようって、実行した事なの？」

半年前。僅か半月で憔悴していく友人をあつという間にすくい上げた彼女の上司対し、峪梨は本当に感謝していた。あの時の自分には何も出来なかった。その事実は負い目の様に今も棘として刺さり続けている。

——しかし、だからこそ。これは。

真正面にある友人の顔は、青を通り越して白い。

「…………あんな危なそうな人と、どうして離れようってしなかった

の？」

ずっと思っていた疑問を投げかける。いくら命の恩人でも、何度も危機的状況に追い込んでくるなら逃げたいと思うのは正常な本能だろう。

確かに何度も辞めたいという愚痴を聞いてはいたが、所詮愚痴は愚痴、それらにはいつも真剣味が全く含まれていなかった。たまに「じゃあ実行してみれば？」と発破をかけてみても、冗談だからと曖昧な笑みで躲されるのが常であった。

ずっと疑問だった。自分というものを弁える友人は、決して無茶をする性格ではない。そして、他人に入れ込む性格でもない。今まで何度かいた恋人に対する辛辣且つ冷淡なあしらいを知る身としては、どこか歪さを感じてしまう。

それでも、踏み込むことはなかった。踏み込む必要性を感じなかった。踏み込むための理由がなかった。

だからと言って、心配しないという訳ではない。むしろ心配しっぱなしだった。

自分の置かれている状況に似ている——その事実が、酷く恐ろしいものであるように思えて仕方がなかった。目を逸らし続けたソコを改めて直視した時、背骨に凍み渡る悪寒が身を震わせた。

自分の立ち位置と友人の立ち位置は全く違う。

だと言うのに『似た状況』に置かれている。その現状がどれほど歪に歪んでいるか考えた時、思考を放棄したくて仕方がなかった。

ペンギン

キウイ

鳥が海を飛ぶ為に空を飛ぶ事を止め、鳥が大地を走るために羽を切り捨てるように。全く違う環境に適する為に切り捨てるモノは一体何なのか、峪梨には想像もつかない。捨てるべきを捨てられず此処にいる峪梨と違い、架谷は此処にいるべきではないのに此処にい

る。

その事に何の違和も持たず、当たり前のように空と海とを飛び回り、歩けさえもしない大地をうろつくと徘徊している姿は、滑稽を通り過ぎて不可思議だった。だって空を飛ぶ鳥は海中では息が出来ない。大地を走れない鳥はあつという間に捕食される。誰もが知っている事を知らないかのように振る舞うさまは、どう考えても可笑しかった。

それでも峪梨はその可笑しさから目を背けていた。気の所為だと思っていた。日常から非日常を覗いた人間特有の感覚だと、軽視していた。

その可笑しさの根底を、昨日ハミルに告げられるまでは。

「でも、あの人は恩人で。借金もあつたし、給料が良かったから。利子も、働いている間は、ないって」

白い顔のまま、それでも理由を挙げていく。それは言い訳と言うよりは、一つ一つを確認していく為の独り言のようだった。

普通なら、と峪梨は夢想した。普通なら、この程度では到底揺らがないだろう。人の脳は都合よく継ぎ接ぎをして現状を受け止めさせる。高々こんな問い詰め程度で揺らいでしまうほど、人は脆いものではない。

「……………」

「……………」

何度目かの沈黙が下りる。架谷が現状に対してパニックを起こしていない事が、冷静さを失っていない事が峪梨には理解できた。それ以上、何を思っているかは考えないようにした。考えてしまえば、

何を言えばいいか分からず泥沼に嵌ってしまいそんな気がしたからだ。

「さつき、人の精神に影響する魔術があるって、いったよね？」

「うん」

「それは、今、関係ある事？」

「……………うん」

峪梨は知る由もない事だが、先ほどハミルと会話をした際、昨日の会話を忘れてしまった、と告げていた。正確には思い出せない。先ほどの会話、そして渦巻き助長し続ける感情が不安を煽り、ハミルの言葉を思い出させていた。

—— 他人に深入りしない性質だそうだね。

—— 冷静で冷徹で淡泊だ。

—— 何故だろうな。

—— ある人物が関わる時、その関係性が揺らぐ瞬間、君は激昂する？

「私は……………—— 橘さんに、精神を縛る魔術でも掛けられていたの？」

そして先日、赴夜との会話を思い出す。

—— 橘の事をどう思っているのかなあと。

—— 単刀直入に言うと、好き？

知っていたのだ、穿ち過ぎだと分かっているにもそう思わずにはいられなかった。

「うん。事務所でバイトをさせ続けるために関心が向くように、辞めないさせないためにしてた、って。催眠術みたいなものだって」

本来催眠術とは『したくない事』をさせるためのものではない。例えば『×××を殺せ』と掛けたとしても、人殺しを拒む心がその暗示を拒絶し失敗するそうだ。

心理学を学んでいた架谷から催眠術に関する事をいくつか聞いていた峪梨は、催眠術を掛けられていた、という説明は不可能だと判断した。もし魔術を無効化した時、架谷が本気で拒んでいたのならこの説明では丸め込む事が難しいと判断したためだ。あまり上手くない嘘について藪蛇に、というのを避けたかったというのもある。

「かすみちゃん、ちょっとお願いがあるんだけど」

「？」

「少し、一人で落ち着きたいんだ。……………ごめんね」

そして、架谷はそこに至ってようやく峪梨から顔を背けた。

「ああ、それじゃあ一度切るぞ」

「は、ハミルさん、なんじゃえらく機嫌がいいようで……」

「そ、そうですね。一体どんな話をしてたんですか？ その、は、鼻歌まで歌っていらっしやって……」

びくびくと怯え媚びへつらう下僕2匹を蔑むように横目で見やつた。それだけでびくうつ！ と過剰反応する部下を尻目に、手の中の携帯電話を弄ぶ。

「お前らには関係ない事だ。——あつちはどうだ？」

「今あつちで嬢ちゃんに説明しとるとこじゃなあ。何じゃ、えろつ黙る回数が多いが」

「峪梨さんとしても不用意に事を進めたくないだろう。彼女には珍しく、大事な友人の様だからな」

どれだけかは知らんがね、とリーガンは肩をすくめた。彼女の薄情さは職場の人間なら知るところである。一度敵に出会った時どうするのかと聞いた時、堂々と「安心してください。——貴方を敵の真正面に突き飛ばしてでも（私だけ）逃げますから」と言い切った女である。悪魔か！ と罵ったのは記憶に新しい。母性を滲ませ優しく触れながら言う言葉か、妙齡の女が。

「そうか。彼女が出てきたら教えろ。寝る」

「……………らじゃー」

「了解しました」

暴君め、と心の中で罵る。直後に脳天に突き刺さる一撃を浴びせられたのは、お約束という奴なのだろう。

心からいらんわ！ という絶叫は、彼らの脳内だけでしか響く事はなかった。

ドアを閉めて数歩歩くと、見計らったように（実際、見計らったんだろうな）携帯が鳴りだした。

「……………もしもし、俺だ。ああ、今説明しているところだ。……………不安か？ ……………ふん。喰えん女だ。まあいい。こちらの条件は分かっているな？ ……………そうだ。ふん」

口が歪に歪む。口端を裂けんばかりに吊り上げて、ハミルは嗤った。

「本当に相変わらずだな、お前は。……………ああ、お前の目論見はどうでもいいが、俺は好きにさせてもらう。……………それじゃあな」

携帯をそのままアンダースローでベッドへと放り投げる。そのままその場で立ち尽くした。

……………くっく、喉の奥で笑う。

全く目的は見えないが、態々あちらと関わってまで舞台に乗り上げる気か、アレは。この状況で関わってくるとなると、恐らくは逆鱗に関する事だろうと当たりをつける。しかしそれさえも無意味なのが、ハミルが？アレ？と称する人物だった。

終わったものを掘り返してまでやってくるモノに、嘲笑する。

——いや、終わっていないのか。アレの中では。

恐らくこの演劇は喜劇であり悲劇でもあり、そのどちらにも辿りつけない中途半端で面白味もない、実に下らないものへと成り下がるだろう。

それさえ惜しみながらも踏み潰す人物を思い描き。ああ本当に最悪だなお前は。

そうしてもう一度嗤ってやった。

十四話：開幕前夜

その時、庵夜はひたすらに後悔していた。

普段、橘にちよつかいを出してはどつきまわされながらも不屈の精神で楽しんでたのだが、その精神の根幹を折られそうな危機に直面していた（しかし後日、その不屈の精神は彼の主の「あれ、庵夜ってMだったけ？」の一言により押し折られる事となる）。

「ええ、それですね……………」

「そうですか、それでは……………」

（ほんとと空氣ギスギスだなあおいっ！）

お前接客能力ゼロだったんじゃないのか、坊。

あり得ない光景に、庵夜は背筋がぞぞぞつ、と虫が這いずりまわるような悪寒に震えた。幼少から彼を知る身としては、例え上辺だけでも異常すぎるほどの異常事態である。

傍目から見れば穏やかな商談の途中にしか見えないだろう。にこにこににこにこと橘と依頼人の男が笑いながら話している。……………だと言つのに、なんだこの殺伐とした空氣、思わずげんなりとする。まるで鎧迫り合いをしているような緊迫感が、和やかな風景の皮一枚下で繰り広げられていた。

隙を見せれば切り捨てる氣満々のこの空氣、商談と言つのはこうも居心地の悪いものだったろうか。

「それにしても、少々聞いていた印象とは違いますね」

にここにここに。もうここまで来ると胡散クセエよ、金髪碧眼の男に対して庵夜は毒づいた。

そこでハツと身構える。普段ならここで、橋が見透かしたように擦じり込むような蹴りが足の甲を踏み貫きにくる……… 筈なのだが。

(……………ん?)

随分と警戒しているのだな、と目を側める。これは罅迫り合いと言つよりは、喉笛を噛み切る間合いと隙を量り窺い合っている状態か。気を抜いたら斬られるというより、僅かな綻びでさえ噛み殺す気満々のようである。随分と積極的な害意だなあ、と庵夜は橋の成長を噛み締めた。

「ほう、どのようなお話を聞いていたんですか？」

「いえ、ここはどんな依頼も100%解決してくれる場所だと聞いたものでして。最初にあのような前置きをされるとは思ってもいませんでした」

確かに、と庵夜は思った。あのように『依頼受けなくとも文句言うなよ』と予防線を張っておくのは珍しい。むしろ此处に来る依頼は大半が橋の好みである筈だ。実際、今回の依頼も彼好みだと思えた。

それに無反応だとは……………。

(……………ん?)

ひくり、庵夜の？嗅覚？が懐かしい匂いを嗅ぎあてた。しかし、『懐かしい』という表現に引っ掛かりを覚える。この種類の匂いに対して懐かしいなどと思うなど、と首をひねる。この類の匂いなら

ば、懐古の念を抱くより先にいつどこで嗅いだのかを思い出す筈だ。しかし、風化した写真を眺めるかの如く、記憶の焦点がとんと合わない。それどころか心当たりすらない。

そんな庵夜をほっぽり出し、状況はつつがなく進行していった。

「それでは、一応の目途として一週間の期間を設けさせていただいても良いでしょうか？」

「分かりました。それではお願いします」

「ええ」

にこにこにこにこ。にこやかに商談は終始した。気味が悪いのも首尾一貫していると晴れ晴れしい気持ちに――

「いやならねえよ」

「あ？」

「いえナンデモアリマセン」

依頼人が帰った途端にコレである。

偽りでも良い。頼むからもう少し俺に愛をくれ。

直後、足元に猛烈な蹴りが襲い、バランスが崩れた直後脳天に鮮やかな踵落としが決まった。容赦無い一撃に涙とともに崩れ落ちる。

「下らねえ事言ってんじゃねえ。確りと付けたんだろうな」

「間違いねえよ。悪魔使いでも現代の奴らはヘボばかりだからな。エクソシストでも見れねえ奴も少なくねえぐらいだ」

「そのヘボにしてやられたのはどのどいつだ………？」

「ぎゃー、ぐりぐりすんな！ 知っての通りだが俺にSMの趣味はねえぞっ！？」

痛くないけど痛てえ、などと事情の知らぬ方々には訳のわからない愚痴を零した。

本当に如何して妙なところだけはよく似ているんだと呆れ半分感心半分で思う。これは血せいなのだろうか——とまで思つて沈んだ。嫌だ、この凶悪性が遺伝など、本当に嫌過ぎる！ と四つん這いになつて絶望する。

「何時までそうしてる気だ。働け」

「いやだつて、坊本当に母親似だよなつて思つたら誰だつて絶望するだらげふおつ！」

踵落としが同じ個所にピンポイントで落ちた。

「手前と漫才やつてる気はねえんよ、さつさとしろ！」

「あ、そういう風に見えるんだやつ p——ごめんなさい、だから踵落としは止めろつて!？」

数分後、唸り声を上げながら蹲る非常に情けない姿の庵夜と、事務所奥で支度を済ませた橘の姿があつた。

何度も蹴りが穿つた個所が異様に熱を持ち、何やら煙でも出ているのではないかと心配になる。一度全身放火の末に毛刈り祭りに放り込まれるという憂き目に会つて以来、身体に熱が籠るのに対して傷心が疼くようになってしまった故だ。

記憶の洞に閉じ込めてあつた人影を捉えてしまい、呪いを吐きだした。

（くそつ、あの3バカトリオめ——）

「あ、思い出した」

「……………何をだ？」

「いやあ、あの依頼人に知ってる匂いが着いてたんだが……昔、蒼葩が会ってた奴の匂いだったんだ」

道理で懐かしいわけだ、と一人納得する。懐かしさを感じる要素がアレらにあるのかは謎だが。

しみじみと20年だか30年だか前を思い返す。

「自重って素晴らしい言葉だよなあ……」

「……………」

何も言わず、橘は庵夜から視線を外した。

どことなく後ろめたく思えたのは、恐らくきつと多分気のせいなのだろう。

「一応聞くが、本人ではないんだな？」

「それだけは無いな。本人だったら今頃、ここら一帯が血の海だぞ？ ほら、昔見ただろ。蒼葩が珍しく写真ネガごと持ち帰った時があったじゃねえか。それに映ってた一人だよ。今も生きてるんなら——もう40半ばじゃねえのか？」

「人間だったのか」

——人間以外じゃなかったのか。

いや、確かに蒼葩相手に友人などという関係を築ける時点で人間離れしているか、よほどの不運、はたまた奇運凶運と言わざるを得ないが。決してフォーローではない（そしてフォーローのつもりは毛先ほどない）台詞を胸中で呟いた庵夜も相当に酷い。

相手を慮ったのか言い換えたのであろうその言葉に、一拍置いて庵夜は答えた。

「いや、奴だけは人の枠からズレてたが、それ以外は普通の人間だったな。他の奴も唯の人間だったし」

庵夜の言う『唯の』の基準が一般常識と大幅にかけ離れている事には触れず、橘はしばし思案した。

「……………おい、レナから連絡は来たか？」

「ん？ さっき来たが」

「それを先に言え！」

があんっ！ 鐘でも衝いたかのような良い音が事務所に木霊した。血溜まりの音は、しなかった。

■ ■ ■ ■

くう、控え目ながらも情けない音が鳴った。どれほどの苦悩を抱えていても、生きている限り生理現象には逆らえない。逆説的に、今自分は生きているのだと——ここは現実なのだと実感させられた。

もふりとクッションに顔を埋める。同室にあったソファーに膝を立てて座り込み、クッションを抱え込んだ体勢のまま、架谷はじつとしていた。

——橘をどう思ってるのかなあと。

赴夜の問いかけが、実体のない声が過去から聞こえてくる。恐らくは、あの時点——いや、もつとずっと前に気付いていたのだらう。

橘が、架谷に、何をしたのか、何をしているのかを。

初めて会った日の事を思い出す。確かアルバイトを始めて日が浅い頃だった筈だ。いきなり現れた黒尽くめに、すわ何事かと慌てたものだった。次に現れた時は一週間後で、前とは違ってファッショナブルな印象になっており、名乗られるまで誰だか分らなかったが、橘の隙を狙うようにやってきたのは最初だけで、その後は猫のようにするりと立ち去る橘とは見事に入れ違いの日々だった。

五度目、もしくは六度目の時だっただろうか。「今日もかあ……」と肩を落とす様を見て、橘の言い付けを破って声をかけた事が交友の始まりだったと思う。その時赴夜が一瞬見せた、酷く狼狽した顔が印象的だった。

数日後、どこから聞き及んだのか、所長にたつぷりじつくりとお咎めを受けた。ひどいドSという心の叫びは、口に出していないのに何故かモロバレだった。

その翌日にやってきた赴夜に「大変だったなあ」という慰めをもたらした時には……もう、なんというか、コメントしようがなかった。

始終人を喰ったような物言いをし、感情の読めぬ振る舞いばかりをしていたように記憶している。

不快、とはまた違った。

人物像が掴みにくく奇奇怪怪な人ではあったが、最初に見た、深

く関われば深い場所へと引き摺り込まれるような、遠ざけておきたいと思わせる？何か？を、それ以来見ていないからかもしれない。

「なんで、あんな事わざわざ聞いたのかな」

—— 単刀直入に言うと、好き？

あの時の赴夜は誠実な眼差しだったと断言できる。だからこそ、後の台詞に腹立たしくも思っただが。

あの時言っただけに嘘はない。その気持ちも、偽りないものだ。

—— 人の精神に影響する魔術

—— 辞めさせないためにした

昨日までなら断言できた言葉は、決して喉を通る事を許さない。背を丸め、クッションを抱き潰すように胸に押しつけた。

「……………」

軽いノック音が聞こえた。しかしそれだけで、人の声が全くしない。

誰だろうか、首を傾げた。少なくとも峪梨ならば声ぐらいは掛けるだろう。そしてそのまま何の了承もなく入ってくるだろう。

「どちら様ですか？」

「…………… ハミルだが。開けてもいいか？」

「あ、ちよつと待ってください！」

クッションを投げて軽く身だしなみをチェック、失礼がない状態だと確認を終え、素早くドアを開けた。確かに恐い人だが、しかし

この事務所の所長、つまりこの部屋の主。失態を犯せばどうなるか分かったものではない。……………ここら辺の思考回路は完全に橘に毒されていた。本人は全く気付いていないが。

「あの、何かご用でしょうか？」

「まあね。ちよつとあっちの部屋に来てくれる？　いきなり密室で二人つきりというのも嫌だろう？」

その話し方はどことなく橘を連想させた。相手に選択肢を与えているようで、その実都合の良いように絞ってくる辺りなどが。

「まあ、あっちの部屋に行っても女性は君一人だから、君としてはあまり変わらないかもしれんがな」

氣遣う台詞に意外に思う。そこで二人きり寄りはましろだろうか、と前向きな台詞で無いところは何となしに納得できるものだったが。ふとハミルの台詞に引つ掛かりを覚え、架谷は首を傾げた。

「あれ、かすみちゃんは……………」

「峪梨くんは今所用だ」

所用。と言う事は、彼女は今ここにはいないのだろうか。いないのだろう。でなければ『女性は君一人』などとは言わない筈だ。

……………何故だろう、架谷は背筋に汗が一筋伝ったのを感じた。部屋は暑くなく、むしろ冷房が効き過ぎている程だと言うのに。

「あの、具体的に、私に一体何のご用でしょうか」

「君に会ってほしい人がいてね」

ハミルの目は軽く伏せられ、その目には感情が窺えない。

だが何故か、最初に見た鉄面皮であるにも関わらず、架谷はハミルが笑っているのだと確信できた。脳裏に焼きついた、あの陰湿な笑みと重なる^{ダブ}。

「……………どうして私が？」

「それは、会ってからののお楽しみといこう」

からかうような笑みを含んだ台詞に、さり気なく差し出された手に、無意識に怯える。

この人物と橘はよく似ているというのが架谷の第一印象だった。それは今なお変わっておらず、むしろますます強くなるばかりであった。

しかしと思う。私はこんな風に所長に怯えるのだろうか。

こちらが幾ら愚痴を言おうが嫌がろうが、結局は綺麗に転がしてくれる橘の掌と同じだと。それでもどこか安心していられる橘の掌と同じだと思っている筈なのに、架谷は無意識に怯えた。

何が違うのだろう。無意識の問いが遠くから胸の裏に触れる。しかしそれは意識の舞台に上る前に、乳白色の濃霧の幕越しのように輪郭がつかめないまま遠ざけられた。怯えに背を押されるように、ハミルの手を取る。

——橘さん。

「安心するといい。すぐに会える」

ハミルはそう言って、鉄面皮を笑みに変えて見せた。その笑みを見た瞬間。架谷の何かが決定的に凍りつく。しかし、逃げる事も拒絶する事も、離れる事も出来なかった。そ

れは抵抗する意思を奪われたからではない。

純粹に、タイミングの問題だった。

「おや、このお嬢さんが、ですか？」

聞き覚えのない声に、ふ、と視線を彷徨わせた。

最初に目についたのは青色。その次に黒。視線を僅かばかり上へと移動させれば、欧州辺りの血が入っていきそうな彫の深い男性の顔があった。焦点が一瞬崩れ、そこに立っているのが牧師風の大男だ。とようやく認識した。

「初めまして。私の名は——と申します」

聞き慣れない単語に、一瞬間聞き返しそうになった。しかし何と聞き返すべきか。流石に聞き取れなかったのもう一度、などと素直に言うには失礼すぎる。他は完璧であったため、唯一日本語とアクセントが異なる名前の部分がより浮き彫りになってしまったのもまた聞き取りづらくなった原因だろう。が、当然そこに文句を付けるわけにもいかなかった。

「少々発音し辛いでしょう？ ジャパニーズの知り合いからはよくブソッティ、もしくはリカルドと呼ばれています。もうそちらの方が聞き慣れ過ぎてしまってますね。私の事はどうかそのようにお呼びください」

「はあ……………」

柔らかに微笑んだ大男、リカルドを不躰にならない程度に眺めてみる。恰好もそうだが、胸から下げられたクルスも本場仕立てか（という表現は可笑しい、かな？）、アクセサリーとは一風違った趣がある。少なくとも洒落っ気で付けているようには到底見えない。

長身ではあるが、頬がこけ、身体つきも痩せているように見えた。表情も始終穏やかで、ハミルと会話した後では月とスッポン並みの格差を感じる。危険人物、という看板を持たない男性が希少価値並みの存在に思えてきた程で、これだけで架谷の摩耗具合も良く分かる。

しかし、何となく。架谷は、あまりこの牧師に近づきたくないようにも思えた。

「ブソッティさん。私に一体どのような御用が御有りなんでしょう？」

「いえ、話は単純です。私自ら出向けたのなら十分だったのでしようが、そもいかなくなりましてね」

リカルドはにつこりと、聖職者然とした穏やかな微笑みを浮かべたまま、言った。

「なので、ここは一つ。貴女に餌になって頂こうと思ひましてね」

閑話：とある仲介業者の証言

ああ？ 橘について？ 何でも屋に依頼か？ だったらまずは紹介料を——え、違う？

……アンタ一体、あの何でも屋に一体どんな恨みがあるんだ？ 悪い事は言わんが、止めといた方が身の為だぜ？

……は？ それも違う？ ますます訳わかんねえなあ、おい。ああ、そうだよ。あの男に用があるって言う奴は大抵二種類だ。一方は依頼。もう一方は襲撃者。

まあ、過去に何をしたのは知らねえが、こつも極端だとちよつと付き合い考えちまうよなあ。愛想なんぞ欠片もねえし。

……確かにおべつか使われるよりは良いだろうがよ。あの野郎がおべつかって……——うつ、想像したら寒気が。……そうだな。想像すら付かないよな、あの万年不機嫌な傲慢野郎がそんな真似。

で？ あの何でも屋の何が聞きたいんだ？ ……なんで何でも屋って呼ぶのか？ 確かにあの野郎はそんな屋号も掲げてねえし名乗ってもいねえが、節操無く依頼受けてるからな。あいつの噂を聞いたんなら知ってるだろ？ 『浮気から人探し、果ては悪霊関連まで承ります』つつう謳い文句——知らない？ マジで？

俺に何でも屋の事聞いてくる奴らは大抵その話を聞いてから来るんだがな。珍しいな、アンタ。どっからあいつの話を聞いたんだ？ ……は？ 企業秘密？

なんだそりゃ。ふざけてんのか……。……て、ちよつと待て

！ アンタその話どつから……—っ！？ ぎゃああ！ 止める、仕舞えそれ！ ……ぐう。分かった、話せばいいんだろ、話せば！？

……、どうやって撮ったんだよその写真。ネガ付きとか可笑しいだろ。何でデジカメじゃねえんだよ。……アンタホント良い根性してんな！ その方が物的証拠に取り扱われるからとか、そういう理由でわざわざとか——ギャ——っ！ スミマセンスミマセン！ だからそれ仕舞ってエ——っ！

……ぜえ、ぜえ……た、橋についてですよね。悪いんですが、正直俺、あんまり何でも屋については知らないんですが……。

……日常生活とか印象について？ まあ、それなら……。

あの。前置きしときますけど、俺を面倒事に巻き込まないで下さいよ？ しがない仲介家業なんですから。本当に。

……今更それですか。別に心配してませんよ。そもそもそんな間柄じゃないんですから、ただ仕事柄付き合いがあるっていうだけで。

第一印象は、目付きの悪いヤバそうな奴、ってところですかね。俺が知り合ったのは3年前で、その頃何でも屋が事務所を構えた時でした。前から噂は聞いていたんですが——悪魔とか、魔王とか、非道が人の形をして歩いてるとか——まあ、碌な噂じゃなかったですね。話半分で聞いてたんですが、……ああ、事実は小説

より奇なりって本当だなんて実感しましたね、俺。

それでも依頼達成率100%——それもたった一人でこなすなんて聞いてたもんですから、知り合う切っ掛けを掴んだ時は、ああやったな、とか思ってたんですよ。甘い事に。

で、実際に試してみたら——もう地獄絵図に投げ込まれた気分でしたよ。

当時のあいつは常にピリピリしていて、もう寄らば斬る！という空気を纏って、手負いの猛獣の方がまだマシだって言えるような状態でした。もうその時点で泣きそうに……、いえ何でも無いです。

まあ、その第一印象が正しいものだったって分かったのは出会った1分後でしたね。いきなり殴りかかられたと思ったら、拳一閃でぶっ飛ばしてましたから。……あいつが殴りかかられたんですよ。いや、よく殺人にならなかったなと今でも感心してる出来事だな、アレは。

……はい。話を戻します。

あいつに頼まれた仕事っていうのが、まあ周知の通り『厄介な依頼を持つてくる』っていうものだったんですよ。労力とかじゃなく、純粋に解決の目処ものがつかないとか、難事件とか、曰くつきとか。

緊急性の高い依頼は弾かれたが、それ以外は大概OKでしたねえ。ああ、でも偶に気紛れみたいに受けた時もあったな……。

明らかに胡散クセえのもあったが、本人は気にした素振りも見せずズバズバ切り捨てるみてえに解決していったな。……後日、色々噂になったのもあったがそれは割愛させてくれ。俺は何も関わって無い。

しばらくして距離感とか掴めて来て大体2年たったぐらいか。

……いや、長いとか言わないで下さいよ。

え？ 敬語使わないなら使わなくていい？ んじゃあお言葉に甘

えて——んで、続きなんだがな。

まあさつきも話した通り、何でも屋は手負いの猛獣以上に厄介でな、何時でもどこでも不機嫌で、依頼主と顔合わせする時ぐらいしか鳴りを潜めなかったんだ。それも2年たつて大分落ち着いてきて——まあ、なんとか馴染む事が出来た訳だ。

それから時々様子を見に行ってみたんだが……アイツの？日常生活？とやらは、俺にもよく分からん。

何と言うか、生活臭というか、人間臭さというか……そういう類のもんが嗅ぎ取れ無いんだよ。

時々あの野郎実ははアンドロイドじゃねえかって思っただよな。

べらぼうに強いし、アホみてえに頑丈だし。銃にこめかみゼロ距離で打ち抜かれて切り傷って可笑しいだろ？ 蹴り一発で車大破とか、亜人素手でぶちのめすとか人間業じゃねえだろ、普通に考えて。

対空ミサイル撃ち込まれても死なねえ気がするわ、アイツ。

………？ ……これで話は仕舞いかって？ ああ、そうだな、俺が言えるのはこれくらいか。

——ああ。

そつえば、あいつが特に不機嫌になる時があったな。大体半年に一回か、多い時は月一。

一度、その原因らしき時に居合わせたんだが……——いや、逃げたよ。速攻で逃げたに決まってるだろ。中見た瞬間ドア閉めて回れ右して全力疾走したって。むぎむぎ死に行くような真似するか。

原因？　なんか尋ねてきた奴がいたらしいな。なんか、誰かの代わり、みたいな感じだったか。

何で知ってるかって？　廊下に響くぐらいの大声で怒鳴り合ってたからな、嫌でも聞こえたんだよ。不用心だねえ、全く。らしくねえと思ったから印象に残ってるよ。

それに、一度怒鳴ってた嬢ちゃんと口をきいた事もあったしな。

いや、ホント綺麗な嬢ちゃんだったな。仕草が色っぽいつつか、アダっぽいつつか。まあアンタほどの美人じゃあなかったな。……

……はあ、つれないなあアンタも。

……そうだよ、確かに振られたさ。その上彼氏とか言う男に殴られて——ああもう、踏んだり蹴ったりだったぜ！

ホント良い女だったなア。名が体を表すって感じで。……聞きたいのか？　だったら別料金……ぐ、分かったよ、だから仕舞え！　はあ……。名前は確か——

赴夜　揚羽とかいったけな。

十五話：開幕前夜前夜

矢岸にとって、それは至上の命題であり、そして何を置いても成し遂げるべき目的だった。

苦節9年、左目を消失して以来、彼は只管に牙を研ぎ、根を張り巡らし、情報と言う情報をかき集め、そして力を蓄え続けた。その結果が叶え屋商会派出所副所長という立場である。

4年前にこの立場を得た矢岸は今まで以上に力を蓄え、情報収集の為の手を広げた。より広く、より深く。様々な呪いに関する知識を吸収し、噂を分別し、真実を引き摺り出す。そのためには一切手段を選ぶことはない。

当然彼への反発は並ではなかった。高が二十歳前後の外見をした、ただの人間の若造に我が物顔で振る舞われては良い気はしないだろう。

この業界に足を踏み入れて1年もしない頃には媚び諂い他者にとりつく術を覚えていたが、所詮は付け焼刃。真の實力者には易々と見抜かれ、その傲慢さと能力故に付け焼刃が切れ味の鋭い刀となった今でも他方から警戒の対象とされ続けた。

今もそれは変わらず、そして警戒対象と認識された相手は今もお矢岸に反感を持ち続ける。振るっても意味を果たさぬ刀を振るい続ける事は無意味と切り捨てられ、自然、矢岸がその刃を内部に向かって使う事は無くなった。

いや、恐らくそれだけではないのだろう。矢岸はかなり早い段階で自分の推測が現実であると決定づけていた。

少なくとも矢岸は馬鹿ではなかった。自分の力量を量り間違えるような馬鹿では、決して。だからこそなおなお厄介ではあるのだが、

しかし目的を何よりも重視している矢岸が、その目的と被さる事がない限り障害らしい障害として立ちふさがる事は在り得ないのだ。だと言うのに、彼を利用してのし上がろうとする者は、未だかつていた事はない。

想像することは酷く容易い事だ。その想像の裏付けは予想と違わなかった事は、案外と簡単に把握できた。

しかしその確認に意味はない。元より知っていた事を再確認しただけにすぎない。

だから、これら一切の原因は確実に自分の背景が、自分が求めるものであることを矢岸は自覚していた。

——だからこそ、俺は此処にいるんだ。

矢岸は自分が出来る出来ない範囲をよく知っている。控えるべき時は控え、抑えるべきは抑える事を知っている。その感性が培われた理由と言うのが、彼の興味（或いは執着と言い換えてもいいのかもしれない）はただ一点に集約されていた為だと言うのだから、これは一体何の皮肉なのだろう。

何故なら、彼の渴望こそ彼が弾かれる理由だったから。

それは上層部にとって暗黙の事実。故に駒として扱われる事もなく、警戒の対象とされていた。

しかしそれは矢岸にとっても端から分かり切った事ではあった。分かり切ったうえで、彼は此处を選んだ。警戒され飼い殺しにされ、それでも矢岸はこの道以外を歩く気は毛頭なかった。

復讐の為と言ってもいい。だが、それだけだとも言えない。

彼が目的を果たす行為そのものが、彼にとっての復讐と言えるの

かもしれないのに。今の矢岸にはそれを？復讐？という単語一つで片付ける事がどうしても出来なかった。

早朝。貫徹した後に一時間仮眠をとった矢岸は、座り慣れたデスクチェアに座っていた。

「……………」

掠れる様な吐息とともに、全身を巡る倦怠感を馴染ませるように、皮張りのチェアに深々と身を沈める。

（チツ、あの糞共が）

脳裏に描かれるのは彼が糞狐、野生熊と呼ぶ人物だ。矢岸と同じくこの派出所3トップに収まる副所長もんだいじでもある。

ハンナ・ブースという少女に御退場していただいた後、矢岸が作り上げた檻の中で繰り広げられたのは、結果的には罵詈騒音と血潮飛び交う殴り合いだった。

表記すれば即R・25以上認定必須の血みどろな泥仕合は、一時間置いて一先ず終止符が打たれた。具体的に、初めに尾崎が「腹へった」「飽きた」と喚き出し、オシプの気が逸れたところですかさず矢岸が薙ぎ飛ばして気絶させ、気絶したオシプを蹴りまくって気を晴らした矢岸が仕事を再開する為結果を解いた——思い返すと中々酷い。特に尾崎。

一度蹴り飛ばしてすっきりしたものの、蹴り足りないというのが

正直なところだ。それに、矢岸が二人から受けた傷が一晩中熱を持つてずきずきと痛んだ事も腹立たしい。

あんな間抜けどもに、と思う反面やはり実戦向きとやり合うには実力不足が否めない。冷静に下した考察結果に舌を打つ。

正直、戦いに関して天性の才を持つ者と実戦特化型の戦闘馬鹿相手に渡り合ったデスクワーカーが言う台詞ではないのだが、矢岸の理想は高い。というか高すぎる。こういうところが傲慢なのだろう。これが身の丈以上なら愚かと一笑出来るのだが、そうでないところが恐ろしいところでもある。

さて、いらいらいらいと鬱陶しいほど不機嫌を振り撒いている矢岸が現在手にしているのは、数日前に部下から知らされた情報に加えた書類である。重複した情報を読み解いてばらし、関連するいくつかの情報を纏めた走り書きを綴じたものを清書した、要点を絞ったそれは矢岸にとって重要な（或いは、世界規模で肝要な）齟齬を見出させた。

その為に腹心であるパールに、とある依頼を利用してその齟齬を確認させに行かせたのだが――

（……………それがなんで、女子高生引つ張ってくる結果になったんだ）

件の間座網末席に連なる少女を思い出し、頭痛がした。

だが、同時に仕方がないと諦める。

間座網とは、日本発祥の血族の名だ。間は魔に通じ、また狭間を意味する。狭間に座す網――つまり、魔と魔ならざるモノの狭間で網となる、つまり周囲の魔を一身に引き受けるという役目いさめを持つ血族。その能力故に様々な怪異に巻き込まれるため、不遇の一族、

不運の権化、贅の血などと謳われている。

本来なら毒花の血という自衛を持つと聞くが、恐らくその血の薄さ故に自衛の為の機能を持たず、本当に不運な事に、どうやら怪異を呼ぶ血ちからだけが継承されてしまったらしい。

間座網の不運を呼ぶ血ちからは神力ほつりの域に入っているので、回避は困難を極め並みの術師では不可能に近い。いくら薄まっているとはいえ、そう易々と遠ざける事は難しいだろう。

従って、パールを責める事自体がお門違いという事なのだが、そうは言っていられないのが世の中である。少なくとも最初の対処は間違えている。それかなりマズイ方向で、だ。これが根を分けた遠い分家であつたからまだ救いはあつたが、これが本家に関わるものであつた場合、相当拙い事になっていただろう。

最悪、鏡波の介入も考えなければならなかつた程に。

(まあ、その可能性は今のところは無視できる、か………)

不幸中の幸いがあるのなら、正にそれだろう。あの少女を調べていた際に間座網の名を見た時、瞬時に心臓が掴まれたような寒気に襲われた。純粹に依頼の為ならともかく、私用で間座網とやり合うなど荷が重すぎるというものだ。

本家どころか分家との関わりさえ殆ど無い少女であると知った時、矢岸は心底安堵した。

——これ以上遅れを取るわけにはいかない。

がりつ、皮膚が引き攣る様に痛む。

爪を立てた左目の周りの皮膚が抉れて血が滲む。その痛みと引き攣れより、爪の間に異物があるという不快感が勝つてどうしようもなかつた。

ぎりぎり引き絞った糸は撓む事を知らずに限界まで伸び続けた。これ以上堪え続ければ、糸は切れて手近なモノに痛い痛みを与えるだろう。もしかすれば、血さえ流れるかもしれない。

——十分に俺は待った。

誰もいない室内で、岩戸を閉ざす音が響く。

矢岸が誰にも知られず作った？裏口？は、閉じた途端に継ぎ目さえ無く存在を消した。

■ ■ ■ ■

ハンナは悩んでいた。どうしよう、どうしたらいいのだろう。ぐるぐると思考が頭の中で廻っている。

が、その実下手の考え休むに似たりであり芳しい成果はない。それはそうだろう、なにせハンナは何に悩んでいるかさえはつきりと分かっていないのだから。

（なんなんだろう……）

目下、ハンナの最大の悩みの権化を見やった。

少女、である。それも異国情緒溢れる美少女だった。ふわふわとした淡い金色の髪に鼈甲のような瞳、真白い肌に映えるピンク色の頬が愛らしい、アイドルなど目ではない世界屈指と言われても頷く超絶美少女だった。

髪と同じく淡い色合いの服は街中のショーウィンドウでも見かけそうな代物である筈だが、少女が纏っていると天使様の衣装に見えるから不思議である。美少女補正恐るべし。

別に少女に捕まったという訳ではない。ハンナと少女の距離は目測で20メートル強、道路を挟んだ両端で、視線さえ交わっていない。

ではなぜか。その理由は実に簡単だった。

——あの子、人間じゃない、よね……………？

あんな美少女が街中を歩いていて視線の一つも寄越されていないという事実気付いた時、猛烈な違和感と覚えのある既視感を感じた。

集める筈のものが集まっていないという空白は、一度意識すると逸らすのが難しいほど意識しかいに入り込んでくる。そうなるともう駄目だ。好奇心が刺激され、むくむくと胸の内で広がってくるのを抑える事が出来ない。

その末に、少女を観察していたのだが——長年幻獣と戯れていた経験の賜物か、少女に違和感を覚えた。或いは、既視感を。

その既視感は幻獣たちから来るものかと思ったのだが、どうにも違う気がする。

……………まるで、かつて少女を見た事があるかのような。

結果疑念が尽きるどころかむしろ解決せずに湧いてきた訳なのだが。

全ての疑問は、あの少女は何者か——それに集約されるのだろう。

（誰なんだろう……でも、一度見たら忘れないような……それ以上にインパクトのある人が一緒だった？ いや、あの子以上にインパクトがあるって無理があるよ。じゃあ、）

僅かに首を傾げて、自問する。

——一体どこで見たんだろう。

それが気になって仕方がなく、少女を目で追いつけていた。否、実際に少女の進む方向へと足を向けており、少女とハンナを同時に認識した者がいれば確実にハンナは追跡者として怪しまれただろう。しかし、他人から見ればハンナは正面を見ずに歩いている奇妙な子供としか認識されていない。

もし、ハンナを追跡者と思う者がいるとすれば、それは、

「った、スミマセン！」

「大丈夫ですよ。失礼だけど、君、もしかしてハンナ・ブースちゃん？」

「——え？」

同じく、少女を認識できる者ぐらいなのだろう。

「ビックリしましたよ、まさかお兄ちゃんのガールフレンドにこんなところで会えるなんて！」

「ふふつ、私もびっくりだよ。あ、日本ではガールフレンドって女友達っていうより女の恋人っていう意味で使われるから注意した方がいいよ？」

「そうなんです、ありがとうございます、アゲハさん」

にこにこにこにこ、花と蝶が二人の周囲に飛び交っていた。

少女を追いかけている途中で高校からの兄の友達である女性と知り合うという奇縁に巡り合ったハンナは、ものの見事に少女を見失ってしまった。まあ元々気になっていた程度だし、と後ろ髪を引かれながらも切り替えた。今はそれより目の前の女性である。

純朴そうな外見に穏和な雰囲気を持つ女性にいきなり本名を言い当てられた時は驚いたが、彼女の名前を聞いた途端、その驚きはさらなる驚きに塗り替えられる事となった。

何度か、兄が愚痴の様に友人たちの話をしていた事がある。その中でよく出てきたのが、同級生の恋人たちの話だった。まるで鏡合わせにみせたちぐはぐな二人だよ、と良く分からない表現でその恋人同士を批評していたのが印象的だった（それに、当時兄の通っていた高校の隣の病院で医者として勤めていた姉も同意していたのでその通りだったのだろうけど）。

その恋人の片割れと、まさかこんなところで出会っ事となろうとは。

「それにしても、ホント良く分かりましたよね。私がお兄ちゃんの妹だって。あんまり似てないのに」

「何度か写真見せてもらったしね。最近会った時も、ケータイ見してもらったし。それに、鼻とか口元はよく似てるよ。輪郭はお姉さんそっくりだし」

成程、ハンナは深々と頷いた。そして後日兄を呼びだして撮られた記憶の無い写真ごと携帯を押し折ろうと心に決めた（兄の携帯は兄が愛してやまない幻獣や動物の写真で埋め尽くされている。ずばらな兄の事なので、パソコンに転送などと言う真似はしていないのだろう。色んな汁まみれで突つ伏す兄が目には浮かぶ）。

「そっいえば、何で前を見て歩いてなかったの？」

「、えっと」

一瞬詰まる。馬鹿正直に、ものすごい美少女がいたんですけど他の誰にも見えてないみたいで気になって追いかけてみました——アウト。色々危ない人の台詞だよ、と自分で突っ込みを入れる。

その合間に心配げな声で、ぶつかつたの私だったけど、もし酔っ払いや不良だったら危ないよ？ と投げかけられる純粋な言葉がハンナのささやかな胸に沁みる。昼までの暴君とのやり取りとは雲泥だった。

この人に嘘を、と思うだけでさらに言葉に詰まる。しかし、本当の事を言うのは不味すぎるだろう。

「……………あの、私最近こっちに來たので、ちょっと物珍しくて……」

なんとか理由を捻り出した。しかし、こんなつつかえつつかえで納得してくれるだろうか。ありふれた言い訳しか思い浮かばず、視

線が合わせられない。視線がさつきから下に向きっぱなし、どころか顔もアゲハの方を向けていない。

拙い。自分でも思うが拙すぎる。

ああ怪しさ満点だよ、と内心は悲鳴塗れだ。

—— ええうんばれますよねこれ絶対！

どうしよう！ とハンナがパニックに陥る直前、天の声が響いた。

「成程、たしかハンナちゃんはイギリスの方にずっといたんだっけ？」

「え、あ、はいっ」

—— よかった納得してくれたあああ！

実際、ありふれた理由であつた事と、しどろもどろな様子が恥ずかしげなものに見えた為詰まつたのが不自然に見えなかつたからでもあるのだが、天然ハンナに知る由は無い。

とにかく何とかなつた、という達成感に満たされるも、しばらくして少しの罪悪感を抱いてしまう。結果的に騙す形になってしまつたが、だからと言って事実を話すわけにはいかない。何せ見えない、感じない人には変人扱いされる事請負である。

いや、あの兄の友人だから——と思わない事もないが、万が一違つた場合、累は兄にまで及ぶ為、迂闊に話せない事ではない。もうすでに手遅れかもしれないが（具体的に、出会つて間もない頃辺りに）、とは考えないようにした。

やっぱり、女の子の事気になるけど聞くわけにはいかないもんね、あはははは……。割り切つていようとする割に、結構引きずつて

いた。

「とくに今日出歩く予定が無いなら、もう帰った方がいいよ？ わるーい人に捕まっちゃうかもしれないしね」

ほら、もうこんな時間。おどけた様に見せられた携帯の時刻に、
「ええっ！」とハンナの口から悲鳴が漏れた。全然自覚が無かった、もうこんな時間！？

「あわわ、スミマセン、今日は帰らせて頂きますっ」
「ううん、こっちこそ呼びとめてごめんね」

また会おうね、とにつこりスマイルされ、思わずふにやりとしてしまう。話には聞いていたが、なんだか落ち着ける雰囲気の人だと思う。鎮静作用というか、ラベンダーやカモミールのような人だ。アロマ的な意味で。

その感想を素直に言つと、少し微妙な顔をされてしまった。

「それ、お姉さんが言ってた事？」
「え、はい」

よく分かりましたね、という言葉は呑み込んだ。アゲハがやつぱり……と言わんばかりの表情だったからだ。

失礼だったと謝ろうとする前に「ミヤと同じ事言われたらちよつと凹んだかも」という返しを受けて、ハンナは思わず嫌な顔をした。ミヤことハンナの兄は、幻獣や動物で表現する事が多い。それが可愛いものならともかく、誰も知らないような珍獣や奇天烈な生き物である事も度々で、それを思うと同列にされるのは良い気分ではない。しかも妙に的を射ているところがさらに面白くない。

しばし見つめ合った後、ドローと言う事で無言のまま手が打たれた。

「ハンナちゃんの家ってどっち？」

素直に場所を告げると、丁度いいやと微笑み返された。

「それじゃあ、家まで見送るよ。私が今から行くところ、その側を通っていくから」

遠慮しないで、とやや強引に手を引かれ、ああ、お姉ちゃんってこういうものなのかな、と母の様な姉しか知らないハンナはぼんやりと思った。

後日、それを知った彼女の实姉は深い傷を心に負ったという。

それで終われば良かったのだが、呪われた血の因果が、はたまた単にハンナが不運だったのか。

何の前触れもなく、どう考えても不運としか評せないタイミングで。

二日後、彼女は最悪な場面に、アゲハとともに居合わせる事となる。

閑話：鬼のいぬ間に

某日未明、矢岸が行方を眩ませた事が発覚したのは、彼が出張所を抜け出した日の昼間であつた。彼の腹心であるマーマンが書類を届けに来た際に、矢岸のデスクじょうしに置かれた手紙を見つけたためであつた。

『一週間有給を取る』

「副所長——っ！——！」

手紙（と言うより書置き）とともに一週間後の分まで処理された書類の山の隣に置かれていた有給申請書を握りしめたパールの叫びは、聞くところによれば出張所三軒隣りの神社の御神木の葉を揺らしたとか揺らさなかつたとか。

叶え屋商会では、通常の顧客が使う受付の他に特別（VIP）待遇の来客用に応接間が存在している。

通常、依頼者は各ブースで依頼内容を書き留めた書類を職員に渡して依頼を申請、その後検討された依頼の内容を担当に説明することで受理される（無論、依頼の守秘のために個室で）。受理された依頼は担当者が適切と判断した職員や登録者に回されて遂行、完遂されたと判断されると依頼料の何割かが支払われるというシステムになっている。

分かりやすい譬えで言えば、RPGでよく出てくるギルド制度に近いだろう。職員の方が頻繁且つある程度自由に依頼を受けられる代わりに依頼料が差っ引かれるとか、秘密保持の割合が高い依頼は職員のみしか受けられないとか、そういう細かいところは長ったらしいので割愛する。

先に説明した顧客に対し、VIPの扱いは少々異なる。ここに通される、と言う事はほぼ100%依頼が受理されるという事である。依頼検討などをすっ飛ばし、かなり高位に位置する職員が依頼を遂行する事も珍しくない。時たま幹部が出張するというのだから相当な扱いである事が窺える。

ここまで聞けばVIPはかなり優遇されているのだと理解することとは出来るだろう。あるいはここだけしか聞いていないのなら、勘違いする人も多いだろう。VIPの持つてくる依頼と、商会とVIPの関係性についてを。

この叶え屋商会では、最重要人物（VIP）とは通常使われるような意味とは異なる。

最重要護衛人物とか、最優先人物などとはまた違った意味合いで

の重要人物。

その、ある種とてもとても厄介な人物を招き入れる為に作られた部屋。

そこに居る、素性の知れぬ人物に持つていく玉露を零さぬよう、威津島は痛む胃を堪えながら、檜製の扉をノックした。

普通、と威津島は考えた（その？普通？という概念が、世間一般で、というか叶え屋商会内で通用するかはこの際置いておくとして）。

普通、こういう役割は美人秘書とかそういう女性が担当すべきじゃあないのだろうか。

そんな事を言えば、同僚のマリなどは男尊女卑かと尻尾を引つ張ってくるだろうし、他の女性からも口々に辛辣な御言葉を頂くのだろう（ああ、通じない、通じないよな。綺麗な美女にそういう事してもらってほんわわ、なんて夢のまた夢なんだよね……。）。口達者腕達者な女性の多い商会内で、そんな先入観を説いたとしても手痛い反論（物理的にも精神的にも）を喰らう事は目に見えていた。ここで働く女性は何かと強いのだ。

まあ、そもそも儚かろうが弱かろうが、芯の通わぬ人物がこんなところで働けるか、という大前提があるのだが。

微妙に涙袋が刺激されたような気がして、威津島は気の所為だと自分に言い聞かせた。そうしなければ目頭を強く強く押さえる事態になりそうだったので。

話を戻す。

繊細な細工の施された上品な檜のドアの向こうから、どうぞ、という返事が聞こえる。落ち着いた中性的な声だ。ちらりと見た外見にぞくぞく、よく通る伸びのある音だと感想を抱く。テノールとアルトの間ほど（テノールと言うには些か高い音域、という程度だが）である筈だが、不思議ととても低いな、と思える声であつた。

ドアを開ければ、丸い黒硝子越しに品性を感じる視線とかち合つた。穏やか、というより静けさという表現の合う視線に、舌がもつれて僅かの間言葉が上手く出なくなる。

「御茶ですか？　ありがとうございます」

「い、いえ」

粗茶ですけど、と口ごもりながら告げる。実際はこの出張所で一番高価な茶葉を淹れたものなのだが、口を衝いたのはそんな謙遜だった。

いや、謙遜ではないのだろう。これはもつと後ろめたさに近い感情なのだと、威津島は思う。だが、後ろめたさを抱く要素など威津島には無い。この人物とは会って1時間も経っていない。いや30分すら経過していないだろう。そんな感情を抱くような関係性など皆無の、完全な初対面である。

だというのに何故そんなモノを、と思うが、何とはなく理由は察していた。多分、恐らく、きっと、という接続詞が付く曖昧な根拠だが。

サングラス越しの、その目が。静謐な夜の深さを思わせる黒の瞳が、鏡のように自分の昏い部分を映しているような心地になる。錯覚、と思えばどれだけ楽か。あらゆる悪徳、あらゆる暗部、人の持つ陰影をそのまま返すような瞳——いや、その表情、態度、仕草のすべてがそうみせているように威津島は感じていた。それは、瞳を見たために、最初からそうだった、と書きされた印象なのか

もしれないが。

ちらりと。硝子越しではなく瞳を直視した瞬間から、今もなおこの人物に対して抱く印象は、恐らく幾ら言葉や時間を重ねても変わる事はないのだろうと確信させられた。

憶測だが、無意識に周囲もそんな印象を抱いているのだろう。だからこそ自分に押し付けたのだろうと推察した。その割に好奇心旺盛と言うか、この謎の人物への興味は深々であるようではあったが、その証拠に、顧客について何か分かったら些細でも良いから教える事と念入りに脅され、もとい頼まれた。

だったら代わって欲しいと声を大にして言いたい。

出来ない事と知りつつ威津島はひしと願った。寧ろ祈った。割と切実に。

数十分、或いは十数分前。ひよっこりとやってきたこの人物はあつさりと気負いなく、

「ちよいと社長に繋いでくれないか？」

さらりと非常識な頼み事を言つてのけた。

当然けんもほろろの扱い——の筈なのだが、一体どういう段取りを踏んだのか不明だが、結果この人物はVIP用の客間に通され、そして先ほどパールが社長に連絡を回したところである。

聞いたところによれば社長秘書直々に、「最高のもてなしを、何があつても機嫌を損ねるような真似はしないように！」という厳命

を受けたそうだと。マジで一体何者だこの人。

そのような扱いを受けるのは、大抵が商社に対して何らかの優位の命を救ったとか、巨額の損害を負う寸でところで救われたとか、社長や幹部の命を救ったとか、プラス寄り優位性を持っている人物であると考えられるのだが、威津島は全く心当たりが無かった。いや、副長付きとはいえ、下っ端なので知らされていないだけかもしれないが。上の反応から窺うに、どうやらどこかの組織のお偉いさんとはまた違うようなのだが……、そこまで考えたところでドン詰まりである。これだけの情報で当てて見せよう言う事自体大分無茶なのではあるのだが。

ともかく。目的も背景も一切がベールに包まれた人物の到来は、叶え屋商会出張所に大きな波紋を広げつつあった。

その渦中の人はといえば、

「この本、勝手に拝借させていただいたんだがよろしかったかな？」

一応の断りを入れて、後は分厚い書物に集中してしまった。警戒している、どこからリラックスしているようにさえ見える。

(……………何なんだ、この人)

自由気ままというか、他人に頓着しない性格なのだろうか。時折出された茶に口を付けているが、視線は本一直線で威津島どころか茶にさえ向けていない。完全に空気扱いされて、怒るところか気が抜けてしまう。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙。ぱら、ぱら。項を捲る音が規則的に聞こえる以外、無音が空間を支配していた。

気まずい。

会って数分、威津島の心中は気まずさと逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

さらに10分、いやそれ以上の時間無言が横たわった。

限界、だった。威津島は勇気を振り絞ってタオルを投げ込んだ。心境は崖っぷちから海へ飛び込む心地である。

「ええと、それじゃあ俺は失礼させて頂きます……………」

なんだか一緒にいれば疲れてしまう、という気がしてなんだか酷く落ち着かない心地になった。日頃上司に振り回されて鍛えられた勘が告げたのだろうか、後になって思う。

「いや、ちょっと待つて欲しいんだけど」

10分以上も本に向けられ続けた夜の瞳が、威津島へと真っ直ぐに向けられた。

どきりとした。

それは決して居心地の悪いものではない。後ろめたい筈なのに、寧ろ居心地の良さを感じてしまいそうになる。

喉の奥が、酷く、乾いた。

「恐らく社長殿と連絡が取れるのにまだ時間がかかるだろう？ この本もあと数分で読み終わるし、暇潰しがてら、この出張所きつての腕っ節のある御仁と手合わせを願いたいんだが」

駄目かな？ 気負う事無い気楽な表情のまま、ちょっとした借り物をするぐらいの気安さで、さらりとんでもない事を乞われてしまった。

どうしてこうなった。

威津島は頭を抱えた。

結論から述べるなら、VIPである人物の願いは叶えられる事になった。いいのか、本当にいいのかこれで。今更ながらに頭痛がする。心労で胃が痛み出したのは気のせいではあるまい。もう不貞寝したい、威津島の思考は逃避に走っていた。

「ルールはそちらが決めて下さい」

「ルールなんぞ不要！ 最後に立っていたモンの勝利じゃ！」

「いやあ、それだとなんだか周囲に被害を及ぼしそうなんだが」

「ふん、いいじゃあねえか、分かりやすい」

「……………一応、殺傷を目的とした行為を禁止、という事は念頭に置いてもらおうか」

後、周りのモノに被害を出さないように、という事で。肩を竦めて最低ラインを定めた。正直ありがたい。何せ、放っておけば上司二人はこの訓練所を大破しかねないので。……一応出来る限りの防護結界張ってるんだけどなあ。頭痛が増した気がしたが、気のせいだと強く自身に言い聞かせた。

——ではなく。それ以前に、そもそも戦うという前提をひっくり返さなくてどうする。どう考えても不味すぎるってこの状況。

あの手合わせ発言の直後、客間のドアが吹っ飛び威津島直属上司が部屋に乗り込んできた。どうやら偶々居合わせたらしいのだが、どんなタイミングだと奇声を発しそうになった。最悪である。

とんとん拍子に話は進み、地下の訓練所に案内する破目になってしまったのだが、更に間の悪い事にそこにはオプシ副所長がいらっしやったのだった。もうこれは一体誰の思惑だと思わず膝をつき、形振り構わず本気で泣きそうになった。

そうして出来上がったのが、？上司二名とVIP一名による乱闘サドンデス？。なんというカオス。錆付いたゼンマイ仕掛けより鈍くなった思考回路がなんとか咀嚼した途端、過剰なストレスで猛烈な吐き気を催した。

『最高のもてなしを』『何があっても機嫌を損ねるような真似をしないように』——どこかで聞いた秘書のお言葉が脳裏を過る。確かに、当人はどこことなく楽しそうで、そして手合わせを望んだのも当人で……だからと言ってこの状況。

「……………はは」

威津島は言葉もなく、虚しげな笑い声を漏らした。
誰一人止められる者がいない。自分では力不足だ。唯一ストップパ

―として機能しそうなオプスの部下は現在彼のこさえた被害収拾に奔走していた筈で、この悪夢の幕を引く人は恐らくいない。

気絶すればこの悪夢から逃れられる気がして、夢と現実の区別が曖昧になりそうになってくらくらした。素直に気絶すれば、放り出せばいっそ楽か。

普通、悪夢から逃れるなら目覚めるのが常套で、悪夢から逃れるために夢へ逃亡するのは斬新だなあ――本日幾度目かの脳内逃避行だったが、それで現実が消える事は無かった。

「さて、それでは始めましょうか」

そんなお気楽な。もうマジ止めて。

「それじゃあ行くかのう――」

ふ、と上司の姿が消えた、ように錯覚した。

ああ、終わった――細切れの意識の中、片隅で思った。予測を裏切る速度は、時に瞬間移動という錯覚を起こさせる。緩急つけた動きに対応できないように、？この距離までしか動けない？という予測した範疇を超えると脳がその齟齬を無理矢理認識させる（人狼の動体視力を出し抜くと言う化け物じみた速さだ、人間には何が起こったかさえ分らないだろう）。

そしてその無理矢理の認識は戦闘においては致命的だ。

一瞬でカタが着いた。予測した光景に、ザア、と顔面から血が引いていった。

しかし、

「おや、驚いた」

どぐしやあ、派手な音を立てて背中からスライディングした上司の姿に威津島は目を丸くした。

二人が接触した、ように見えた瞬間ぐるりと上司がぐるりと反転した。威津島に分かったのはそれだけで、後は今何かをしたのである人物が半身になってしたのだろう、ぐらいいしか理解できていない。

「さて、この程度で終わるにはちと早いが」

言いざま、オプスの繰り出した突きをいなし、流れるように後ろへと回り込み膝裏を蹴る。

「精々、あと30分は持つて欲しいんだがねえ」

相も変わらぬ気安い調子で、気負わぬ気楽な表情のまま、？客？は朗らかに笑っていた。

「……………何これ？」

「まあ、見ての通り」

やって来たばかりのマリの疑問に、答えられる範囲で答えた。

「それが分からないから聞いてんのよ！」

「きゃんっ！ だから尻尾はやめて下さい！ だから、副所長があなたのお客さんにばこばこにされたんだって手合わせで——ッ！」

だから何だよ！　そうがなるマリの気持ちは分からないでもない。あれから20分強、副所長二人は見事に遊ばれた。それは見事に、矢岸に売りつけられるのではと思えるほどの遊ばれようだった。そして現在、「もうギブアップか？」と野次を飛ばす事の張本人に飛び掛かる体力も無いほど消耗しきっていた。

「誰がぼこぼこじゃ！」

「引き千切んぞ犬ところ！」

「尾崎副所長になんてこと言うのよ馬鹿犬！」

「ぎゃああああっ！　スミマセン——ッ——！」

叫ぶ体力はあったらしい。万力込められた尻尾が千切れ、引き千切れる！　今度こそ威津島は泣きだした。

「お嬢さん、社長と連絡はついたのかな？」

「…………ええ」

ついたわ、と言い終わる前に

「それは良かった」

瞬間移動、と錯覚する速さで、マリの目の前に？客？は立っていた。ふわり、とコートの裾と共に一つに結った黒髪が宙に揺れているのが眼の端に映る。

「待たんかコラ！」

「逃げんのか手前！」

「あはは。元気だねえ若人は」

竦み上がるような怒声を笑顔で受け流し、「で、どこに行けばい

いのかな？」とマリーに尋ねている。若人って、どう見ても20代前半、いや20歳前後にしか見えないのだが。

そう言えば、結局名も性別すらも分からなかった。マリーの手を引いてさっさと訓練所を出ていった背を見て、今更のように威津島は思った。

もう何か言う気力は皆無だった。

「やつほー、久しぶりだねえ社長さん」

『相変わらずのようだな。どうせそつちで早々面倒事を起こしたんだろう』

「面倒事なんてそんな。ただ単に副所長らと手合わせをさせて頂いただけなんだがねえ」

にまにまと意地の悪い笑顔を浮かべて言えば、深い溜息が受話器越しに聞こえてくる。

『それが面倒事と言うんだ。……全く、お前は一向騒動を起こさねば気が済まなのか』

「ははっ、あんまり気にし過ぎると禿げるぞ？ お前は昔っから変なのにかれやすいよなあ」

『その『変なの』筆頭に言われたくないぞ。——それで、用件は何だ？ まさか友好を温めに来た、などという戯言を抜かす訳ではないだろう？』

「その遠慮無さは相変わらずだな。まあ旧友の声を聞きたいと言うのも一つなんだが……… ちよつと事後承諾を」

直後、みしりという軋むような電子音が聞こえた。恐らく、いや確実に電話相手が携帯を握る力を入れ過ぎたのだろう。「壊れるぞ携帯」と沈黙に捻じ込んでみる。今度は無音が返ってきた。息遣いさえ全く聞こえないので、携帯から離れて深呼吸か目頭を押さえているのか、神経を落ち着かせているのだろう。

『…………… 一体何をする気だ、』

自分の元役所を厭味つたらしく呼ばれたが、無視。その代わり彼の渾名を呼んでやれば唸り声が聞こえてくる。

「安心しろ、4年前とは無関係だ——と言いたいんだが、全く無関係という訳ではない」

途端、受話器越しから物凄い威圧感が溢れだした。これは相当頭にきているな、と推察する。少々揶揄かいが過ぎたな、とも。

「ちよつとお前さんの秘蔵っ子がこっちに探りを入れてきてね。それを利用して頂こうと思っただけさ。上手くいけば彼の願いは叶えられ、そして私は余計な手を出さずに済む」

『どういう状況か、説明してもらえらるだろうね？』

おお恐い、とオドケてみた。予想通りの逆効果、いやこの場合は狙ったのだから効果的なのか。とにかく相手の空気が緩む気配がな

い。電話のあちらとこちらで雲泥、どころか熱湯と冷水の如く真反対である。

「まあ、リカルドの奴が勘づいたらしくてな。あいつが直接出張ると面倒なんで、私も下手に手出しできないという訳だ」

リカルド、という単語が出た瞬間、冷水が沸騰どころか瞬間蒸発した気配が窺えた。相変わらず地雷の様である。

そんなところが酷く懐かしいような心地になって、思わず喉の奥でくっ、と笑ってしまう。

「ある意味地続きさ——ほんと、あいつの諦めの悪さは天下一品だな。恨まれるのは承知だが、まさかこんな形では流石に驚いたよ」

『……………奴は一体、何をしている』

怒気の孕んだ、まるで噴火する直前のような声にそつと苦笑する。ああ、本当に変わらない。

「東雲さ。あの子の力を運用すれば或いは——というところだな」
『シノノメ……………とは確か、あの時、』

僅かに空いた隙間に捻じ込むように同意する。自分に対してなら兎も角、東雲に対して深く入り込んでほしくはなかった。彼が旧友であるならば余計に。

「あの子はある意味私を正統に継いでいるんだよ。それに私に対してこれ以上ないぐらいの嫌がらせになるしなあ」
『こういう場合、君は先陣切って斬りかかるか徹底的に潰しにかかると思っていたが、思い違いかな』

「いやあ、私とて丸くはなるさ。それにあいつは私を引っ張り出すのが狙いだらう。そうすれば、ジョーンも手に入れられて万々ざ」

い、と言いつつ終わる前に。ばざりブツツ、ツーツー。明らかな破壊音の直後に回線が断ち切れた音が、そして虚しい電子音のみしか聞こえなくなった。何と言いか、相変わらずの保護者ぶりである。いっそ恋愛感情が挟まっていけない分清々しい。

当時は（というか今でもか）保護者に弄られっ子に苛めっ子という三角関係で、時折血を見ないよう仲裁した側としては、傍で見ているとこいつら一生結婚出来ないぞと思っていたものだった。が、その内の一人が子持ちになったのだから、世の中分らないものである。

その一人は、切れた回線の向こう側で腹を立てているのだろうか。まあ相手から切ってくれればと思っただけで、さぞ煽った自覚はある。なので、後で愚痴でも説教でも何でも聞いてやろうぐらいの罪悪感モドキはあった。以前ならモドキさえ無く、単なる対価交換ぐらいの認識だっただろう。いや、今もそうなのだろうが。

「……………すまない」

聞こえない、聞こえていないからこそ口にした謝罪は、やはり口にした当人以外の誰にも届くことなく霧散した。

数分後、社長直々に連絡を受けた職員が蒼葩と名乗る客のいた個室の扉を押し破ったが、既にそこには誰もおらずもぬけのからとなっていた。

十六話：開幕前夜前夜前夜

物語には必ず始りと終わりが存在する。^{プロローグ エピローグ}

しかし、現実になんなモノはない。

もしそんなものが在るとすれば、それは読み手が生まれた瞬間と死んだ瞬間の、二回だけだろう。

——ならば、自分の始まりは、終わりは一体どこで区切るべきなのか。

あれは確か、一週間前の昼前の頃だったろうか。彼の助手の娘が大学から戻ってくる前だったので、確かそうであった筈だ。

ハミル探偵事務所に依頼が持ち込まれたのは、所長のまともに顔合わせをした事のないという知人から電話を受けた直後であった。

その男は牧師の格好をした、この人種閉鎖的な国では目立つ異人だった。まあ、人の事を言えた義理ではないのだが。

名前からしてイタリア人であろうその男は、どう見ても女性を愛する軟派師とは程遠い。浮かべる笑みは酷薄で慈愛とはほど遠い色合いを呈しており、慇懃で大仰な口先から零れるのは優越感よりも更に性質の悪いもので染まっていた。蛇の様な眼光に滲むのは、どう言い繕おうと歓迎できる類ではない。

ある意味で同種であるハミルから見ても余り関わり合いになりた

くない手合いと言わしめる男は、ある人物を引き摺り出したいのだと言った。

しかし、その人物を引き摺り出すのはとても難しい。だから、その人物が大切にしている者を利用したいのだと、男はそう前置きして依頼内容を告げた。

裏の世界にどっぷりと浸かっているであろうに、わざわざこのような場所に依頼をしてくるのだから碌なものではないだろう。そう思っていたが、やはり碌でもない依頼ではあった。しかし、受けない理由はない。気が進まないが、受けないわけにはいかなかった。

男が設けた期限は一週間。それまでに対象の周辺を洗う事。そして今日は報告日の一週間後である。

「これが報告書だ」

「ほう。一週間でこれほどとは、見事な手際ですねぇ」

アンタの使えねえ部下よりはな、とハミルの揶揄に、返ってくるのは悪意を受け流す事に長けた喰えぬ笑みだった。端から期待はしていないのだろうが、それでもつまらんと思っているのだろう、確かに。

「使えそうな情報は纏めておいた」

普段ならば、ハミルは依頼人^{カネツル}には最低限の礼儀は気を遣う。しかしこの依頼人だけは別だった。いや、そもそも依頼人として成り立つ関係か、問えるだけの隙間はある。その間を埋めているのは嫌悪か懷疑かはたまた別のものか、大して興味もないので不明ではあるが。

素っ気なさを通り越して無愛想な態度を、しかし男は気にした様子もない。恐らくこちらが如何なる態度を取ろうとも、男に対して危害を、或いは彼が守護し崇拝するものを害さない限り態度が変容する事はないだろう。それが良いか悪いかはともかく。

とまあ考察しては見たものの、真実が否かは全くの不明である。検証する気もないので未来永劫真偽は不明かもしれない。

さて。本来ならこれは氏が引き受けた依頼である。調査は確かに我々が行ったが、しかし報告だけならば態々ここにいる必要はないだろう、然るに今すぐ退席しても何の問題も無い筈で、

「おい、どこ行く気だ」

「い、いや別にわしいなくてもいいんじゃないかのうむしる邪魔？
だつたら居なくなろうと何の問題もファンゲルツ！」

……… いえいえそんな事まるで思っていないかもしれませんですからそんな目で見ないで下さいよハハハ、などとリーガルは考えていた。正直逃げ出したい気満々である。

時折悪魔より尚悪魔らしい人間はいるものだが、悪魔より数倍恐ろしく凶悪で逆らえば人生ならぬ悪魔生が終わりそうな人間はそういないだろう。だと言うのに、何故自分の周囲の人間はその類が多いのか。本気で泣きに入りそうになる。

「さっさと報告しろ」

「はっ！」

軍兵よろしく敬礼し、リーガンは直立不動で報告を始めた。本人としては横目で見たきつとたぶんおそらくそのつもりなのだろうがレーザービームの眼光（命名：峪梨）は疚しいところは無くとも恐ろしくあった。レーザービームとは言い得て妙、向けられただけで

突き抜け焼きつくす暴虐辺りが良く似合う、などと常々リーガンは思っていた。自分が大事であり且つ聡明であるので一ナノメートルも表に出す気はないが（それでもばれていないと断言できない、恐ろしい事に）。

リーガルの心境としては肅々と且つギスギスとそしてつつがなく報告が進行していく中、隣で瀕死になっている彼の友人（仮）を顧みる人物はいなかった。誰一人。

「……………成程。それでは、この娘を餌に彼を誘き寄せたいのですが」
「逢引の手筈なら、報酬は弾ませてもらうぞ」

ハミルの皮肉った言い回しに、しかし男は動じることなく愉快そうに笑みを深めて見せた。

「ええ、言い値で構いません」

？条件外？ですしね。男はそう言うてにつこりと微笑った。

終始存在を無視（というか気にも留められる事はなかった）され続けた桐原（現在進行形で床のシミになっている）とともに客人を送り出す。普段なら酷いとか何とか喚き出す床のシミは、そんな事をすれば確実に本物の床のシミと化す事を本能で理解していたのか、最後まで静かなままだった。珍しく賢明な事である。

「お前ら、今日はもう帰れ」

「は？　しかし、いえ何でもありませんそう言えば今日は家の用事がさあ帰ろうかキリハラクン！」

「は？　いや今日こそは可純嬢の胸を揉むまでは返らんぞ？」

——空気読めや糞爺いい！！

叫ぶ。心の中で。貴様ほんとに黙れお願いします。

先の言を撤回する。賢明などこの男には到底に合わないのだと、心底リーガルは思った。というか学習能力がないのか。一体今まで何度どういう目に合ってきたのか覚えてないのか痴呆か健忘症か。怒濤に流れゆく罵声の反面、リーガルの背にはだらだらと嫌な汗で気持ち悪いほど湿っていた。

まずい。このままでは巻き込まれる——世に言う死亡フラグを建てるわけには、と思う反面、上滑りするばかりで現状打破の一手は思い浮かばない。

「——いいから帰れ」

怒りもせず、不機嫌さを滲ませず、ただ静かに退去を命じる声に、今度こそリーガルは凍りつく。

そして悟る。

この命が、掛け値なしに最終通達であるという事を。

「さっさと行くぞボンクラ！ それでは失礼させていただきますハミル氏！」

「こきゅっ！」

疾風怒濤の勢いで、同僚の襟首を鷲掴んでノーモーションでスタートを切った。握った際奇妙な？音？がしたが、それさえも関係なく疾風の如く退室していく二柱の悪魔たちに、ハミルは既に興味を

無くしていた。

世に言う悪魔、という存在であれども、自分の生死与奪を握る相手に怯えるのは――否、悪魔であるがゆえに余計、当然の理なのである。

「はあ……はあ……はあ……、貴様は馬鹿か、氏を怒らせる気か」

「げええぐおおええええきゅおおおううう……」

「言語で会話しろ、言語で」

リーガルは地面にへばり付く同僚を冷めた目で見やり、口にしようとする先を促してやる。

「て、てめ……く、首の骨折れるかと思つたぞ……」

確かに、あと数メートル引きずられるか、はたまたあと数キロ握力が加わっていれば、桐原の頸椎は確実に砕けていただろう。そうならなかったのは、リーガルの観察眼と力加減と心遣いの賜物だった。人はそれを確信犯という。

普通なら絶交ものだろうが、幸いにして桐原という名を人界で名乗る男はどんな事も一秒で無かつた事になる鳥頭だった。どれだけ

怒っていても一度堪えればすぐさま忘れ、恨みが後に引く事もなく復讐などという単語とも縁遠い結果論的に刹那的な男である。

「なんじゃ、ハミル、えろう機嫌悪かったのう。あの男、何者なにもんじゃ？」

「さて、私は知らんな」

事実、リーガルは俎上に乗った男について何も聞かされていない。ただ、只者ではない事、魔術に精通しているであろうこと。そして、

「魔都 の関係者とは、皆ああののでしょうかね」

人に 魔都 と呼ばれる歪みの深部の？移り香？を漂わせていた事ぐらいしか、判別できる事はない。

「まあ、我々に被害が及ばないのならどうでもよい事だろう」

「そうじゃのう、ついでにあの陰険面がくたばれば万々歳じゃわい！」

しかし、それはどうでもいい事だった。自分が良ければそれでよし。それが彼らの根本であり根源。文字通りひとでなしの彼らに、人間の道徳を説く事は全くの無意味である。

ビルに張られた結界と連動する魔書から通じる異界——彼らの出魔界いすけにて、しばしの休息を充実したものにせんと、それぞれがそれぞれそれぞれの穴倉へと帰って行く。その後ろ姿はすでに、人ならざるものであった。

「あ」

「ん、どうした爺。まさかなにか——」

「えろうってなんかエロいに聞こえんか？」

どうじゃどうじゃと喚いている桐原へ白けた視線と嘆息を向けた後。リーガルのかろうじて人のそれであつた爪先が同僚の顔面に貫通痕を残さんとめり込んだ。

■ ■ ■ ■

峪梨可純がハミルの下につく事になったのは、彼女の預かり知らぬ出来事の結末として用意された事だった。

元々、それまで世間一般のそれと同じ平穏で退屈な日々を送っていた峪梨は、確かに変化を求めていた。

ここではない、どこか。

ここにはない、なにか。

——しかし。

果たしてその欲求は、世間一般のそれと同じものだったのだろうか。最近、ふとした瞬間に峪梨の胸を過る疑問に、未だ答えを出せていない。

悪魔。

この単語を聞けば、大抵の人はこんな単語が思い浮かぶのではないだろうか。

魔界、神、天使、敵対者、悪魔憑き、害、悪者、蝙蝠の羽、尻尾、ファンタジー。

まあ、大抵の人が思い浮かべるイメージは碌なものではない事は確かだろう。

そして一部の者——専門家や関係者など専門用語として知る者なら、こう思い浮かべる筈だ。

『世界の法則を捻じ曲げる存在の総称』。

この分類には、異界からの来訪者が挙げられる。つまり（一部の無害と判断されたモノを除き）、異界人は総じて『悪魔』であるということだ。

この括りは何も乱暴であるわけではない。

そもそも異界———この世界という枠の外側から『物質』が送られてくると言う事は、世界に内包される質量が増加すると言う事である。それが僅かなら、或いは既存の物ならばまだ良いだろう。しかし、それが大量に、そしてその世界の法理に存在かがれしていない物であつた場合は深刻である。

世界とは寛容な器であり、その実酷く繊細でもある。対外においては枠が歪む事などまずないが、反面对内においては酷く脆い。

例えば、スクリーン越しに話しかけても意味がないように。例えば、直接触れなければ物を動かせないように。

しかし、悪魔を送還しようとも、己の意思で世界に潜り込んだ者ならば再びこの世界へと来るのは容易に想像がつく。

例え殺しても、物質はこの世界に留まり続けるし、死骸を送還しても溢れた血や臓物など？別物？として定義された全てを送還するのは酷く手間がかかってしまう。まして、悪魔を殺すために必要とされる労力は如何ほどか。それによって擦り切れる人材は、穿たれる厄災は。

——ならば。

その思想が出現したのは、ある意味で必然であつたのかもしれない。

逆の発想はどうなのだろうか、と。

この世界に組み込まれていない存在を、この世界に組み込んでしまえばいいのではないだろうか、と。

その思想を元に、とある魔術が生み出される事となる。

名を、^{グリモアール}魔導書。グリモアとも呼ばれる魔導書は、悪魔への制約を、強制を代償に、彼らをこの世界に在る者として定義する第二の心臓となった。

悪魔の定義に括られるのは、異界人だけではない。世界が果たす自浄作用。その絶対無非から逃れ得た、僅かな存在も同様の括りに入れられる。そして、彼らは元からこの世界に？在る？が故に、グリモアの制約も強制も受ける事はない。

その世界を歪める、その世界から生まれ出でた存在。＜矛盾点＞。

峪梨可純は、＜矛盾点＞の血を引いていた。

何の特性も特質も継いでいない、極々普通の娘。その娘に付与された、歪な背景。^{バックヤード}しかし、ただそれだけであり、それは珍しくは有れども特殊でも特別でもなかった。……けれど、歪な事に変わりはなく。

それでも平穩に。それでも、退屈に日々は過ぎていった。生涯、過ぎていく筈だった。

—— お別れだ、可純。達者でな。

過ぎていった日々に終止符を打った声は、未だに脳裏から耳朵から、離れる事はない。

「はい、もしもし？」

『峪梨君。シフト変更。明後日の昼に来て』

「へ、え、明後日って友達と予定が」

『拒否権はない。それじゃあ』

ブツツという遮断音を最後に、ツーツーという虚しさを喚起させる電子音しか聞こえなくなった。

なんて無茶苦茶な、と思わないでもない。瞬間的に怒りが沸々と湧き上がり、しかしそれが表層に現れる前に落ち着きを取り戻した。今ここで怒鳴り散らしても意味はない。精々虚しくなるだけか、周囲から痛い目で見られるくらいである。

今から電話を掛け直しても、或いは今から乗り込んでいっても先

の決定が覆されることはないだろう。

溜息を吐く。どうせなら、経費と偽ってやけ食いでもしてやるうかしら、と思わないでもない。しかしその後の手痛いしっぺ返しを思えば、実行する気などさらさら起きる事などある筈がないのだ。別に諦めたわけでも、まして怒りを鎮めた訳でもない。ただ怒りが下へ下へと潜って行っただけ。

上司の顔を見た暁には、マグマの様にドロドロと圧縮された鬱憤を噴火させると胸に刻んだ。

そして指定された2日後、彼女は夜の獣と遭遇し、友人をバイト先に引き連れてくる事となる。

上司の意図も目的も全く知らぬままに。
上司もその偶然を全く予測せぬままに。

そして3日後の夜。再び彼女の預かり知らぬままに幕は開ける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0372v/>

黒と彼らの関係性

2011年11月12日12時08分発行